

斗 20 97

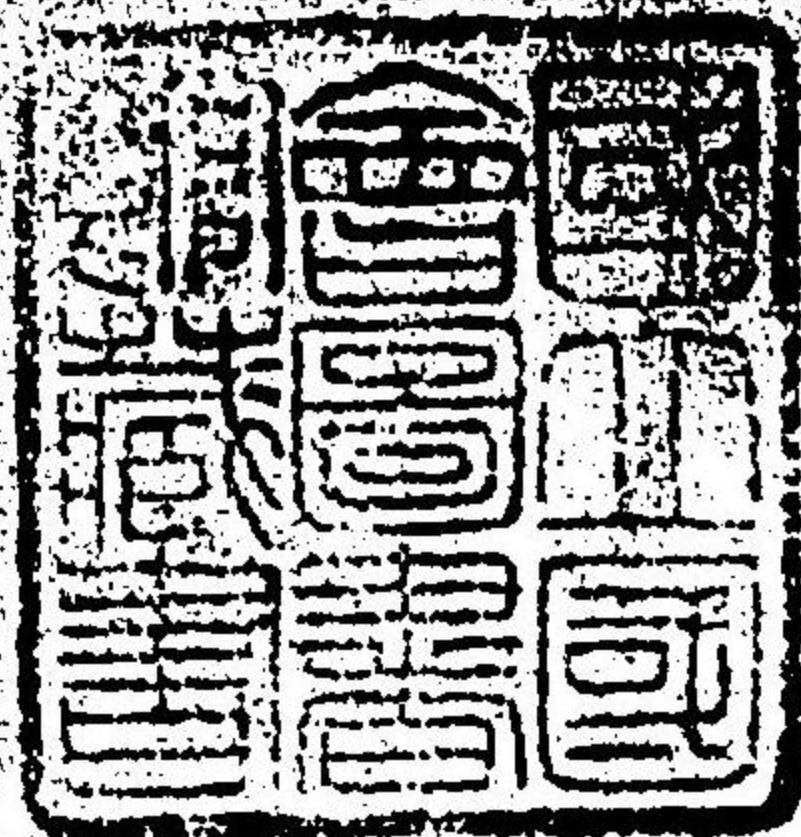
# 近世名匠談

森大狂





721.028/M759r



昔者文徵老自題其米山曰。人品不高。用墨無法。乃知點墨落紙。太非細事。必須胸中廓然無一物。然後煙雲秀色與天地生々之氣。自然湊泊筆下。幻出奇詭。若是營々世念。澡雪未盡。即日對丘壑。日摹妙蹟。到頭只與髣采。坊塲之工。爭巧拙於毫釐也。余尋常論畫。好稱此語。會近世名匠談排印成。乃錄代序云。

庚子春三月五日大狂居士識於梅花無盡藏。



337264



## 例言

近世藝苑中よく越祖底の妙腕を揮て、丹青天地を黼黻したる名匠その人に乏からず。そが中にも、狩野芳崖、菊池容齋、狩野一信、森寛齋、田崎草雲の五家のこときは、もとも著るきものなり。五家の名は、夙に藝苑に轟きて雷霆のごとく、その製作は、相傳へて洪壁のごとく、天下また五家の近世有数の名匠たるを知らざるものなし。されど、五家の事蹟行狀のつばらなるものいたりては、世よく之を知る者太た希れなり。余ふかく之を憾とし、東搜西索、ひろく故老に質して、この書をものしつ。希はくは、わが近世美術史を補ふに足るものあらむか。

余のこの書を著すにあたりて、子爵故品川彌二郎君、小原重哉君、河瀬秀治君、野村文舉君、岡倉秋水君、岸田吟香君、松本楓湖君、菊池武麿君北堂、久保田米僊及ひ米齋、金仙の三君、大村西崖君、山元春舉君、森雄山君、大岡長峽君、巖島虹石君、武内桂舟君、堀紫山君、本誓寺福田循誘師、莊原好一君、田口米作君、羅漢堂一純君、松井金子君、相場古雲君、川島瀨石君、佐藤豊藏君らみな大に賛し、或ひはその手記を示し、或ひは搜索の便を與へ、或ひは遺事を語り、余をしてこの業を完からしめられたりき。特に此に記して、その厚意を謝す



目 子

狩野芳崖

菊池容齋

狩野一信

森 寬齋

田崎草雲

一

五二

八九

一〇一

一六一



狩野芳崖翁





東京美術學校藏

(筆 嵐 芳) 音 觀 持 子





(筆 嵐 芳) 圖 人 仙



(筆 嵐 芳) 水 山

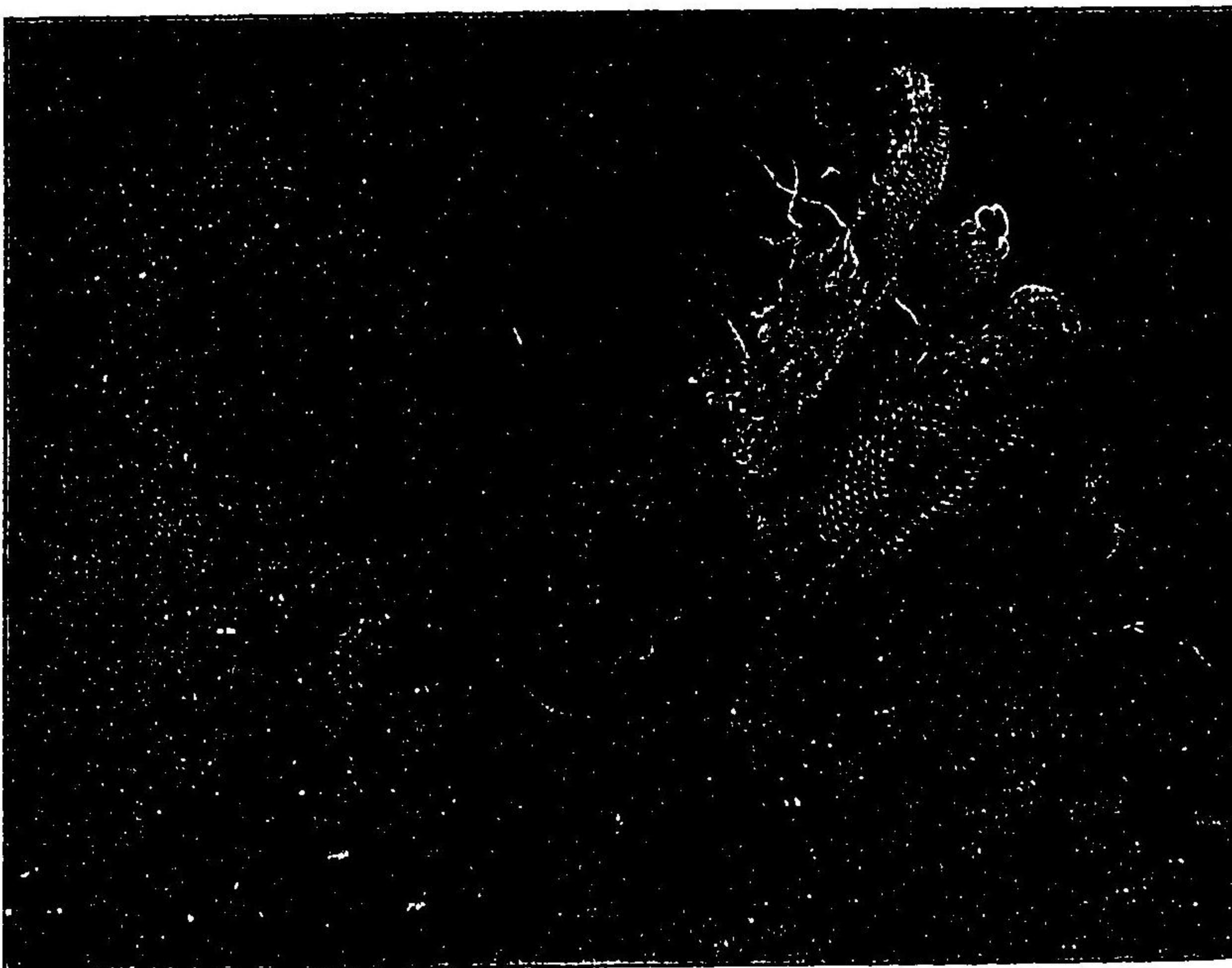


橋本雅邦氏藏

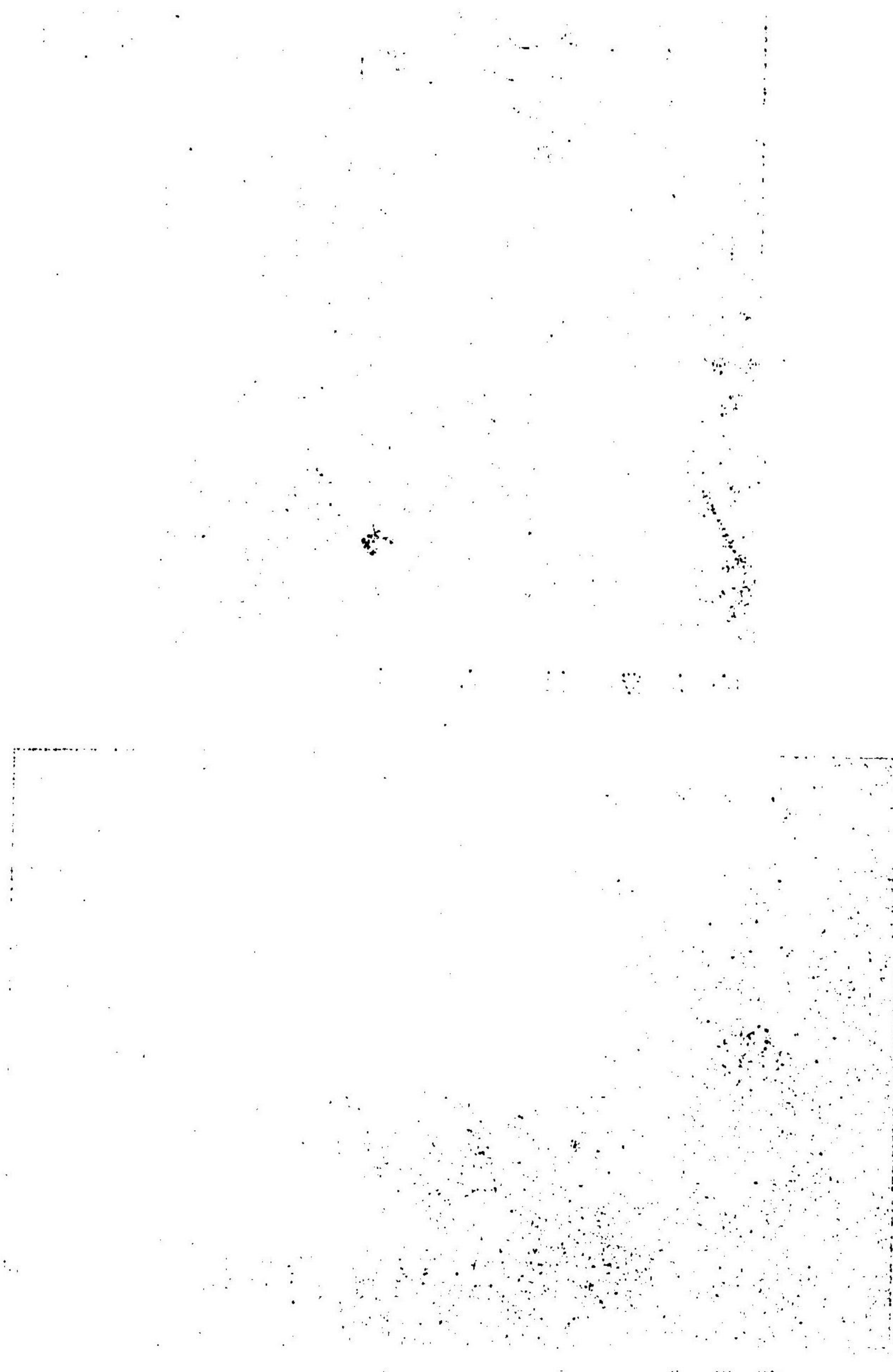


(筆巖芳) 畫 虎 見 覺 香

佛國アルナト氏藏



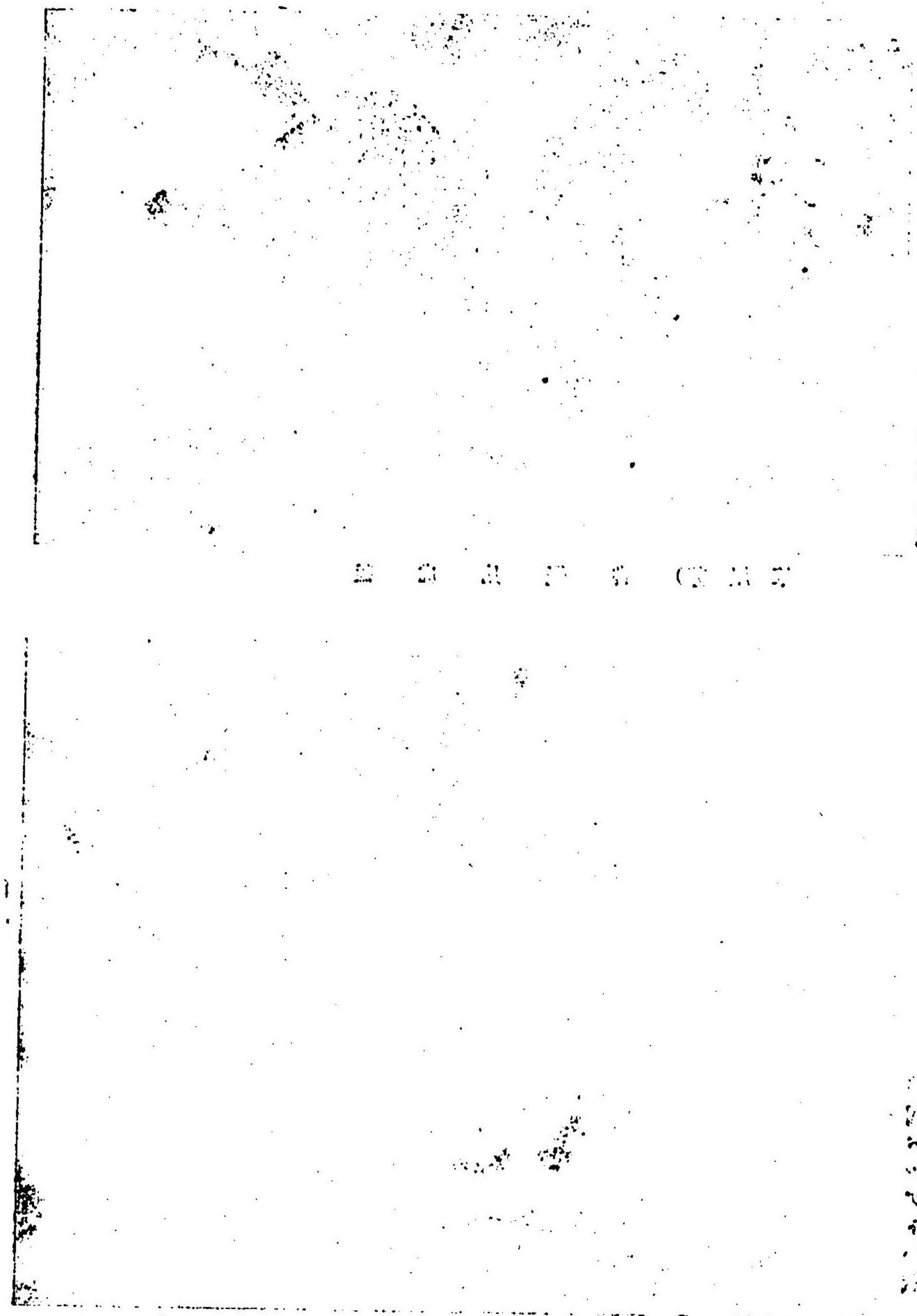
(筆巖芳) 圖 龍







山 水 (芳 巖 筆)



山 水 (張 景 雲 筆)

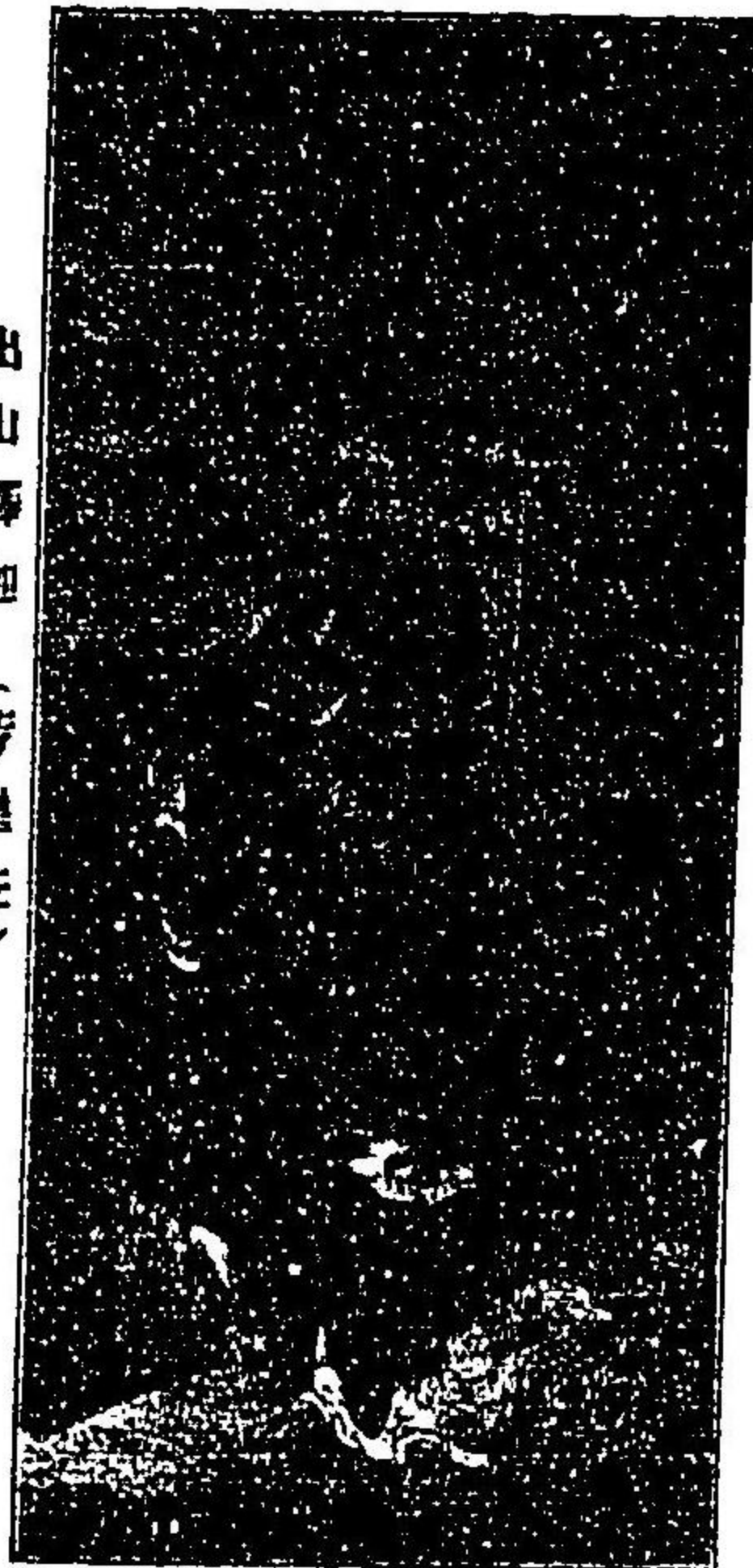




森 寛 齋 翁



白衣大士 (寛齋筆)



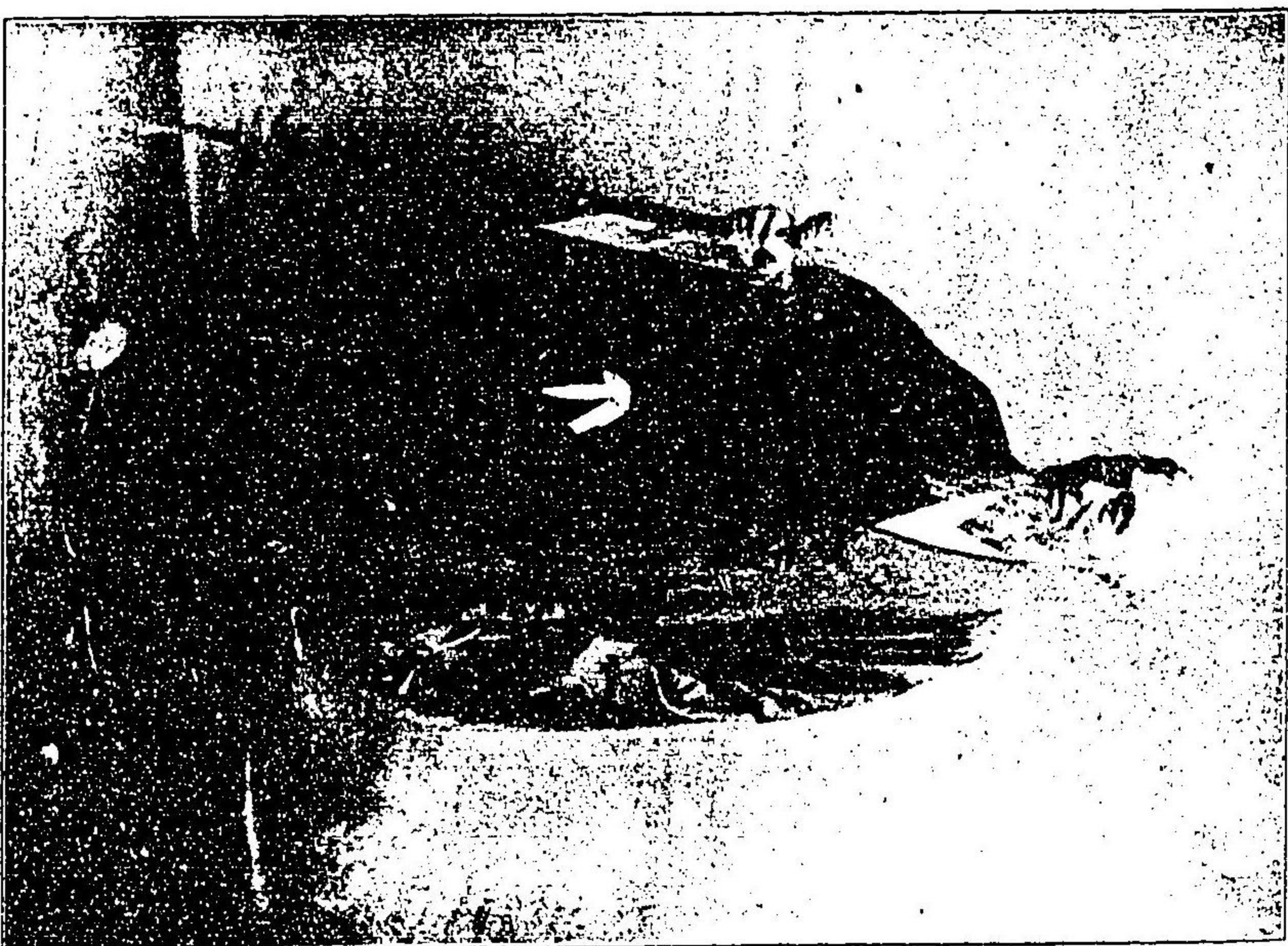
出山釋迦 (芳崖筆)



（筆雲草）水山中 雲



雲草崎田





# 近世名匠談

森 大 狂

## 狩野芳崖

嘉永安政よりこのかた長防二州の志士が天下に先だ

ちて力を君國に盡しつひに能く今日の盛事を致しその身は臺閣の上に翱翔すその事赫々として人の耳目を照破するに足るものあり。然はあれどこれらほみな國家經營の上における文勳武功に屬す。尙しその力を美術上に盡して昇平の化を助けその績のいと大にして長防出身の臺閣諸公が文武の勳と相匹敵するに餘りあるものを擧ればわが狩野芳崖實にその人なり。

三十年來わが繪畫界の名匠はなほだ少からず東に狩

狩野芳崖

野探美、永應さては勝川門下の橋本雅邦、狩野勝玉、木村立嶽をばじめとして柴田是眞、野口幽谷および曉齋あり、西に森寛齋、岸竹堂、鈴木百年、幸野梅嶺或ひは守住貫魚の如きまた南宗畫にて竹田以後の名手と呼ばれたる中西耕石などのとき名匠ありて互にその長ずる所に向て伎倆を振つて美を闡はし巧を競ひたりきといへどもつひに能く芳崖の上にいづること能はざりき。曉齋人と爲り磊落にして細墨の外に逸出すつねに酒を被りて高談しその眼中に古人今人なく口を極めて一世の畫師を罵倒したりしかど唯だ談一たび芳崖に及べばすなはち曰く「芳崖さんか、彼には乃公も一二目置く」とまた寛齋のごとき



はつねに芳崖を評して雪村再来となしたりきといふその當代諸家のために推重せられしを窺ふにあまりあらむ。芳崖は實に繪畫界における金毛の獅子王なりきその隣蹠の側には異獸の足を措くの地なきがごとき觀ありき。いでや今試みに此に活捉し來らむ。かつて替ふるに長防二州の士林には往にしへより大に繪畫を好むの風ありて毛利侯もまた之を獎勵したりき。ことに豊浦藩のごときは渡會、諸葛、狩野の三繪師あり渡會氏は土佐派をもてし諸葛氏は南宗派をもてし狩野氏はすなはち狩野派をもてし世々その業を修めて藩に仕へたりき世に之を長州の繪師三家と呼びぬ。維新の前にあたりて土佐派の渡會東明、南宗派の諸葛秋錦、狩野派の狩野晴皋がひにその技を競ひて藩の繪御用をつとめたりき。三人の中にも晴皋は狩野伊川門下の神足として名手

の聲譽一時に高かりき。晴皋人と爲り豪放にして小節にかゝつらはず權貴の門に俯仰することをきらひ貧弱の者を見れば食を與へその衣を脱して之に贈り厚くこれを遇してさながら骨肉を見るがごとく頗る古俠者の風あり故をもてその家つねに貧しかりき。いつの頃にやありけむ貧ます／＼太甚しくめぼしき家財は售りつくして米薪に身へ室に一長物なく門には債鬼むらがり來りて迫ること太だ急なりされど晴皋つゆばかりもそを胸に介まず債鬼がのりし騒ぐ聲を空吹く風に聞なして依然酒にふひしれて高談するばかりなりしかばその室伊秩氏もさすがに堪へかねてこのさまをいかにしたまふとかちけるに晴皋なほ之を事ともせず伊秩氏つひに出でゆかむといふ晴皋、汝いづくにゆくにや伊秩氏そは君のお世話には成りませをさじ妾が鼻の向きたる方にまゐらむばか

りぞとあるに晴皋すなはち聲高らかに打笑つていはく汝が鼻は天に朝せりそが向きたる方にゆくといふからは定めて天上するなるべし晴皋この年になるまでいまだ人間の天上するを見たることなしこは幸なりいざ拜まむいざ／＼とあるに伊秩氏もおぼえず吹いだして後は笑ひとなりてやみにきといふこの事は一時豊浦人士の間ひろがりたる話柄なりき。この一事を見ても晴皋が洒落不礙の奇男子なりしを知るべきなり。

晴皋の繪事における伎倆は伊川の許を得て狩野氏を名乗るほどありて（もと諸葛氏といふ）頗る能く狩野氏の神のあるところを悟り眼高く手快にしてその師たる伊川法眼の墨を摩するに足るものありてまた當時の一名匠たるをうしなはず。然れど當時藩國のならひにてみだりに他國の人士と相通することをお

るさず况いてその地の西陲にあるのゆゑをもて晴皋かほどの伎倆ありながら不幸にしてその名は長防二州のほかには知られざりき晴皋のために惜むべきの極みなり。豊浦藩の子弟にして晴皋の門にあそびて繪畫を學びたるもの無慮數十人に下らざりき。そが中にも藤島常之、諸葛信澄の二人もともすぐれてその室に入り優に一家を成すに足るものありしかどこれとてもまた長防二州の藝林の間にもてはやされたるに過ぎざりしなり。

晴皋は性はなほだ巧智に富みて繪畫の外のものにても苟くも美術と名のつきたるものは曾ていまだ學ばざる所といへども自ら工夫をこらして之を作り太だ巧なりき。鍍金また彫刻のごときもまた時に之をまねび形のかしき花瓶、置物などを見るときは之を



借りかへりて製作をはじめ幾たび失敗してもつゆ厭  
くことなくまた始めより構思し寝食をも忘れて之に  
従事しそが意のごとく成功するを見れば決して己  
めざりき。さてその作れる所の物の中には多年其道  
に心を苦る名工といへども舌を捲きておどろくば  
かりのめでたき製作物もありきといふ。  
晴草また刀剣を研ぐの術に通じ頗る得意なりき古へ  
の名工の作に係る所のものは自ら願ひても之を研ぎ  
て勞をいとはず研上ては之を樂みその自家の物たる  
と他人の藏たるを知らざるものごとし故に藩の子  
弟の腰の物は多くは晴草の手に依りて研上られたり  
き。  
さてこの狩野晴草がその室伊秩氏との間にまうけた  
るものは毫端より大光明を放ちて明治の繪畫界を照  
破したる狩野芳崖なりき。

またこの事を思はざるにはあらねど家いと貧しくし  
て彼がために遊資を辨ずること能はざるをもて空し  
く過して今日にいたれるのみ。二人のいはく我ら子  
が家のために之を謀らむとてすなはち共に之を藩の  
老職に説きたりしに老職もまたそを可としてその間  
に斡旋するところありしかばつひに藩費をもて十年  
の遊學を許さるゝことゝはなりき。  
芳崖がはじめて江戸に來りて木挽町の狩野繪所に入  
りしはそが年十九の時なりといひまた一説には二十  
一の歳なりといひ今さだかにいづれが眞なるを知ら  
ねどとにかく弘化年中のことにてありしならむ。芳  
崖すでに狩野繪所に入りて贊を勝川院法眼雅信に取  
りその諱の一字をもらひ更に名を改め勝海雅道と稱  
しき。これぞ實に芳崖が一代の大畫師となるの鹿島  
發にぞありける。

芳崖は文政十一年の正月十三日をもて豊浦において  
生れき。をさなき時の名を幸太郎といひ長ずるに  
及むで早隣と改め翠庵と號しまた別に貫甫といひ  
ぬ。  
如上に説くところの如く父晴草は身を終ふるまで屹  
々として心身を技術にのみゆたぬ家事を顧みず芳崖  
の教育のごときもまた之を一に伊秩氏の手に任せた  
りしかば芳崖の年すでに弱冠におよぶ頃までもふ  
かく督促して繪半を學ばしめざりき。  
渡會氏、諸葛氏らふかくこの事を憂ひ一日晴草に語  
りていはく子が家我らと共に繪畫をもて藩祿を食む  
もの然るに子が長子すでに弱冠におよびていまだ  
専ら業を修めしめずこはまたくそが家の職を曠しく  
するものといふべし請ふらくは早く江戸に遊ばしめ  
て狩野氏の繪所に學ばしめたまへと。晴草いふ我も

そも徳川氏が探幽常信を用ゐたるよりこのかた  
繪畫の權すべて狩野氏の手に歸しき。故に尙くも畫  
を學ばむと欲する者多く來りて木挽町の繪所に倚り  
日夕出入する者一百人に下らざりき。芳崖すなはち  
これらの諸生と相共に激勵して學ぶことおほよそ十  
年ばかりなりしが業大にすゝみ遂にその弟子頭とな  
りき。當時繪所にありし者の中にて芳崖、雅邦、勝  
玉、立獄の四人もともすぐれたるものにて勝川門下  
の四天王と呼ばれたりき四天王の中にてもまた芳  
崖、雅邦の二人をもて二神足となしたりき。繪所の  
諸生つねに繪合なるものを組織して源平兩派に分れ  
たりしがその兩頭には必らず芳崖と雅邦を推選し勝  
川の點數を得て勝敗を決したりきといふ。  
然れども芳崖もと奇抜の才あり一生面を繪畫界に開  
かむとするの志ありて勝川にはふかく悦ばれざり



しものゝごとし。けだし狩野氏の法たるや一にこれをその祖に則りつゆばかりもその細墨の外に逸出することを許さず探曲の法にあらざればすなはち之を目して邪道となし常信の制にあらざればまた稱して破格となし生意を閉却しおほむねみな探曲常信の精粕を嘗めてその死法を墨守するに過ぎざりしかど因襲の久しき習性をうつし當時また之を怪しまざるのみならずそを宜きこととなしたりき。芳崖ひとり探曲常信の精粕を嘗むることを屑しとせず常にその弊を擧げて繪畫の得失を論じてやまず。かゝりければ探曲の法をもて動かすべからざる典型となせる所の諸生は皆多きをきて目するに狂人をもてしその説に耳を傾るものなきのみならず之と語を交ゆることさへも避るにいたりぬ。たゞ橋本雅邦のみ之を惜ひ共に相盟つて畫相を一新せむことを講じそが交情

の密なる骨肉も質ならざるものありき。のち二人とも明治の昇代に遭遇して相携て力を美術上に竭して之が草進を謀りたるは實にこの時に基きたりしならむ。芳崖が雅邦の一女をとりてその養子廣崖にあはせたる、また雅邦が鳥津家の犬追物圖を芳崖にゆづりたるなどを見ても二人が相得たることの上のつねならざりしを知るに足らむ。我國の繪畫の衰へたる所以を綜ぬるに素より種々の原因ありといへども主として各々その流派を異にすると共に一の動かすことを許さざるの規則を造り一歩もその範圍の外に出ることを許さざるに由らざるべからず。見よ我國漢畫の氣運は可翁、等楊、元信よりますます進歩して遂に探曲を打出し能く繪畫の大成を見るに至りたりしかどその制の嚴なる飽まで之を墨守せしめたるをもて習性を移し一箇半箇も能く

一躍して祖師の頂額を越ゆる底の英靈漢なくして滔々たる天下の繪畫みな死物となり了ぬ。この故に芳崖の草進を謀るや先づ舊來の狩野派における線繩を切斷し一筆一點も取て古人の跡を踏襲せず一に自家の靈臺より喚起し感極り興到りて後に腕を揮ひたりき。されば當時の人みな芳崖をもて謀反人となし邪宗と呼びたりしかど芳崖つゆ顧慮する所なく平然として自家の信する所を行ひたりき。是れ究竟今日のどこき薄志弱行の輩の及ぶ所にあらざるなり。芳崖かつて筆法を論じて曰く古來畫に筆法あり又流派に從てその描法を殊にす眞の筆法に至りては雲の如く龍の如く變幻自在にして端倪すべからざるものあり凡そ繪畫には意匠を第一とし技を二とす如何ほど健腕なるも意匠にして見るに足らざれば之を神品となすべからず今世筆をもて第一として論ずる者

太だ多しといへども皆然らず筆は自家の胸中に有る底の物を現はしむる一箇の器具たるのみ若しその畫帖に向ふ時に當ては筆は即ち自家の精神を現出するものなれば手に握る所の筆は一の器具にあらずして自家の肉體と同じからざるべからずその内外機熟して筆正さに紙上に落ちむとする時傍に人あり刀をもて筆を切斷するにその切口より血淋漓として滴り出づるあらば始めて畫をつくるべきなり。繪畫に當る所のものは實に精神にあるのみされば畫は筆をもて教ゆべからず筆をもて學ぶべからず要するに唯だ心田を開拓するをもて第一義とす探曲以後は教ゆる者學ぶ者ともに第一義を失却せり試に探曲以後の狩野家を見ずや應舉以後の圓山派を見ずや唯だ筆墨のみもてその祖その師の形似を學び毫も天真爛漫たる趣あるを見ざるなりと。然るに當時よく道般の語を解



する者絶えてなかりき。

諸流派の中その氣格の豪壯なるものあり或ひは清高なるものあり或ひは寫生に巧なるものあり互ひに長所ありといへども設色の一事に至りては古來狩野派をもて上乘となす所なりき。然るに芳崖ひとり狩野派の法をもて尙は盡さざる所ありとなして大に工夫し頗る發明するものありといふ。ある時勝川が下谷常樂院の囑をうけて壁上に麒麟を描きしことあり芳崖また師命に依りてその助手となりて設色の勞を願ちたりき。元來狩野派には嚴びしき法則ありて筆法は素より言ふまでもなく配色にいたりても皆古法に則り定の式を踏まざるべからず麒麟の腹色のごときも黄土を塗るをもて古來よりの式とす。さて芳崖が着色を加ふの時に當りて全幅の位置および配色などに注意するに古式に依りて設色するの大に配合

を缺くの點あることを發見しさまざまに工夫して黄土に混するに他色を以てし之を塗るに古式に従ふよりは大に勝る所あり芳崖心ひそかに悦ぶ勝川の之を見るに及んで大に怒り破門を命じて逐はんとす雅邦および勝玉らその間にありて調停する所ありてその事己みたりき。このうちも屢々此の如きことあり諸生大に芳崖の爲めに危むもの多かりしが芳崖は常に笑つて少しも意に加へず勝川もまた芳崖の爲す所却て古式に勝るものあるを以て後には見ぬふりしてまた深く咎めざりきといふ。

芳崖は勝川の門にありといへども既に醇然として自ら一家と成し勝海の名やうやく都門の藝林に噴き初めぬ。たまく佐久間象山來りて江戸に在り芳崖の畫を見て大に悦び自ら之を繪所に訪ひて畫を乞ひまた題畫の詩を賦して贈りき。芳崖乃ち自から謂へ崖をしていまだ容易にその宿志を成し初むるを許さず。

安政中、佐久間象山が事ありて長州に赴くや芳崖もまた之に従ふて郷に歸り五人扶持の祿を食みて父時卓の後を襲ぎ藩の繪御用を勤め鳥山氏の女を娶とりて家を成しぬ。是れ實に芳崖がその年二十八の時なりき。

安政より萬延、文久を経て元治に至り長防二州が勤王を唱へたるの結果幕府の長州征伐となり外艦の下ノ開砲撃となり或ひは俗論黨との紛擾ありて事愈よ出で、愈々繁く長防二州を擧げてさながら鼎の沸へたるごとくならしめたりき。されば藩の繪御用なるものも絶えてなくまた人の寸絹尺紙を携て繪を乞ふ者もなきにいたりぬ。

長防二州はかゝる有さまなりしかば士といふ士男と

らく意匠は本なり技は末なり心竅洞然直に天地と融通し技をして道に進ましむるにあらざるはその妙つひに神に入ること能はずとて象山に語るにその心事をもてし束脩を修めて教を乞ひき象山ふかくそを嘉みし提撕いたらざるものなし後その國政に參するに及んで大に補助して激勵を加へたりき。けだし芳崖には前後三人の知音底あり曰く佐久間象山、曰くフエノロサ、曰くヒケロー是れなり而して之を初めに

歸りたる者は實に佐久間象山一人のみなりき。芳崖今や技を鍛ひ心を練り一代の俊傑佐久間象山のごとき人の悠揚するありて將さに二百年來委靡振はざる繪畫に革進を加へ一大毫光を發揮せむとなしき。然るに米舶忽ち我が海門に來りて三百年間昇平無事の夢破れ久しく天下を靡みしたる徳川の威風も今は昔のごとく競はず國事漸く多端になりしかば芳



いふ男は我がちに剣を握り銃を操りて國事に奔走して狂するが如し。芳崖もまたさすがに畫舫の中に筆を吮ること能はずして壯士の後に追隨することゝはなりぬされど幼より繪畫にのみ心身を委ねたる身として劍ぬく術をも知らねば鬪争の間に馳驅することもならず如何にもして國事の萬一に盡さむものゝ種々に考へたる後に大砲鑄造の助手を成しき。そは狩野氏の隣に松岡氏なる者あり蘭式砲術をもて藩に仕ゑ當時のこととしてその業最と多事なりしかば芳崖乃ち父の門人藤島常之を晤らひて松岡氏の鑄造所にゆき日夜その手傳を成したりき。

芳崖が國に歸りてより以後十年間その畫きたる所のものは僅かに藩侯の肖像と長防の地圖の二枚のみなりしを見ても當時の情を想見するに難からざるなり。

さて漸くにして幕府は倒れ四海の浪風も治まりて明治の維新とはなりぬ。長防二州の同藩士は概ねみな春風得意、仕途に上るにひきかへて獨り雪窟風雲の冬に逢ひしは芳崖なりけり。

太政維新諸外國と交通するに及びて百般功利の事彼の大に發達せるに驚き一に彼の制度文物を學ぶことゝはなりけり。是に於いて世を擧りて泰西を崇拜し愈よ趨りて愈よ下り泰西の說にあらざれば耳を傾るに足らずとなし泰西の術にあらざれば以て學ぶに足らずとなし遂に我國從來の美事をも悉く捨てし順るものなきにいたれり。邦人より見すてられたるものゝ中にも繪畫ばかり淺ましきさまに取あつかはれたるはなし唯だ南宗畫のみは日根對山、帆足杏雨、前田暢堂、魚住荆石、木下逸雲、十市石谷、僧鐵翁などのもてはやされし當時のさまはなかりしかなかりき。維新以前にありては縦しや一頓の畫を作らずとも藩より五人扶持を受けたれば不足勝にもせよ一家の口を糊したりきと雖も今は家祿を奉還したれば一粒の米も他より來らず外に覺えたる職とてもなければ一家の生計唯だ繪畫を售りて米に易ゆるより策なし。さてその繪畫は世に喜ばれず憚れや絶代の大畫師の一家も窮鬼の中に擡せられてその日／＼の煙をも罨げがたき墓なき波風の下に捲き去られぬ。

ど尙ほ謂はゆる文人詞客の後に追隨して翰墨遊戯の媒となりて裕かにその日を送りたり。この頃は實に小兒の徒ら書ひの如き奥原晴湖女史の畫が世に珍とせられたる時なりき支那歸の安田老山が沈石田が倪雲林の様に賞はれたる時なりき今は黃葉山裡に投じて普照の流を酌める田能村直入が飛鳥落す時なりき木戸内閣顧問が僧五岳を喜びて天下の畫を壓倒するに足ると言ひたる時なりき。かゞりければ特り南宗畫家が衣食に憂なかりしにひきかへて他派の畫家は世に用ゐられず京都第一流の畫家岸竹堂さへも友禪染の下畫を描きて僅かに飢寒を療したりきと傳へられたり。

されば芳崖は妙腕を有ちながらもその畫は世の風尙に契はず如何ばかり苦心慘憺の餘に成りたる大製作も世人の一顧を博すること能はず酒筆錢を得るに由

廟畫置縣の令一たび下るや諸藩概ねみな城廓を破壊して田圃となし士の家もまた家重代の甲冑刀劍を賣りて積に易へ或ひは牙籌を執りて商賣に従ふに至れり芳崖乃ち謂へらく山河の固となしたる城廓も武士の表道具たる刀劍も今はまたく無用の物に屬して捨てらるゝにいたれり况いて繪畫をや今日に當り



て丹青をもて世に立たむこと恰かも寒時に氷を售り熱の時に燭を售るがごとし愚にあらざれば即ち狂のみ然はあれど繪畫は芳崖の心身なり芳崖は繪畫なり我世を終るまで筆を擲つこと能はず願はくは一代の間心血を注ぎて二三幅の大作を成し之を天下後世に傳へて身後の揚子雲を待たむのみ唯だ一家の飢寒を療するの道にありては須らく今時までに世に流行する所の業を營まむと。實にこの時より芳崖は大悲酸の境に落ちて窮鬼病魔と相闘ふ修羅場を演じ初めける。

維新以來政府が製絲製絲の業を奨励したるよりその業漸く起りき芳崖こゝに於て妻島山氏と謀りて蠶を養ひて家に滿つ。また思へらく之を賣つて賣るは絲にして賣るの利あるに如かずと然れど家貧しくして製絲機械を購ふこと能はず乃ち自ら或る製絲場に行

きその構造使用を實見し仔細に之を圖に取りて蹄り自ら刀を執り竹頭木屑をもてその機械を搦ね造りて製絲業を初めぬ。時に父晴草の友人諸葛秋錦大にその祖先傳家の繪畫を廢するを惜み切に之を諫めて曰く傳家の粉本を如何にすべきやと後なほしばしば書を贈りて之を云ふといへども芳崖つひに聽かずりしか幾ばくもなく失敗して之を廢したりき。製絲業失敗の後小さき家を借りて紙筆などを購ひて織かに一家の口を糊しき。須臾某なる者あり偶々郷に歸りて芳崖を訪問せしにその店の見る影もなく餘りに淋しきを見て氣の毒に思ひ家に入らずして去りきといふ當時の情況見るべきなり。舊藩主たゞ／＼芳崖のかゝる有さまなることを聞きて言を人に傳へて京に上らむことを勧めたりき然れど芳崖はその責を得るの道なきために尙ほ筆を去る

こと能はざりき。

藤島常之は頗る機智に富みたる士なりき維新後早くも狩野派の繪畫の世に喜ばれざるを見て泰西に航し種々の器械を研究し歸朝の後は京橋の邊に住み専ら教育用の物理器械を造りて賣りしが大に世に行はれて不足なくその日を送るを得るにいたれり偶々芳崖が困頓の有さまを聞き懇に書を寄せて上京することを勧めき。芳崖こゝに於て意を決し島山氏を携て筆を去れり是は明治十二年の春のことなりきと云ふ。

芳崖二十餘年ぶりにて東京に來り大く世のさまの移れるに驚きつ。又その昔の苦學せし時の事のことすがに忍ばれて木挽町にて元の狩野繪所のありし近き邊に小さき家を借りて行李を卸しぬ。

芳崖の上京するや夫妻の衣服を售りて旅費となし

たる程なれば素より貯のあるにあらざ又他より月俸を受るにもあらねば忽にして大に窮しその日の米をも買ひがたきに至りぬ。常之のれが勧めて芳崖夫妻を招きたることなれば如何にもして世に出さむと思ひ一日芳崖を訪ふていひけるは今や東京にて教ある中に洪璧のごとく珍せらるゝは安田老山、長三洲、奥原晴湖などの畫なり兄は心よくは思はずとも假りに道壁の風を搦ねて畫きたまへ我これを懸装して芝の神明前の骨董店に囑みて店上に陳列せむとて唐紙五十枚を贈りき。芳崖はその老山、三洲輩の風を搦ねといはれたるを大に快くは思はれども又我身と思ふての言なりと思ひかへして不性／＼に筆を走らして五十幅を染め終れり素より他の風を搦ねたるものならず。常之これを見て到底顧客のつくべき代物にあらずと思へど曾て贈りたる言の反古ども



ならねば一幅に二十錢づゝ掛けて最と粗末なる襦袢をなして神明前にぶらさげたり。かくて一月二月と過ぎ半年にもなりて大道ふく塵にまみれて汚るれど一人の顧る者とてもなきにぞ骨董商も遂にもてあぐみて五十幅そのまゝに常之に選し來りき。常之も爲むすべなくて賣めては襦袢代のみにても取りて芳崖の貧を賑はさむと欲し之を同藩士莊原某に謀り一幅二十錢づゝに賣ることを囑めり莊原氏もまたその情を聞きて最と氣の毒に思ひ人に逢ふごとに出し示し他へ進物の料にも買ひねと勤るに此のごときものよりは白砂糖一斤を携ふるには如かずとて首を擡るものばかりなりしかば一年餘も留めおきたりしがまた之を常之にかへし口。常之は遂に五十幅を三圓にて田舎歩行の小骨董商に售拂ひそを芳崖に與へたりきとぞ。

芳崖ここに於て浩歎し妻に向つていひけるは我の繪事に於ける古名匠に及ばずといへども決して自ら當世の繪畫家流の後にあらざるを信ず然るに一頓の畫もて一升の米に易ふこと能はず堂々たる大帝國の首府たる東京その人口百萬に下らず而かも肩下に一袋眼を具ふる者一箇半箇も之あるなし我が美術界は正に是れ暗黒時代なり我今に於て繪畫をもて人の一顧を博するの念を絶てりと快々として樂まず妻乃ち慰めて曰く是れ時の不祥なり妾實に精練を甘ないて世を終らむ願ふは外君筆をすて玉ふとなかれと互ひに慰めて日を送りぬ。

さて手を束ねて米を得ることもならねば人の勤むるまゝに芝赤羽橋なる砲兵工廠の圖案課に備はれむと欲してその採用試験をうけたりきその試験に至りて洋器をもて細大の兩線にて製圖を描かしむ芳崖直に

大線のみにて描きたりしかば落第のよしを告げき芳崖は大線も細線もその理みな同じとて大に争ひたりしかど遂に採用せられずして廠を逐はれぬ。芳崖が造化の工を補ふべき大手腕を有ちながらかゝる賤役に身を投ぜむとせしのみか落第したるその心中のくちをしさ如何ばかりなりけむ今思ひやるだに最と憐れなりけり。

この後また周旋する人ありて陶器商某に備はれて日々その店にゆきて窯燒の上に畫をかきぬ。この時の日給は三十錢にして一月欠勤なきも九圓を得るのみ此にては一家四人の生活はいつも不足勝なるにかて加てこの頃より芳崖肺を病み月に伏せざるの日なく日に吐かざるの時なく大く瘦あどろへて身を動かすことさへ懶くなりぬされど他に錢とる業もなければ努めて陶器店に通ひたれども一月の半は休みて伏せ

りき是に至りて一家ますく窮し醫藥を救ふことさへ能はざるのみならず粥をすゝるさへむつかしくなりしかば妻もさすがに堪へがたくなりて百方苦心の上にて僅ばかりの資を得て小さき荒物店を芝公園の隅に開きて生活を補ふととなしぬ。芳崖一家がこの間の困頓非酸は實に想像の外にいで決して今日の畫家などの夢にも知らざる所なり。

古への名匠が困苦を嘗めたるその跡ただ少からず然れど芳崖がごとく飢寒に迫りまた世の辱めをうけたるはその類希有ならむ。

維新このかた殆んど二十年吾が美術界は實に闇黒なりき。わきて繪畫界尤も淺ましき様に墮在し前章にも述べたるごとく時湖一聲の「つくね囀」のみ傳はれて他派の畫家は食ふや食はずに過ぎ來りたりしかど何時まで斯くあるべきにもあらず天運循環し



「つくね馨」時代まさか去りて美術界の天明に至らむとす一道の光明は微かに明治十六七年の頃より閃めき初めつ。

明治十五年島津公爵、橋本雅邦に囑するに犬道物の大巻物を寫すことをもてす雅邦もど芳崖が困頓の状を見て常に悲しみしかどその生活もまた裕かならざる爲めに之を賑はすと能はざりき此の囑あるや即ち芳崖をすゝめて曰く吾が狩野芳崖は實に先師勝川法眼門下の神足なり今や時の不祥に遇ひて世に埋れたりといへどもその伎倆に至りては決して當代に見ることを得べからず今是の如き大製作を成さむ者は日本國中を一掃して芳崖を措て將た離れにか托せむ閣下願ふは之を芳崖に命ぜよとて之を譲りき。此に於いて芳崖月俸貳十圓をもて島津家に傭れ日々はその邸に上り島津家の秘傳に依りて之を寫し三少年にして

之を卒業せりき。その筆力設色二つながら妙を極めたりしかば公大いに悦びて之れを宮内省に獻じぬ。

犬道物大巻物は維新後芳崖が芳崖たる伎倆を顯したるものなりき。されどいまだ世に知らるゝに至らず。芳崖が犬道物巻物を作る間には又多く他の畫を作ざりしが明治十五年第一回繪畫競進會あるや人の勸めに依りて一幀を出品せり然るに褒賞状をも得ずして還りぬ。この頃芳崖尤も雪村を悦びし時なれば固より「つくね馨」崇拜時代の美術界に歓迎さるべくもあらず。同じく二年を越て第二の競進會あり芳崖また人の勸るまゝに二幀を出品す。この時始めて芳崖と稱す。一は山水、一は櫻樹に駒の圖なり。時に世評紛々として二畫を排斥してやまず或ひは曰く馬の腹あ

まりに太りたり是れ恐らくは賑み馬ならむ或ひは曰く馬丁の頂でこ助なりと。當事者また取らず褒賞の最劣等なる三等賞状を授けたりき而して守住買魚は金牌を得て其の名噴々たりき。門人らあまりのことにあきれて芳崖に向ひ當事者の鑑識なきを訴へてやまざりしかど芳崖は囑して一語を吐かざりきといふ然れどそが心中には竊かに盲者ばかりの世の中なるを苦笑せしならむ。

この時に當りて米國學士フェノロサ氏、日本の美術を觀むと欲して來航したりき偶々第二回の繪畫共進會あるに會し直に行きて縱覽するに場中幾千幀の畫あるも皆古名匠の粉本を摸したる圖のみにして一幀として自家の意匠をもて書きたるものなしフ氏大に先望して曰くかねて音に聞きつる日本の繪畫も名のみなりけりとて將さに去らむとする時ふと場の一

隅に二幀の畫あるを見いだしきそは粗末なる紙本に畫かれ又装はれず人の立寄りて見るものも最と稀なりフ氏之を見るに芳崖と署し二幀ともに妙にして一の櫻花に駒の畫わけて意匠も新しく筆力尤も雄健にして馬隨て紙本の外に出でむとするの妙ありフ氏乃ち大に喜て曰く是あるかな余が萬里の遠遊を空くせずと口を極めて賞揚してやまざりき。是れ實に芳崖が佐久間象山以後際會したる第二の知音底なりき。後またフ氏に依りてヒゲロー氏の知を受け此に及むで漸く芳崖の芳崖たる所以のもの現はるゝにいたりぬ。

フ氏が芳崖の畫を見るや大に感し親しくその人に逢ふて美術を談ぜむと欲し一日之を芝公園の陋屋に訪ふて刺を通ず芳崖罵て曰く道の毛唐人何をか知らむと堅く謝して取合はずフ氏乃ち更に狩野友信の紹



狩野芳崖翁筆  
門人岡倉秋水君縮寫



上の櫻樹に駒の圖は即ち狩野芳崖翁が明治十七年の第二回繪畫競進會に出品して初めフエノロサ氏の爲めに知られたる二圖の一なり今翁の門人岡倉秋水君の縮寫を請ふて此に掲ぐ

介書を携へて來り之を乞ふこと太だ切なり芳崖依てフ氏を齋藩主毛利侯の邸に誘ひ古畫の鑑定を試む然るにフ氏更に服する色なかりければ最後に曾我蛇足の屏風繪の女中部屋にあるものを出して一覽せしめしにフ氏大に感賞して縮視之を久しくしてやまず。是に於いて芳崖も度えず手を拍て曰く足下また我が日本の美術を談すべしとて乃ち爲めに日本畫の沿革及び諸派の長短を説明したり是れまた芳崖が三十年ぶりにて爲したる美術談なりしなり。フ氏は太だ我が日本の美術を喜ぶの人なり曾て本國に在りて日本古代名匠の手に成れる所の繪畫、彫刻、鑄金等を見て隨喜の念を生じ遂に自ら海を航じて來りき然るにそが豫ねて本國に在りて想像したるの外に出で、現代日本の美術の萎靡振はず殊に繪畫に至りては概ね皆古代の粉本を摸するものばかりなるを

狩野芳崖

見て大に失望したりしが會々芳崖が畫ける所を見て曰く遺般の手腕わらば日本美術を振起するに足らむと一日また來りて芳崖を芝公園に訪ひ語りて云ふ二百年このかたの日本繪畫實に見るに足るもの鮮し是は古人今人が精力を用ふる如何にありと雖も職として舊套を墨守して革進することを知らざるに由らざる可からず我ふかく日本繪畫の爲めに惜みて已まざる所なり先生盍んそ一臂の力を奮つて之を振起し且つ革進することを爲さざるやとその言頗る懇なり。芳崖こゝに於いて歎じて曰く足下の言洵に然り余が先師勝川の門に在りける時すでにこの志を抱きたりしかど國事の多端に遭遇して筆を捨て今や飢寒疾病とも／＼至り未だ其の夙志を成すこと能はず近年東京に來りて多くの洋畫を見たりき人或いは云ふ寫實は洋畫の特長にして日本畫の及ばざる所な



り又日本畫は到庭洋畫のごとき設色を成すことを得ず日本畫は實用的のものにあらざり唯だ遊戯の具たるのみと余はじめこの言を聞きて大に遺憾となし且つ心に言ひけるは西洋人とても神妙不思議の術ありて然るにあらざり均しく之れ手もてなす業なり余もまた人なり一杖の毛筆をもて悉く西洋人の成す所を成さむとて百方苦心し遂に能く洋人に及ばざる寫實を成すことを得たりき又油畫につゆ譲らざる設色を成すを得るに至りき。然はあれど邦人は南宗畫のみを悦びて余らの畫を見んとする者絶えてなし故をもてまた多く筆を取らざるのみと。フエノロサ氏こゝに至りて覺えず阿々大笑して曰く日本人が悦ばざる故のみをもて筆を取らざるか何ぞ其の眼界の小なるや世界は廣し萬國は多し五大洲中豈に先生の畫を見る者なしとせむや日本國中もし知己なくば何ぞ之を五大

洲中に求めざるや先生のときは自ら眼を塞ぎて明なしと云ふ者の流のみと。芳崖また稍や動くの色ありき。

芳崖、フ氏の説を聞き大に自ら知己なきを憐みしこととの愚なりしを悟りき乃ち曰く足下が謂はゆる知を海外に求めるの説太た好し今にして始めて日本人の盲者ばかりなるを恨まず唯だ奈何せむ家貧に年老いて我が本來の面目を呈露して繪畫を作るに懶きことを因て愀然たり。フ氏乃ち曰く先生は洵に國を愛せざるの人なるかな。芳崖怫然として云ふ余もも技をも家の業となす者なりと雖もまた曾て國歩の艱難なるに當て筆を投して志士の後に追隨したりき今年若いて飢寒の間に頭出頭没すと雖も愛國の念しばらくも懐を去ることなし足下何もてこの言をなすや乞ふその由を開かむとて腕を折して膝を進む。フ氏

徐ろに語りけるは是れ大に説あり先生盍んぞ試みに日本の國土を見ずやその面積といへば之を吾が米國に比すれば十四分の一のみ魯國に比すれば實に六十分の一たるに過ぎず氣候温和にして地味肥へたりと雖もその産する所の物知るべきのみ日本人が需用するもの、殘物を將て之を西洋に輸出するもその獲得るもの果して幾ばくか之をわらむ思ふに僅少の額なるべし倘し日本をして富ましめむと欲せば美術工藝品を振起するより外に策なからむ幸にも日本人は先天的優美なる思想を有し加ふるに指先の機用尤も巧なり故に獎勵その宜しきを得たらむには美術工藝忽ちにして起らむは決して疑を容れざる所なりさてその美術工藝の源を問へば即ち繪畫なり繪畫起らずむば百般の美術工藝起るべからず而かも今や滔々たる日本の繪畫家なるものは概ねみな舊套を墨守し

て時代々に連れて進歩することを知らずその手腕もまた到らざるを以て能く道般の事を談ずるに足らず唯だ先生のみこの任に當るに足れり然るに先生年老いて懶きをもて之を爲すの心なしとせば惜いかな日本の美術を見殺にせざるべからず日本の美術工藝は實に一國の利福を得るの無盡藏なり今之を一擲して顧みざるは洵に愛國者の爲す所ならむと先生忍んで之を爲すに至りては不仁もまた太甚しきものと言ふべし。此に於て芳崖暫然として曰く我誤てり今日この年に至るまでも繪畫の國家の利福に關する所此の如きものあるを知らざりき果して足下の説の如くならば芳崖たどひ斃るゝまでも手に筆を離すべからず願ふは足下余を提擧せよかし。フ氏の曰く先生にしてこの心あるは實に日本美術工藝の幸なり即ち日本國の福なり先生の爲めに一臂を振ふを惜ま



ずとて互ひにふかく相盟ひぬ。是は實に明治十八年の春の初めのとまりき。

十八年の春は芳崖すでに犬追物寄物を卒業して島津邸を退きたれば又月俸の受くべきなく二たび窮乏の境に墮ちたりき。エノロサ氏乃ち月々に二十圓を贈りてその家計を補助し今の富士製紙會社の取締役たる河瀬秀治らもまた大に周旋する所ありたるをもてその日の煙を颺るに差支へず又前日の如き辱をうくことなきに至りぬ。

芳崖がさま／＼の苦辛を嘗めたる跡も一夢と過ぎて既にその歳六秩に迫りぬ乃ち謂へらく今や餘命幾ばくもあることなし又幸に知己の補助あり今に及むで平生の學得底修得底を呈露して二百年來萎靡振はざる所の繪畫界に革進を加ふるにあらざれば將た誰か能く之を爲さむとて自ら奮ひ勉強して筆を染め始

めき。

さて芳崖が最も初めに筆をとりしは肖像畫なりき。日本畫は到底寫實的の用をなさずと認識されたる説を打破せむが爲めなり。蓋し線條ある日本の筆をもて肖像を畫くの至難なるは少しく繪事に心得ある者の皆知る所なるが芳崖が肖像畫を作り初めたるは實に遠く維新前のことなりき當時は素より攝影術の行はざる時なればその困難なること險へかたし自己の相知れる所のものはその記憶を呼起し未だ相知らざるものは人に就てその相を質して後に筆を執り之を裏面より窺ひてその欠點を補ひ或ひは横に或ひは縦に方向を異にして畫きたりきその當初には一圖を畫くに凡そ百枚あまりの下圖を製し然る後に實線を施したりと云ふ。

芳崖の作りたる肖像畫中に攝影術もまた及ばずとま

で評されたるもの二圖あり一は豐浦藩主の像一は三村晴山の像なり之は自己の記憶に依りて畫きたるもの前は未だ知らざるものを人に質して畫きたるものなりき。

芳崖が暗畫の術に長じたるは勝川門下にありし時よりすでにその名ありき。勝川つねに門人に課するに見覺畫なるものをもて是はその面前に於て線香一寸あるは二寸を炷く間に古畫または器物を熟見し後去て之を想起して暗畫するものなり。勝川門下一百人中この技にちいては能く芳崖の右に出るものなかりきと云ふ。芳崖かつて雪村が畫く所の猛虎竹林に鷹の圖を見て之を求めたるがその日會々橋本雅邦を訪ひ談この雪村の畫に及び如是の作なりとて直に筆を執りて暗畫したりき翌日雅邦來りて雪村の幅を見らるに一點も異なることなかりきとぞ。雪村の幅は今

は美術學校にあり芳崖の暗畫は雅邦の家に珍襲せり。けだし始めて毛筆をもて肖像畫を作り日本畫もまた能く學べば則ち肖像畫を作るの難事にあらざることを示めしたるものは實に芳崖なりき。芳崖がまた多年の間最も苦心して工夫したるものは彩色なりき。蓋し繪畫の技術中にありては彩色の配布をもて尤も難事なりとす濃淡を混合分離し遠近明暗の美を現はすは太だ困難なりといへども之を彩色に比すれば容易の業ならむされば古へより和漢洋を通じて彩色の妙を極めたる者は僅かに指を僂ふべし李公麟のごとき名匠さへも未だ到らざる所ありとなせり泰西の畫聖として仰かるマイケル、アンソエロの如きも尙未だ神妙の域に達せずとの評あり況いてその餘の輩をや洵に彩色なるものは困難中の困



難なる業たるを知るべし。

わきて日本にありては室町このかた墨書の天下に流行せし結果として遂に巨勢、土佐、宅磨のめでたき彩色も地を掃ひ了りぬ。滔々たる天下の畫家みな王朝川が謂はゆる畫道之中水墨爲上の一語の爲めに誤まられて彩色に重きを置かず甚しきに至りては彩色を賤しみて概ね之を門生に打任たりき是れ彩色の技の大に衰へたるの因由なりとす。日本の諸派の中にありても彩色にかけては狩野氏を以て上乘となしたりしかど此とても謂はゆる書き約束を墨守したることなれば常信、探幽にも勝るべくもあらざりき。かゝりければ芳崖は木挽町にわしり時よりすでに改革を成し初め屋々罪を勝川に得むとなしたりき後多く洋畫を見に及びて大に彼の彩色術の長所あるとを認めしが人もまた日本畫の彩色法は洋畫に及び

ざと言ふにぞ負ぬ氣の芳崖は最とくやしき限りに思ひさま／＼に工夫を凝し遂に能く自得する所あり乃ち曰く日本畫は洋人のごとき彩色をなす能はずといふ者は未だその技に達せざる者の囁語なるのみとて此れより多く自得底のものを作りて世を驚かし泰西人をして我が日本畫を渴仰するに至らしめぬ。芳崖が明治十七年以後に作りたる多くの彩色畫審美上の材料を献じたること少からず昔當世繪畫家の夢にも辨ずること能はざるものなるが中にもわきてめでたく傑作中の傑作とも云ふべきものは仁王捉鬼の圖と子持觀音の像なり。仁王の圖は縦四尺、横二尺にして中央に仁王突立ち眼を怒らして鬼を攫み下の方に玉あり雲蓬々して仁王の脚下より起れり又仁王の背後に電氣燈の如き裝飾あり此れより發する所の光線は錦帳と相映發し種

狩野芳崖翁筆

門人岡倉秋水君縮寫





々の光彩を現したる様にその配色の變化千態萬狀の妙を極め殆んど言語文字の能く盡す所にあらず。芳崖がこの圖を作るに當ては世界中の有ゆる繪具を用ひ盡し實に三年二月を費して卒業したるものなり。この圖様は素より奇なるが今假りに之を横にし或ひは倒まにし單にその配色のみとして見るも大に審美學上の材料を得らるゝものにして實に當世繪畫家などの企て及ぶ所にあらずるべし。

仁王の圖の成るや會々池の端松源樓に於て鑑畫會ありこの會は佐野子爵、フェノロサ氏および河瀬秀治などの組織に成れるものにて専ら日本繪畫を奨励するをもて目的とせるものなり芳崖乃さこの圖を出品しけるに内外人の之を見るもの孰れも驚嘆して已まざフェノロサ、ヒゲローの二氏は素より言ふまでもなく佛國博士パプロト氏のこときは尤も賞揚した

りき。博士もと美術の鑑識をもて名ある者なるがこの圖を見て言ひけるは我世界を周遊して現代名匠の手に成れる彩色畫を見ること太だ多し然はあれど能くこの圖に優らむものはなかりき我この圖をもて當時世界第一の彩色と呼ぶに躊躇せずこの圖の眞價知るべきなり。左れば鑑繪會にても之を擧いで最優等とにして賞金五十圓を贈りたりき。この圖こそは海に國寶となすべき神品なるに惜いかなヒゲロー氏の手に落ちて今はポストン府美術館の樓上に飾られぬ。つぎの子持觀音は芳崖が理想の愛を描き出したるものなり。この圖は容貌端麗なる觀音が右手に水瓶を持ち之より流れ出る所の水は下に灌きて波となれり波の上に無邪氣なる小兒あり小兒の周圍にあるものは胞衣なり即ち觀音が産みたる嬰兒を下界に置きて

上天する様なりと云ふ。芳崖つねに女子の功德を稱して廣大無比となして曰く天下何物と雖も能く女子の溫柔端麗と慈悲とに敵するものなし女子は慈悲の神なり慈悲の神は即ち觀音なり觀音は男跡なれども我は女跡の觀音を作らむと筆を染めたるもの即ちこの圖なりき。橋本雅邦かつてこの圖を評して「醜汚

なる材料を翻して神化せしめたるもの即ちこれ繪畫の眞面目なり何となればその圖たる孕母隨月の混沌界を描寫して内容は無上の汚穢物なり然れども銅を材として金に化せしむるは美術の妙なり眞趣は氣品の上にあるを以て假令その圖中の嬰兒の神々しからざる液盡の徳利めけるなど多少の欠點あるにもせよ美術の神品として更に何等の汚點なきなり」とこれ能くこの圖を評して允當を得たるの説なるべし。さて芳崖がこの圖を畫き初めたるは明治二十年の冬

の始めにして明る年の十月三十日即ち永眠する前五日をもて卒業したるものにて實に一年餘の月日を費したりき芳崖之を作るや時恰から盛夏なりしが金沙子を誦くために終日紙帳の中に在りき是れ大にその死を早めたる因由ともなりしなるべし。

そもく芳崖が世に出で、初めて我が繪畫界に桃山以前の彩色を見ることを得たりき。これより世の繪畫家もまた漸く彩色に重きを置くに至りまた前日の如き様ならず是は芳崖が出世前後の彩色畫を見くらべば知るに足らむ彩色の大に振ひしは何人も全く芳崖に先倡の功を歸することを拒まざる所ならむ。芳崖が作れる傑作は概ねみな泰西に飛び去りたるにも拘はらず大退物巻物の宮内省に納まりこの觀音の圖の美術學校に残りたるは實めてもの幸なりと謂ふべきなり。



かつて習ふるに往にしへより繪畫界の名匠たる者は  
 そか業の成道を遂げたる後は特り後素の事のみ止  
 まらず進んではその代々の嗜好を代表して間接直  
 接にその力を工藝に竭して之が發達を謀りたりき。  
 蓋し繪畫なるものは百般美術工藝の母なり美術工藝  
 の發達改善は一に繪畫の力に依らざるべからず繪畫  
 に貴ぶ所以のものは主として萬物の妙趣を現はし造  
 化と巧を競ひ社會民人の厚生利用を補ふにあるとな  
 れば徒らに筆を吮ふて素相に向ふのみをもて繪畫家  
 の本分を盡せるものと爲すべからず繪畫家たるもの  
 第一義務は須らく右手に畫筆を握り左手に工藝家  
 の手を引きて歩むにあり。

見よ後世が狩野元信、緒方光琳、宮崎友禰を崇敬す  
 る所以のものは實に能く力を振つて或ひは金屬に盡  
 し或ひは陶器に或ひは染業に盡したるを以てにあら

ずやその後素一半の功を分つも尙ほ瀬戸磨四郎、滿  
 田彌三右衛門（始めて博多織及び朱焼、箔焼を傳へ  
 たる人なり）さては中川淨益、御室仁清あるは道入、  
 利齋など、共に績を千古に競ふに足れりき。されば  
 芳崖は遺般の事をもて常に門人を賦めて曰く經しや  
 後素の術に於て古への河勝、金岡に勝るとも民人の  
 厚生利用に補ふ所なくば無用の費物たるのみ未だ始  
 めより之を學ばざるには如かめやとその出世するに  
 及むで多くの新圖案を立案して彫刻、陶器、染物、  
 機業、金屬などに關する參考に資したりき。  
 芳崖が多く立案したる圖案の中につきて觀音の圖お  
 よび群鬼の寶鈴を曳くの二圖をもて尤もめでたきも  
 のなりとす。觀音の圖は木彫のために立案せしもの  
 に係り群鬼寶鈴の圖は西洋婦人の胸飾として作りた  
 るものなり。

この二圖案の中にも群鬼の方はわきてうれしき製  
 作なりきその鬼の相組みたる形の變化を極めたる鬼  
 の面相奇古にしてあもしろく實に古南都の國寶中に  
 も見ることを得べからざるものなりければヒケロー  
 氏一見して激賞措かず遂に二千金を投じて海野勝珉  
 にあつらへ銀の浮彫をもて之を製したりき。ヒ氏そ  
 を携へて米國に歸るや大に貴婦人社會の賞讃を博し  
 き是は當時美術界の士の能く知る所ならむ。

明治美術界の初期において夙くも工藝圖案に着目し  
 て力を用ゐたる者を舉れば狩野芳崖をもて先倡とな  
 さざるを得ずこは世の人も余輩がこの言を河漢せざ  
 る所ならむか。芳崖のごときは實に能く繪畫家たる  
 者の分内の事を全うしたるものと謂ふべきなり。  
 芳崖がフェノロサ氏の爲めに激發せられてより既に  
 六秩に迫りたる病餘の賸軀をもて健氣にも自ら奮つ

て臂を振ひ高所に依て師子吼したるの結果として今  
 まで燕石をもて明珠となして傳りたる謂はゆる「つ  
 くね碧」の一派は顔色を失ふて驚き且つ仆ふるに到  
 りぬ。是においてか久しく「つくね碧」の爲めに壓  
 倒せられ見る影もなかりし諸派の畫家も漸くほつば  
 つと頭を出し初めつ是はみな芳崖が先だちて唱ふる  
 音頭に利して起りたるものなりき。

諸派の畫家また芳崖が作す所を見てより此に初めて  
 無明の夢も覺まし竟來奮法を墨守するのみにては爲  
 すあるに足らざるを悟り互ひに工夫を凝らすことと  
 はなりにき此よりこのかたの諸派の繪畫家みな面目  
 を一新し亦た前日のごとき比にあらざるは實に間接  
 に芳崖が慈陶を榮りたるに外ならず尙し芳崖か出世  
 以前の諸派の畫と出世以後のものを見くらべたら  
 むには何人と雖もこの言をもて蹉過するものとは言



はさるる所ならむ。

されば當時の老大家と雖も益と受けて愧となさる人は一頓を作ること必らず先づ芳崖の門に走りて教をうけたりき老大家なほ且つ然り況いてその餘の少年子弟をや。

王朝川が山水訣をたふとみてメインルの如くにし芥子園畫傳さては十竹齋畫譜を二六時中に脱合して憚はればかなくも石田、雲林、衡山などはとても企て及ぶ所にあらず實めては江稼圃、伊孚九、費西湖の形似なりとも得てむとてあるかなる夢を見たりし少年子弟は太く驚き來りて賢を芳崖の門に修むる者少からざりき今は學習院の繪畫教授たる岡倉秋水の如き皆この際に入門したるなりと云ふ。

維新以來年久しく闇黒なりし我が美術界も今や時節因縁制來して早晨の明ゆく空に朝鳥の音あもしらく

に居るが如くならしめ紅塵萬丈の市にあるも尙ほその想を高山流水の間に寄せ金殿の障壁を避けたる如き一枝の尺八に高天厚地を弄する底の明光の高風を學べ若冲の高淡さては蕭白の磊落、覺融の譚見、光琳の抱負などをすべて有ゆる古名匠の高蹟を慕へよ尙し毫釐も邪念を生じ破廉耻の行われは響の音に應ずるが如く直下にその繪畫の上に現はれて如何ばかりその技巧なるも遂に見る者をして嘔吐の氣を催さしむるを免れず。試に見ずや趙松雪の書畫に於ける實に奇瀆温氏一百年間の冠冕たり而かも後世士君子のために斥けらるゝは何ぞや他なし趙宋の宗室たるの身をもてその宗社に殉すること能はず臍甲斐なくも垢を含みて胡元の前に跪き且つその祿を食みてそが身を肥したるの故のみ張璠は朱明末造の積弊なるにも拘らず衡山、枝山の如くもてはやされざるもの

鳴わたるを聞くにいたりぬ。

芳崖の後進子弟を陶鑄するや大に世の繪畫家法と徑庭するものありき。よのつね語りけるは總て師たる者は小兒の保姆の如し小兒のち守となりてそを輕我なく順序よく發育せしむるにあるのみ唯だ師たる者が最も心とすべきは險へば小兒に邪の心を生ずる時は直に之を訓誨して防遏するが如く繪畫の上にもまはしき風の現はれたる時は遠慮容赦なく之を拂ひ除き手をとりて正道に導ひくことを怠るべからず。凡そ天地間にてその業の何事たるに論なく露ばかりも邪念邪想をしてそが心田の上を侵さしむべからざるは素より言ふまでもなきことなるが中にもわきて美術家たる者は杜少陵が丹青引に謂はゆる丹青不知老將至、富貴於我如浮雲の二句をもてそが襟帯に銘し慘雨悲風の時も常にその心をして照春麗日

は此もまた節を失ひたるに由れり又見ずや錢牧齋、吳梅村の翰墨に於けるまた當時の白眉たり然れど古人はその南冠をもて愛親覺羅氏に降りたるを賤み惜みてその遺墨の天下に存在するは目の穢なりとてそを寸裂して丙丁に投したるものさへありきと聞き侍りぬ酒筆を食するすらも尙ほ且つ之を耻づ如何に況わや大節をや。汝ら老がこのくり言を仇に聞かで能く之を心にしみて先づその心田を脩養し穢しや小事たりども不善と名のつくものは夢にも之を行ひ玉ひそとてその言最と懇なりき。故に門人中あしき行者者あれば言を盡して之を戒め再三にして尙ほ革面の見込なき徒は直に門より逐ひやりぬ然れば芳崖が門下にいまはしき事をふるまひて世の爪はじきとなりたる者は絶えてなかりき。芳崖が第一義諦としてつねに門下子弟に教ゆる所の



もの此の如し故に世の繪畫家の如く臨本を授けずまた説示することなく徒らに寶珠の圖をのみ描かしむることをなさず謂はゆる「點帶三年數八年」の修業をなさしむることなし乃ち曰く後素の事その入神の妙に至りては父は以て之を手に傳ふこと能はず師は以て之を弟子に傳ふこと能はず決して言詮文字をもて教ゆべきにあらざる要は汝が冷腹自知するにあるのみ。唯だ少年子弟が初めて繪畫を學ぶに當りて法にも依らず約束にも從はずして盲滅法に筆を走らす時は遂に邪道に墮在して救ふべからざるに到らむ古へより一定の嚴かなる約束を立てたるの結果としてその末に到て萎靡振はざるの弊に陥らしめしはその例未だ多しと雖も邪道に墮るる爲めには配合調式の一事に注意せざるべからず。我繪事にこの身を委ねしより此に久しく年に經りて古への名匠の實驗せ

し所に徴し繪畫上における配合法を悟入したりき古人かつて虎溪三笑を評したる語あり云ふ山笑ひ巖笑ひ水もまた笑ふとこの語を假て配合の秘訣を語るべきなり。素絹に向ひ何の意味もなく樹木岩石等を點綴せばその圖たるや支離滅裂の作たるを免れず尙し能く道理の消息を解し得たらんには一頓の中に乾坤を活捉することを得べきなりとて口を絶たざるは配合調式法なりき。芳崖のまさに身まからんとする二日前病褥にありて呻吟し門人らその枕頭を擁して侍坐す時偶々驟雨沛然として來り盆を覆すがとどく一時往來の人跡を絶つ怒ちにして門外に大聲にて放歌し去る者あり芳崖莞爾として門人を顧みて曰く配合の妙實に此に在り汝ら須らく道理より悟入せよとて頭を擡げて案頭の高書を指點し仔細にその調式を説きたる病苦のそが身にあるを知らざるもの

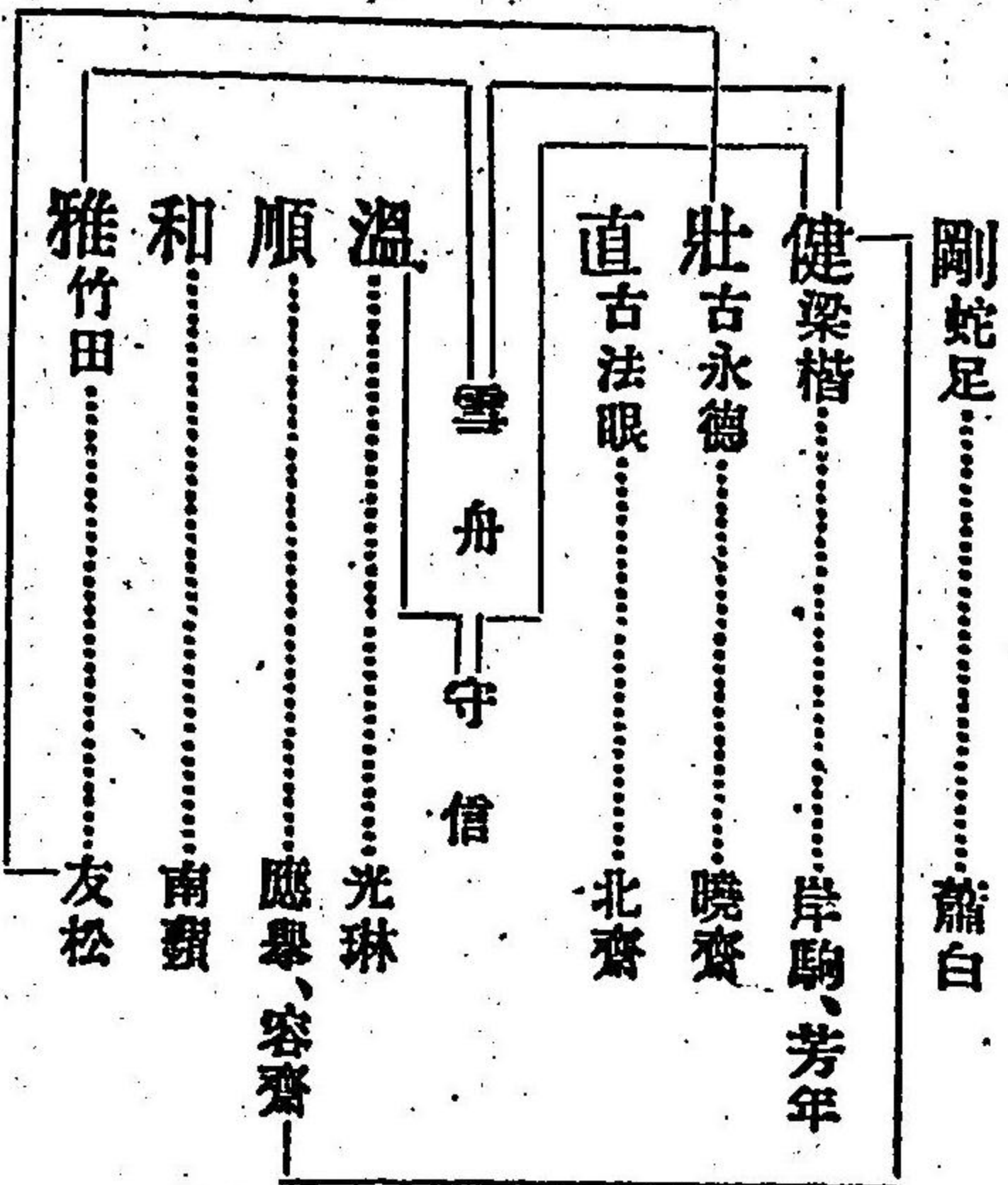
如くなりきと云ふ。こは芳崖の没後に門人岡倉秋水が先師の我等を愛するや死に垂れたる時すら尙ほかつこの類なりきとて涙を擣つて語る所のもの此のごとし。

芳崖すでに第一義諦たる心田の開拓と配合法とに次ぎて古今名匠の特性を論評してその性の近き所より入らしむ曰く人もの／＼その性の異なるに従ふてまたそが長所を異にす抑も今日大家名匠として世人に許さるゝ者の中にも尙ほ未だ容易に點頭しがたきものあり今試に汝らが爲めにそが大別をなさむか凡そ人生の特性を通觀するに硬軟の二種ありこの硬種に屬するものを剛、健、壯、直の四性とし軟種に屬するものを温、順、和、雅の四性とす。古名匠中にて剛に屬するは曾我蛇足にして健なるは宋の梁楷なり壯の上品なるを古永徳とし直を得たるを古法眼

元信なりとす軟種の中にて温、順、和の三つのものを得るは至難なりと見えて古名匠中にも能くその域に達せる者あるを聞かず唯だ雅と温とを兼ねたる者は實に南宗派の田能村竹田一人のみなりき剛を望みて達すること能はざりしは曾我蕭白なり健を望みて達せざりしは岸駒と芳年の如き輩なり壯を望みて達せざる者は狸々曉齋なり直を望み精苦を嘗めたるも遂にそが目的を達せざる者は萬籟北齋なり温を具へて未だ上乘ならざる者は緒方光琳なり柔順の筆をもて寫實をなして一世の繪畫界を風靡したる圓山應舉の如きも未だ順を得たりと言ふべからず和を望みて得ざりしは沈南蘋なり壯と雅の性を具へて及ばざる者は海北友松なり順と健を混じてその神に入らざりしは菊池容齋なり明兆の如きは健と雅を兼ねてその神に入り守信は健と温を學びて能くそが目的を遂



けたりき汝ら乃ち自家の特性を顧みて修養せよとて筆を取て示しき。



芳崖またひろく古今内外の繪畫につきてその短長を概論し後進をして取捨参考する所をらしむその言反覆丁寧にして實に世の繪畫を學ぶ者に益あるのみならず審美上の資糧となすに足るべし。曰く繪畫の

信實の蓄積にあらざるはなく狩野を學ぶ者も作る所一つとして正信、元信の舊典型にあらざるものなし滔々たる天下の繪畫みな古名匠を摸擬するに止まり自ら奮て新意匠を發し新機軸を出すの苦心は遂も之を試みる者なし。是れ單にその罪を古名匠のみに歸すべきにあらざるを如何なる所以と問ふに我が國の繪畫における各派區々分立し互ひに掌大の領土を有ちて妥如として他を思はざると此に久しく年を経りたりき是をもて世の繪畫を月旦する者即ち曰く彼は巧なりと雖も南派にして北派の風を交ゆ曰く彼自ら四條と稱すと雖も浮世派に近しと此等の評語もどより取るには足らぬと譽世此の如き陋見なるをもて繪畫を作る者も一派の祖風を守墨するにあらざるは世の誹笑を免かると能はずとてその筆意を墨守して足らずその意匠をも墨守すその意匠を墨守して足

術たるや規矩繩墨をもて法を定むべきにあらざる藥品また器械をもて之を成すべきにあらざる故に博く古人の筆意を靈臺の上に納め普ねく内外の妙畫を胸中に蓄へ運筆に熟し意匠に富むにあらざれば繚索に臨みて自在なること得はざるは今更に言はざることならむ然はあれと徒らに古名匠の筆蹟のみを臨寫して自家の繪畫を作らざれば是は謂はゆる無鹽が西施の譽を學ぶものにしてその譽は似たることは即ち似たらむも氣格風采またく遂に同じからざるを奈何せむ氣格風采同じからずして唯だその譽のみを同くするはその癖を寫すに過ぎず是れ實に優孟の衣冠なるのみ偽筆家と一般なるのみ近世學畫の徒或ひは遺般の事と思はず布置配合など概ねみな古名匠の陳套を踏襲して露ばかりも自家の意匠を打出するとを爲さず嗚へば土佐を學ぶ者はその畫く所一つとして光長、

らざるその成圖を墨守し遂に流れて今日の如き陋習を致せり抑も流派の稱たる支那に於ては宋の南北を始めとし雲間、武林、金陵等あり我が國にては土佐といひ狩野といひ四條、浮世また別に南宗の風を學ぶ者あり俗に之を文人畫と稱す是れみな古名匠が群を抜て一機軸を出し後人之を學び一派を成すものなれば此派もどより長ずる所ありと雖も彼此比較すれば亦た互ひに優劣なきこと能はず既に優劣ありとすればその優所は宜しく之を取るべくその劣所は宜しく之を捨つべし他に長所あるも我が流にあらざると之を取らず我に劣所あるも是れ我が流なりとて之を墨守せば將た那の處にか向つて進歩の途を啓くを得むや。東洋畫は専ら線をもて形を作り西洋畫は専ら明暗をもて形を作る二者もどより同じからざるものあり



と雖も亦た全く一法のみを偏用するにあらざり且つ卑俗を捨て高雅を取り蕪穢を厭ふて鮮明を喜ぶは一なり倘し能く虚心にして善を擇びて之を取らば我が國の各派に論なく宗の南北と雖も洋の東西と雖も交互演釋して共に進歩の料となるべし何ぞ必らずしも相容れざるの愚を學ばむや然るに徒らに祖風のみを墨守して進歩を自派の外に謀らず身を終るまで臨摸の業を固執するに於ては或ひは古名匠の形似を學ぶを得るも究竟その頂上を超出するに途なかるべし況いて古名匠と雖も悉く完全無缺なりとは言ふべからずまた必らず一失一癖あるべし而かも臨摸のみを事とする者概ね先づその失と癖とを學び得て却てその妙所を得ること能はざる者比々みな是なり我がかつて竊かに古名匠の爲す所を見るに古名匠はまたその古名匠わりと雖も強ちにその古名匠の爲めに束縛せら

れず卓然として一家を成し別に一機軸を出して自家の意の欲りするまゝに任せ縱横自在妙想窮極なきもの、如し蓋しその嫌素を拂ふや神思暢快にして樂で食を忘れたるものならむ宜うなるかなその精神畫幅の上に迸溢して千歳奕々として生氣あるや。古名匠既に此の如くにして神品を成したりとせば今人もまた此の如くにして神品を成すべし何ぞ必らずしも唯だ臨摸の業にのみ心身を役して終生他人の糟粕を撫することとなさむや。倘し能くすでに運筆に熟し意匠もまた當さに富める者をして一旦決然として墨守の陋を脱得せしめば心頭筆尖つゆ束縛を受くる所なく優容自在の、そが奇才を展ぶることを得て天真爛熳たるものあらむ。是に於てか光長、信實復た見るべく正信、元信もまた出づべく明兆、蛇足、守信、應舉の如き豈にまたその人の輩出することな

しと云ふべけむや縱しや古名匠の後に追隨するを得る如きの名匠を得ずとするも彼の徒らに他人の糟粕を撫する輩に優ること千里なるものあらむ。さて繪畫の流派箇々分立しちの、その疆壁に據て死守すと雖もその詮ずる所は唯だ二種の用あるに過ぎず一は則ち英雄豪傑また親戚故舊の容貌を一室の中に藏め或ひは幾千百種の禽獸蟲魚草木花鳥の形狀を机案の間に集るなど其の形容の眞を寫すに在り一は即ち妙想を自己の靈臺に求めて山水または動植物の風致を畫くに在り風致を畫くものは形容その眞に合せざるも人の心目を樂ましむれば善畫たるを失はず形容を寫すものは假令風致に乏しきも眞物に異ならざれば實用に於て欠る所なし此の區分を察せず同一の意思をもて之に臨まば正に是れ方底圓蓋なるものにてその需用を完ふすること能はず此の如く甲者

の需用は實地にその物を見むと欲するにあれば愈よ眞に迫れるをもて愈よ善とす。雖も乙者は則ち之に反して故らにその眞を避るものあり。譬へば此に花下月に歩するの圖を作らむか春いまだ深からずして山野蕭然たり馬蹄緩々晴を趁て溪南に向ふ疎影横斜すでに蕾を破て清淺の水に映ずるを見る。茲に初めて春意を覺え人をして遺生の想あらしむ而してその梅花と馬蹄の大きさを檢するに幾何法を以てせば非常なる巨大の花たるを發見すべしされど見る者その巨大を怪まずして却て風致の妙を愛するは全く乙者の意匠をもて故らに幾何の範圍を脱して觀者の情意を梅花に集めたるなり。西洋畫に人馬の影を寫したるもの多し然れども明かにその全影を寫さるは是れ蕪穢を避くるに外ならず蕪穢煩雜を避る爲めには實際まさにあるべきものも之を省く工夫をなすべ



し孤立突出を避る爲めには實際になきものも之を添補せざるを得ず長短大小配置その宜きを得て疎密濃淡照應の度を失はず勇猛矯婉物に従て妙想を發す何ぞ必ずしも形似の末にのみ拘泥せむや。蓋し試みに彼の生人形なるものを見ずや肌膚毛髮毫も活人に異なることなくその妙賦に驚くに堪えたりと雖も之を居室の床の上に安置し數月を経て厭惡の念を生ぜざる者は恐らく之をあらざるべし之に反して肌膚毛髮全く木石の材質を存じたる雅朴の彫刻ならむには終歲之を座右に置くも雖も更に之を厭ふの念を生ずることなかるべし。此の二つの者一は真に迫て人の感覺を惹くし一は眞を避て愛重の情を生ぜしむ是れ甲乙二用の分るゝ所なり肌膚毛髮の活人に異なるなきもの甲者に取ては大にその用に適すと雖も乙者に取ては僅に一時の興を博するに過ぎずして永く人を

して樂ましむること能はず是に於てか木石の材質を存する雅朴の彫刻なかるべからず繪畫と雖も此の理に異なるなし是を以て故らに形似の末を避てその趣を寫すなりその趣は之を高尙にすべく之を奇麗にすべく之を優美にすべく之を跌宕にすべし要するに人の神心を娛樂せしむるに在るのみ。この故に苟くも人の感覺を惹くしからしめず人の心意を厭はしめざる爲めにはその實に過るも妨げずその實に及ばざるも亦た妨げず是れ乙者妙用の存する所なり。然はあれど物ありて而して後に畫あり畫は末にして物は本なり焉。その本を離れてその末獨り存することを得むや東洋の繪畫は數箇の石を配置するに當てその距離を意とせず故に樹上樹あり石上石あるの觀を呈す又平面側面斜面等の圖にして皆その形を同ぶするものあり是は蓋し從來幾何學を講ぜざるに坐す

るならむか繪畫と幾何とは固より同じからずと雖も亦た全く幾何の意味を廢すべきにあらざれば破れたる馬鞋の雨に洗はれたる様の物を描き乃ち曰く是れ蘭なり曰く是れ蟹なりと縦しや之をもて風致ありとなすも殆んどその本の何たるを辨ずること能はず本且つ辨ぜず亦た那の處にか風致を存せむ思はざるの甚だしきのみ。甲者に偏すれば寫生に拘泥して風致を缺くの病を生じ乙者に偏すれば風致に拘泥してその本を失ふの病を生ず繪畫の事たる實に容易に爲すべきものにあらざるや尋常器械的の意思をもてその妙畫を致すことを得むやと。是れ實に芳崖が謂はゆる兒を憐みて醜を忘れたるの慈誨なりけり能く東西畫術の長短を見徹したるものと云ふべし。されば當時の老大家たる者大にこの説に耳を傾け互に瞻寫して傳へたりきと云ふ。

芳崖が門人に教ゆるに尤も敬服すべきは他の畫家の如く口傳秘法に重きを置かざるの一事なりき。世の老大家と稱する者動やもすれば即ち曰く是れ口傳あり是れ秘事なりと甚だしきに至りてはその畫筋を閉して門人も此に入るを許さざる者さへあるにひきかへて特り芳崖は他の利益ともなるべきことは如何なる秘法もまた如何にそのれが困苦を嘗めて得たることをも決して惜むことなく人に教へたりき尋常の門人に語りけるは我六十年の歲月をもて實研上得たることは一として我汝らに隱すことなし我は汝らが踏臺たるを悦ぶものなり汝ら能く我が頭を踏臺となして高きに登り遠きに攀ぢよ師の頭を踏臺となす底の者にあらざれば未だのもしき弟子にあらざるなりと芳崖が當世の繪畫家流と大に徑庭する所のもの即ち此に在り。



芳崖つねに門人らが新圖案の工夫に苦む者を見ること  
 乃ち教へて曰く此を去て門外百歩を出でよ熱南  
 塞北一處として汝が新圖案の料とならざるものなし  
 又往來の絡繹を見よ左右の館舎を見よ車馬の交馳を  
 見よ一事として汝が新圖案の料とならざるものなし  
 と又時或ひは座側在る所の器物を取りて巧に之を  
 配置し高きものは山となし低きものは谷となし川ま  
 たは海となし上より瞰下し横より望み仔細に指點し  
 て發明する所あらしめたりきと云ふ。  
 また門人に語りていふ汝ら一幀を成すことに必ず先  
 つ之を婦女子に示せ或ひは益を得る所あらむと蓋し  
 芳崖つねに畫を作りその心に於て自ら物足らぬ心地  
 したる時に當りては鳥山氏に見せてそが思ふ所を言  
 はしむるに毎に芳崖が心づかざる欠點を見出すこと  
 を得て之を直したりき故にまた之を門人にすゝめた  
 るならむ。

ふ。膠のどときも近來製するもの混合物多くして強  
 き火氣にて之を煮るときは悉くちぎれて用を爲さ  
 ず芳崖大に之を病み遂に自ら屠牛場に行きて牛皮を  
 求め來り手づから膠を作りて絹地に引くをもて常と  
 したりき。また膠の代りに水仙の根を絞りて礬水に  
 用ひたりき。殊におもしろき成果を得しは紙地に淡  
 きボツタースを引くことなりき是は墨畫を作るに墨  
 色に潤澤を生むて尤も妙なりきとぞ。此等の法みな  
 芳崖が工夫を積みて發明したるものなるが更に惜む  
 ことなく門人に教へたりき繪事に忠なるにあらずむ  
 は争でか能く此の如くならむや。  
 そもく芳崖がヒンロー氏およびフエノロサ氏らの  
 贊助を得て我が繪畫界の草進を謀り初むるに當りて  
 我が政府もまた漸く美術の事の等閑に付すべきにあ  
 らざるを悟りけむ十八年に圖書取調局を文部省内に

門人らがその作る所の畫を呈して正を請ふに當りて  
 は芳崖如何なる要務あるも直に之を捨て、畫幀に向  
 ひ醇々として論評し更に倦むことを知らざるもの、  
 如し芳崖が門人らに小言をいふは概ね二三時間以下  
 らざりきと云ふその老婆心切なる想ふべきなり。  
 芳崖が繪事におけるその熱心なること殆んど狂する  
 が如きものありその一例を舉げむに近年製する所の  
 畫絹は多く油氣を含みたるゆゑに墨畫を作るに際し  
 この油氣の作用をもて墨色片寄り大に畫風を損する  
 ことあり芳崖乃ち自ら織元に就て之が改良を計るに  
 聞かれず已むことを得ず自らさま／＼工夫し先づ灰  
 汁をもて絹地を洗ひその灰汁を脱かむが爲めに淡く  
 酢を引き又その酢氣を去らむが爲めに大根の汁をも  
 て之を洗ひ而る後にポンズにて水を濯ぎたりきと云

置き芳崖を備用して取調掛を命じ月俸十圓を給與  
 しぬ。後また文部省において技藝教育に關する事を  
 調査するや芳崖を擢用してこの局に當らしめ月俸三  
 十圓を給與したりき。今日より見れば三十圓といへ  
 ば僅かに芳崖が一幀の席畫の潤筆に當たるに過ぎず  
 といへども當時にありて政府が三十圓を拂て畫師を  
 用ゐたるは實に芳崖一人のみなりき。  
 この時に當りて芳崖の名漸く世に知られて美術界の  
 ために重んぜられぬさればその門に迫り線素を捧げ  
 て畫を請ふ者最も多くなりき。かくてその名遂に  
 九重の宮居の奥にまで達し十九年に至尊が大學植物  
 園に御幸あらせらるゝや特に芳崖および狩野友信の  
 二人を御前に召されて親しく席上畫の御覽を賜ひ  
 き。此年また大學に御駐筆めらせらるゝや再び御前  
 畫の榮を辱ふし御目錄を拜しぬ。皇居宮陛下の植



物園に行啓せらるゝ時に芳崖また眞山水繪額を  
献納す陛下ふかく嘉賞ありて黄八丈縞一反および茶  
具文具を下賜せられき。皇太子殿下の當時つねに植  
物園に成らせらるゝことに芳崖を御前に召して御菓  
子を賜ひき。

芳崖ある時又御旨を奉じて牧馬、雷神の二圖を畫き  
けるに大に御賞美の言を賜ひたりとぞ。芳崖かつて  
王室式微の時に當りて談一たびこの事に及ぶ時は聲  
涙ともに下り慷慨自ら已むこと能はず遂に筆をす  
て、壯士の間に周旋して勤王の事に従ひき蓋しその  
忠厚天性に出るなり然るに今や千古ためしなき聖代  
に遭遇し能く困頓を凌ぎ來りて辱なくも至尊のみ  
か二宮の御一顧を辱なふせること芳崖の身にどり  
て此上の幸やあるべき如何ばかりうれし涙のそが袂  
に深かりけむ此時こそは芳崖が積年の仲々たる滿腔

の憂愁を一洗して痕をどいめざりしなるべし。  
芳崖が十八年以來自ら發憤して革進を爲せしより忽  
ちにして四たび衰葛を關しその年六十にまた一を加  
へつ芳崖乃ち自ら謂へらく我が玉の緒のつゝかむか  
ぎりは努めて君國の爲めに美術界に盡すべきなれど  
も肺の病ますゝ悪しく且夕を期すべからず如何に  
して替人を作らむか滔々たる繪畫家流は老朽にして  
爲すことあるに足らずされば我が身後に於て千百の  
狩野芳崖を打出することを計るは尤も今日の急務な  
り願はくは少壯の英靈漢を陶鑄するの一大庫舎を作  
らむ然はあれど身貧にして且つ年老いたるをもて能  
く獨力の爲し得べき所にあらず世の有力者の贊助を  
得るよすがもがなと思ひたりしをりしも幸にも天  
之に良縁を假して伊藤侯爵に向つて芳崖が滿腔の志  
願を吐露するの機會と與へり。

維新前にあたりて芳崖が共に國事に奔走したる同藩  
士の當時政府の要路に居る者も少からざる故にその  
紹介をもてせば伊藤、山縣二侯にも會することを得  
べく殊には品川子爵が當時東洋繪畫會の會長た  
り野村素介氏の同副會長たれば之れに説くこと難  
からざれども芳崖も一老畫師の身たるをもて干謁  
の嫌を避けてその門に廻らざり然るに時たまゝ  
鑑畫會における芳崖の仁王捉鬼圖の噂のいと高かり  
げれば伊藤、山縣二侯は佐野子爵など、共に之に臨  
みたりき伊藤侯は仁王の圖を見て如何に感じたりけ  
むこの會の後一書を芳崖に與へ日を期して美術上の  
談話をなさむことを告げこしぬ。此において芳崖思  
惟すらく是れ好機なり後進養成の策を談すべしとて  
その前夜こまゝと談すべき要領を筆記しおきつ。  
扱てその日になりて芳崖朝まだきより侯の邸に行き

けるに侯たまゝ俄に事ありて出でむとし辭して馬  
車に上らむとす芳崖乃ちそが袖を捉えて曰く今日芳  
崖が閣下に向て言はむとするものは實に我が日本民  
人が福利を求むべき無盡藏たる美術の事なりまたそ  
の百般美術工藝の源たる繪畫の事に關すその政治  
界においては伊藤博文その人ならむも美術界にあり  
ては狩野芳崖なりその芳崖の美術談は閣下之に耳を  
假すべきの値なからむや願ふは留りたまへど之を放  
たず侯よつて之を座に引きぬ芳崖もど機辯あり此に  
於て滔々として我が國の美術を獎勵せざるべからざ  
ることを論じ四時間に涉りたりき既に談論をはりて  
芳崖懐を探りて要領を記したる草稿を出して曰く  
前來我が言ふ所の大略此にあり請ふ一覽せられよと  
てやがて扇をとりて立上り日頃好みて誦へる山姥の  
一曲を舞ひつゝまかり歸りぬ。



芳崖が伊藤侯の邸を出るや直ちに河瀬秀治氏を訪ひつばらに侯と會見の始終を告げ且つ語りけるは芳崖が十年の素願今日悉く吐出せり侯にして尙し我が日本の利福を思はば必らずや芳崖が囑を空しくせざるべしとて怡々としてそが面に呷く背に益るものあり。河瀬氏の曰く先生にして侯を説きたまひたるは美術の爲めに賀すべきことにして洵に日本に幸なり酒なかるべからずとて燭を焚きて献酬す。芳崖乃ちその素願を成すの緒を得て最とうれしきまゝに日ごろの量を過して大く酔ひしれて夜更けて後に好める謡曲などをうたひ手拍子うちつゝ千鳥足にてそが家にかへりき。

この會見の後二三日を経て伊藤侯の囑をうけて仙人圖および鷲の圖の二幀を作りき。仙人の圖は桃山以上の妙を呈露したるもの鷲の方は不言の傲旨を丹青

そもく我が政府は維新以來美術の盛衰に關して頓着する所なく太だ冷淡なるもの如くなりき然るに二十一年に至りては此までの冷淡なるにひきかへて熱心に美術獎勵の方針をとりぬ是れ蓋しその先倡の績を芳崖に歸すべきか。

河瀬秀治氏は二十年間の久しき芳崖および永慮らと交を全ふししはくその窮を救ひたるが明治初新にありて美術の獎勵者として保護者として品川子爵佐野子爵などと共にその功を録さるべき人にて能く當時の事情に通ぜり曾て語りて曰く伊藤侯はじめ泰西美術のみを悦び我が日本當代の美術を顧みざりき然るに芳崖が仁王捉鬼圖を見てより日本美術もまた獎勵保護とに宜しきを得たらんには曾だに桃山、東山の昔に復することを得るのみならずまた泰西諸國の美術と相争ふに足るべしとの感を起せるならむ

の中に寓したるものなりき。これより後は芳崖しはく侯の邸に行くところまゝに物みな平生に通くなりければ侯亦遂に能く芳崖がよのつねの繪畫家流より一頭を抜ざるを知りき。侯かつて客に語りて曰く「近代日本畫家中にて名人を與れば必らず先づ指を狩野芳崖に屈せざるべからず芳崖はしはく我が家にも來りきその言に云ふ總べて心に感じたるものは筆にても棒にても悉く繪畫とならざるものなしと芳崖が理想の高尙なるに至りては近世殆んどその類を見ず試に彼の子持觀音の像を見よその感想の高きこと實に感歎するに餘りあり曾て余に仙人の圖を贈りき筆は略せりと雖もその氣合その品格ともに神に入り遠きより見るも最と堪まじき感を生ず」と。是れ實に知音庭の語たり之もて見れば亦た以てその相得たるもの、太だ深かりしを窺ふに足らむ。

この言或ひは當らずといへども遠からざるべし。究竟道理の消息は須らく没文字の處より讀まんことを要す。

二十一年の十月五日に至りて我が政府は官報をもつて東京美術學校設置の事およびその規則を發布せり是は實に日本美術史中大奮特筆せざるべからざるもの此に當時の規則を示しその濫觴の背を編想せしめむ。

- 總則 第一條 東京美術學校は繪畫彫刻建築及び圖案の師匠(教員若くは製作に従事すべきもの)を養成する所とす 第二條 本校に普通科及び專修科を置き普通科を卒りたる者は普通圖書の教員たるに適應すべく又は教員會議を以て專修科の生徒に選舉らるべきを得べし
- 學科課程 第一條 普通科の修業年限を二箇年と



し之を分ちて二學級となし専修科の修業年限を各三箇年とし之を分ちて三學級とす 第二條 専修科の課程は繪畫彫刻建築及び圖案の四科課程とす 但し建築科課程は追て之を定む

同校は先づ假に小石川植物園中に設け繪畫部は芳崖之を主宰し審美學はフエノロサ氏、彫刻部は海野勝珉氏、幹事は岡倉覺三氏との一局に當りて生徒五十名を募集せりその入學試験の如きも今と多少の相違ありて和洋いづれを問はず本人の長づる所の技に依て試験を行ひたりきこの美術學校こそは實に我が國開闢このかた始めて設けられたるものなり。

芳崖はその身後における千百の狩野芳崖を鑄治せむとする所の一大爐鞴は今は漸くにして之を備へたりきいざやこれより心をこめて之が蒸鍊に取かゝらむ

の面貌を寫しけるにわかき士ども持ち傳へて笑ひしが何時か藩侯甲斐守もまた見て興せられたりき或る時たま／＼藩侯の文學の友なる大和柳本藩主織田安藏守來り訪へり侯茶話の次に弊藩にかくの如き奇怪の顔の者ありとて例の畫をとりいでし見せられけるに安藏守は大に笑ひてかばかり奇なる顔の男は面のあたり見たきものにこそ我が藩邸にも遣はしてよとありてその日をも約して歸るさて後に侯心つきけるはこの者もど輕卒にして目見以下の者なれば其まゝにて他藩へ遣はすことならずと俄かに士分に取立て最初その肖像を畫きたる因縁もあればとて芳崖をも同伴せしめて柳本邸に遣はしたりき昔し泣男を抱へたるの例はあれどその面の奇怪なるをもて士に取立られたることは神武このかた之が始めなりとて名高き話となりきと云ふこの一話は芳崖が曾て芝

とせりその悦び如何はかりなりけむ。然るに定業のしからしむる所醫藥も之を如何とすること能はず美術學校設立發表の十數日より以來病俄かに悪しく遂にその翌十一月の五日に至りて彼の子持觀音を最後の形見として目をつぶりぬ門人ら涙を攪てその全身を昇いて之を谷中の長安寺に空り法盤を臥龍芳崖居士と云ふ是れ實に東京美術學校開校の前一月なりき。

芳崖がそが半生を狂して我が美術界に爲したる事業は概ね之を愈し盡くしたりき、此よりその言行逸事の遺ちたるもの數則を拾ふてまたその人を知るのよすがともなさむ。

芳崖は少壯より既に寫實に巧なりしが如し曾て豊浦藩に一輕卒ありその面貌いと奇怪にして見る者吹出さるはなく一藩の笑種となりき芳崖乃ち戯れにその前一月なりき。

新堀町三十番地に住せし時その隣なる三十一番地に池田美穂といへるが住るしを何時か心やすくなりて往來せしがその舊柳本藩の士なることを聞き昔は此の如きをかしきこともありきとて芳崖自ら語りしものなりそをまた池田美穂が親しく余に告げこしぬ。芳崖がまた平生もとも好みて學びたるものは能樂なりき。かつて某處において當時諸名家の能樂を觀たるがその中にて松本金太郎の翁舞のわきてめでたきに感じ遂に束脩をその門に修めて能樂を學びき初めは翁舞を學び後は松風、山姥などにすゝみ自ら足取を發明したりき蓋しその一舉一動みな畫法より割出したるものなりき常に門人に語りて曰く我は唯たにその風姿のみを悦びて然るにあらず大に繪畫の助を得るがためなりとて之を學ぶことを勤めきとい



二十七年十一月四日故舊門人等相謀りて芳崖の七周忌法會を上野池の端の松源樓に行ふや松本氏また來りて辨香し且つ曰く我始めは芳崖翁に能樂を教へけるも後には翁自ら大に發明する所ありて我却て益を翁に受けたりき今日のこの筈の法施に詣ひて翁が泉下の靈に供養し奉らむとて芳崖がつねに好みたるもの一二曲を誦ひたりき。之もて見れば芳崖が後素の餘事またよくこの樂の妙を領得したるもの如し。

芳崖また能樂につきて好みたるは演劇なりき芳崖すでに能く能樂に通じたるをもてその演劇を観るの暇自ら人に高きものあり。芳崖つねに中村仲藏および中村宗十郎の二人の技を稱して當世の名人となして悠揚して已まらずまた之に次ぐ者は今の市川團十郎なりき。

龜野に流れず自づと威嚴も具へたらむに惜むらくは彼いまだ足取を學ばずと因て言を寄せて之を注意せしめたりき。

團十郎また渡邊崋山に扮す芳崖また往きて之を観て大に能くその人に扮し得たるを悦びしがやがて崋山が席上に扇子に畫を作る處あり團十郎もと聊か繪畫の道に心得ある者として得意に之を作り自らその扇子を見物の中へ撒きたりき此に至りて芳崖覺えず叫て曰く崋山は死せり〜とて直ちに機場を退き歸り門人に語りて曰く團十郎は今日に至りて尙ほ河原者の根性を脱すること能はずとて大に失望したりきと云ふ。

芳崖ある時童子の畫を學ぶ者を見て問ひけるは汝刻苦筆を吮ふて後來何物を得むと欲するか好き衣を着むが爲めが將た旨き物を喰はむが爲めか尙しさる小

狩野 芳崖

りき。團十郎の平重盛を扮するや一日加納鐵藏と同じく往きて之を観たるが之を評して曰くその舞臺に來りてはふりおつる涙を拭ひつゝ清盛を諷むる處始終間隙もなく妙なりしかど彼いまだ足取の法を得ざる爲めに花道より出るの際に頭の前動き木だ威嚴を損して見苦しく小松内大臣その人とは受取かたし抑も團十郎が強膽なる人物に扮するや必ず歩するに膝を曲げずして行く故にその膝勢堂々として太だ好し然はあれど重盛の如きに至りては然らず膝勢堂々として單に強膽なる意氣のみをもてせば温厚篤實の態を現すこと能はず故に重盛の如きに扮せば花道の出などにも先づ靜かに一方の足を出して之を突張り然る後に徐ろに後足を曲げ靜かに前足の前に出し又之を張り切りて後に後足を持って行く時は自然に足取も好くして頭の先一直線となり姿勢堂々として而かも

さき料簡ならば速かに汝が筆を折り硯をすてよ日本は海國なり海軍の事まず〜擴張せざるべからず汝ら努め勵みて一代の名匠となりてその畫をもて多くの大軍艦に博へよと。是れ一時童子を激發せしむるの語なりと雖もまた以て芳崖が本領のある所を見るべし。

客あり芳崖に問ふに當世の畫家まさは何人を推すべきかをもてす芳崖の曰く橋本雅邦は吾が同門の士なり故に言はず他派においては京都の森寬齋、岸竹堂をもて白眉となさいるを得ず是は天下何人も異論なき所なるべし寛齋また常に芳崖を稱して云ふその技倆もとより守景以上に在り恐らくは東山の雪村再來なるべしと。是れ實に英雄識英雄の言。

芳崖かつて狩野一信の五百羅漢を見て曰くその健筆なるは多く類を見ず然れど最初に學びたる等琳のあ



しき風を脱せず殊に羅漢の眉のつれも皆太きに過ぎ容貌尊嚴ならず惜むべきなりと。

芳崖の肺を病むや蒜を食して大に効あり此より蒜を嗜むこと尤も甚しく之を稱して神薬となしその寓居に餘地あるときは悉く蒜を植えたりき。その言に云ふ日本の美術家は世界の大概と戦はざるべからざるの任あれば須らく蒜を食して身軀をして強健ならしめよと又いふ赤子の産るゝや直ちに蒜を服用せしむべし尙ほ赤子の産る時に之を服用せしむるはその腹にある時に當りて母之を服用するに如かずと人に逢ふごとに蒜の効能を説きたりと云ふ。

芳崖またをりに觸れて和歌を咏みき此に二首を書いぬきつ。

妙義山にてよめる

うつくしくあやにたへなりかしこくも

と。

芳崖かつて麻布なる毛利邸の壁書をつくるや日に安倍川餅をわつらへ之を食ふては臥し起ては餅を食ひ茶を啜し時に庭上に立て呻吟すること二十餘日いまだ曾て筆をとらず人あり戯れて云ふ先生の如く毎日安倍川餅を食ふて遊ぶは羨まじきことなり芳崖曰く咄奴輩事を解せず筆を持たざる間こそ書を作りつゝある最中にてその筆をとりにたる時は書すでに成りたるものぞと。

さて芳崖がその一生を狂して爲し得たる事業は今や記述し盡したるをもて此に筆を擱かむとす乃ちまた一言なかるべからず。

芳崖の一生を觀するにその雲鬢霜慘の間に在りて貧苦を意とせず能く繪事の成道を遂げたるは恰かも獨逸の名匠アルハルト、ブライアルの如しその世に出で

狩野芳崖

神のつれくる我がほみやま

大和國三輪にて

三輪の山はこゝにありけり立こめて

むかしのまゝを今もしるしも

芳崖つねに繪畫家たる者は心田開拓をもて第一義諦となすべきことを説きけるがあのれは夙に心を禪要に寄せて應無所住而生其心の古則を提擲したりき芳崖の手帖を開するにこの則につきての見解を録したる所多し然れど洋紙の上に鉛筆もて書したる故に多くは消滅して讀みがたし。

浄土門主福田行誠が菊池容齋の五百羅漢を深川本誓寺の本堂に列挂して供養するや芳崖を招き之を待すること最と懇なりき芳崖退て門人に語りて曰く「なるほど行誠は近世の名僧じや彼の關子でやられた日にはや老爺老嫗は一も二もなくふるひつくだらう」

叱咤するや金毛の獅子王の如く百獸をして足を措くの地なからしめたるは伊太利の名匠マイケルアノンエロに似たり。

昔人稱す黄金合鑠陳子昂と是れその李唐の詞章に功あるを以てなり。吾が芳崖の如き一世暗愚の時に當て能く腕を振て革進を美術界に加へたるに至てはその績實に大なりといふべし今日の美術家たる者その恩を思はば須らく黄金をもて芳崖の像を鑄成し日夕之に瓣香を供養すべきなり。

(完)

芳崖が傑作の繪畫は多くは佛人バルト氏、米人ヒッローおよびフェノロサ氏等が爲めに奪はひ去られたりき今此に日本に残れるものの中に神品と稱すべきもの及びその所藏者を記す。

犬追物巻物

宮内省



雷神圖	宮内省
眞山水圖	同
牧馬圖	同
子持觀音像	東京美術學校
仙人圖	侯爵伊藤博文
猛鷲圖	同
老松圖	子爵森清
牧馬圖	同
箭圖	同
山水圖	濱尾新
巖松圖双幅	大岡育造
彩色出山釋迦圖	河瀬秀治
墨繪出山釋迦圖	同
龍圖	同
猛虎見覺齋	橋本雅邦

### 菊池容齋

菊池容齋自ら畫師をもて居らずよのつね人に請りて曰く我は畫師にあらざるなり我を指して畫師と云ふ者は我を知らざるものなりと、蓋しその人品の高、して而かも風格の優れたる人をして敬仰せしむべきもの多し假りにその生涯中より繪畫の一事を取り去るもまた尙ほ千秋に傳ふるに足れり尙し敢て鬼毛餘抹、松煤殘藩のみを認めて以て容齋の眞面目と爲せば是は謂はゆる臂を交へて千里するものならむ。つらく容齋が一生九十一年間の言行を觀るに一半は擧げて以て世の繪畫家を激發せしむべく一半は以て凡べての人の身を修るの標榜ともなりて名教を補ふるに足るべし。

按ずるに容齋の先もと南朝の忠臣菊池肥後守武時より

り出づ武時十九世の孫に武長といふ者あり徳川氏に仕へて先手與力たり武長子なきを以て同じ與力たる河原武吉(菊池氏より入りて河原氏を嗣ぎたる者)の子を養ふて嗣となし是れ則ち容齋なりき。容齋諱を武保と云ひ量平と稱し天明の八年十一月一日をもて江戸の下谷に生れき。幼なき時より願脱にして凡兒と同じからず讀書を好みまた武技をも嗜みて神童の稱ありきと云ふ殊にその性至孝にして人倫に厚く苟にも人の親に薄き者あるを見る時は佛然として怒り或ひは風々交を絶つに至りしことありき老人どもその量のあまりに狭きを戒めたりければさらばとて自ら容齋と號したりきといへり。容齋幼より家乘を讀みてその家系の古忠臣より出るを知りまた當時の史を窺ひて大に感激して自ら禁ずること能はず乃ち自ら謂へらく我辱けなくも古忠臣

の裔をうくる者如何にせば千古を隔て我が祖に對するを得るか將た如何にせば我が祖の意に副ふことを得るかとて常に仔細に商量したりき遺箇の一念こそ容齋が一生を支配したるものにてその九十二年間の繪事も實に之を發揮したるものに外ならざりしなり。徳川氏が豊氏の孫婦豎子を欺きて天下を奪ひ八百萬石の富を有ちて三百小大名を隨使しその威風四海の草木をも靡みし渺々たる一武弁の身をもて前古に例なき僭權を行ひまた謂はゆる桂を炊き玉を煮るの素奢を極め此に二百餘年を経りたりき是の時の世の有さまは申すもいと恐れ多けれど天下は唯だ上に將軍あることをのみ知りて王室あることを知らず王室は見る影もなく衰へ果てつ苟くも志ある者は誰か涙を袖にしぼらざらむや然はあれど人、天に勝つ世



### 菊池容齋翁肖像

(茲に掲ぐる翁は明治五年三月月影)

(せしもの辰即ち八十五歳の眞影なり)



の勢なかりしかばいづれも涙を呑みて潜みたりき。容齋もどより古忠臣の系にいつるものにて慷慨自ら禁すること能はず往にしへの神風に吹きかへすべきよすかもかなどさま／＼に心を碎きしかど分その分に匪らず且つは時その時に匪ざるをもて深く隠忍して起たず唯た四海勤王の心を激發する爲めにどて遂に仕を辭しそが修得せる所の技をもて天下に先だちたりき。試に見容齋平生力を極めて多く南朝の古忠臣さては日本唐山の古今の義士烈婦を畫きたりきその繪の世人を觀感興起せしめたるの功實に大なりしなり。殊に外舶來航の時などは自らまた驅向はむ心なりしが如し故の淨土門主福田行誠かつて記して曰く「其かみ下田浦賀の邊に黒船のよりこし折にや人の心も何となく色めきしころちのれ翁(容齋をいふ)の宿訪ひ侍りしにかたはらに具足槍など引よせ

菊池容齋

て有しをみて翁もいくさの支たたくし給へるにかど問たるに古稀の老人物の用にはたらざれども夷賊の首一つ二つなど笑ながら申さるゝかも其膽力のほど思ひしられてき」と是れ近世希有の大徳の記する所のものなり以て容齋が人と爲りを知るに足るべし。むかし繪事をもて佛事を作したる者あり覺融、等揚、明兆のごときは是れなり近世にありてその繪事をもて王事に勤めたるに至りては余輩之を我が菊池容齋と浮田一徹らにおいて見る所なり究竟勤王を離れて容齋なく勤王を離れて容齋の繪畫なし容齋豈に山川動植の態を寫すのみの意を以て屹々として筆を吮ひたるものならむや是は世の人もまたみなこの言に點頭する所ならむ。さて容齋は後にいたりて新に一家を成すほどありて幼なき時より早く心を丹青の道に寄せより人物



などを描きて自ら怡びけるが或ひはこの道の老人も舌を捲くほどのものを作りて譽めらるゝまゝにものれもこの技の神に入らばやとて父なる武吉の止るをもつゆ開かて甫めて十八歳にして束脩を高田圓乗の門に就りぬ。

高田圓乗といへるは名を正和と稱し又の號をば文庸齋と云ひ書を加藤伊豫守文麗の門に學び共に狩野氏の流を酌めど(扶桑名畫傳には狩野養川院の門人なるよしを記せり然るにや懺ならず)別に自ら一家を成して最と麗はしく且つ和かにしていやしからぬ畫風なりき。容齋乃ち心を傾けて之に隨ふこと五年ばかりにして圓乗身まかりき。

圓乗つねに門人らに示して云ひけるは人ものく、寫る所の性同じからず故に筆力自ら強弱あり適勁必ずしも善なるにあらず軟弱必ずしも拙なるにあり。存せり。田善、江漢の如き西式をもて本色となしたる者は之を措きその洋畫を日本畫の上に應用したるは實に容齋をもて始となさるべからずその應用の最と巧にして痕跡を留めざるより世人或ひは知らざるのみ。

容齋あまねく諸流派の長所を探りたるをもてその筆前後しばしば變じたりしが遂に自得する所ありきその言に曰く「畫もと法なく又流なし無法の中自然の法あり無流の中自然の流あり法とは何ぞ畫の自然にして備はるものをしめすのみ漫りに法を立れば人をして窟窟に陥らしむ法中に在るもの終に法をしろことなし法をしらざるもの却て法に近し流とは何ぞ人各々好む所ありて多く其好む所を寫す後これを擴て流とするなり」と。その古來よりの流派さては約束の如きもつゆ之を眼中に介せざるを見るべし。

らずその人に依て好む所も自ら別なれば余が畫風に意をこめめす自家の風を工夫して畫くことに心を用るなば後自得する所あるべしとぞ。されば容齋もこの教示に従ひて刻苦しまれ必ずしも狩野氏の約束のみを墨守せず上は巨勢、託摩の古きより近代の諸派に至るまで博く觀つてその長所妙境を取りて之を融化したたりき當時師承を重んずるの際に在りては頗る思切りたる業なりしなり。

わきて感ずべきは容齋が早くも西洋畫に目を定めし一事是れなり。容齋が洋畫の長所あることを知りその師につかむと謀りしかど當時嚴に外人との交通を禁じたれば學ぶべきたつきもなかりき。是に於いて長崎奉行に由縁を求めてそが手づるに依り家資を傾け多くの西洋畫を購ひ獨り密かに之を學びき容齋が洋紙の上に鉛筆をもて作りたる古き畫は今なほ世に

究竟容齋は別に一家を成したるものにて前代よりの流派の下に録すべきにあらず尙し強めてその流派をいへば狩野派といふべきなれどもそれは容齋の本志にあらず。然るに近年川端玉章の編したる新畫系圖に容齋をもて應舉の流を酌むものとなせり是れその妄もまた甚しきものなり傳ふる所に依れば玉章は圓山應瑞の言ふ所なりとて之を圓山派中に收めしよしなれど大なる誤りにて容齋を知らざる者の説なり抑も容齋が關西に遊びたるは四十歳以後乃ち既に一家を成したるの後なり素より互に益を得るためには應舉門下の素絢、南岳、楠亭、徹山とも往來せしならむ岸駒門下の文風、玉川とも交りたるならむまた田中訥言あるは大石眞虎のごとき春翠、竹田などとも知りあひたるならむ然れどもは皆切磋の益を求るが爲めなりき况いて容齋は平生尤も應舉を悦ばずして



排斥したりき既に隣然一家を成したる容齋が争か  
かその尤も悦ばざる圓山氏の門下に贅を執る理りあ  
らむや容齋をもて圓山派下の畫家となす者は是れ大  
に容齋を誣ひ且つ傷るものなり。

容齋が新一機軸を出して家を成したるは何時の頃  
なりしかは今たしかならねと思ふにその徳川氏を辭  
したる時乃ち三十歳前後のことならむ。

容齋が一家を成すまでにはさまざまの辛苦を嘗めつ  
くしたりき。容齋年わかき頃は其の伎倆もいまだ世  
に知れざれば潤筆錢を得るに由なくて生計太だ乏し  
くしばしば飢寒に迫りしかば寧ろ畫をすて、醫術を  
學ばむと思ひ或る日その知人なる幕府の臣久貝因幡  
守といへる人に志を語りき因幡守いたく之を憐は  
れなることと思ひしむ且つその畫風の自ら趣凡に  
して一機軸を出すべきの筆力あるを知り之を激勵し

て云ひけるは一たび志を立てながら唯だに貧苦な  
るの故をもて中途にて之を廢るは大丈夫兒の事にあ  
らず縦しや斃るゝまでも勇猛の心をふり起して繪事  
を勤めたまへとて遂に自ら資金を贈りて之を賑して  
ます。研究せしめたりきとぞ。容齋が一時繪畫を  
すてむとまで思ひしむたるはその困苦よのつねなら  
ざりしなるべし。

容齋は天賦の厚きと刻苦とによりて能く一派の祖と  
仰かるまでにはなりたるは素とより言ふまでもなけ  
れどその貧苦のをりに因幡守の如き資を給する者な  
からむには一庸醫となりて終りたるならむ。然れば  
因幡守は容齋が爲めには實に大知音底の人とも大恩  
人ともいふべきか。因幡守の事たるまた容齋と共に  
傳へざるべからず。

萬巻の書を読みまた能く千里の路を行きて後にこそ

始めて畫を作るべしとは古名匠の云へりし確言なる  
が實に畫を作るに先立つものは學術なりけり故に容  
齋はつねに書史に涉りまた實物を研究するをもて急  
となし決して古名匠の粉本にのみ依りて畫くことを  
潔しとせざりき。曾てその粉本のみを奉ずるもの  
を斥けて曰く「茲に一流あり古人の粉本によらざれ  
ば畫かす伊勢源氏の物語ものを畫くに伊勢源氏の物  
語を讀まず唐人を畫くに唐畫を見ず宋人をうつすに  
また宋史にわたらず鳥獸草木皆其真をしらず只偏に  
古人の粉本にしたがひて寫す或人一畫を乞ふ畫者の  
曰粉本あらずと乞者も亦唯々として去り敢て異しむ  
となしこれ何事ぞや凡そ畫を作る目に見耳に聞もの  
作らずといふことなし若し需むる所人物ならば何に  
もせよ和漢其畫に涉る識者に問ひ古き畫卷物繰起の  
類を見合せて其時代の服飾調度を考定し而後に其知

がたき所に私意を加へて畫くべし其誤に至ては我  
の疎漏なり人の興る所にあらざ縦ひ古の名人上手  
といふとも必ず誤なしとは謂べからず其誤を以  
て我誤とす所謂誤を傳ふるものにしていかで畫  
をなすものといはむや甚だ謂れなきことなり山水を  
寫す亦しかり己一步を曳かずして名所山水を寫し又  
古人の粉本にしたがふ其本一々よきにあらざ其よき  
あしきことをも辨へず漫りに畫くによりて地理のた  
がへるものあり北濱より日を出し東山に月の落るを  
見るいかはせん然れども需むるもの亦これを知ら  
ず若しこゝに識者あらんにあやまちを飾るども免る  
べからず只罪を古人に歸して僅に世の誹りを脱れん  
とす何ぞそれ拙なるや其尤も甚しきに至ては清水  
寺の前に富士を畫き佐野のわたりに船橋を畫く類ま  
ゝ見る所なり考へざるの甚しきにあらざや足蹟天



下にあまねき人だに猶遺脱あり况や寸歩も城中を出  
 ずして更に又地理に意を用ひざる人をや然れども  
 是は我邦のことなり漢土の山水に至りてはいかにも  
 行きて其真を見むより漢土の書虎丘山志、礪山志、  
 武夷山志、祇陀山志などの真の寫せるものによりて  
 畫かば可ならむ。又云ふ「粉本を守り流によるもの  
 はわが畫く所を眞の畫なりと覺えて他畫を異風なり  
 と毀るは元より畫の巧拙を辨へず我習慣の眼をも  
 て見るが故に異なる様に覺ゆるなり是れ醫生の古今  
 を論じて病者の死生に管せざるが如し説て曰く古圖  
 粉本を摸せずして己が意匠に任せ新規を出すものは  
 皆異端の學なりと粉本は何ぞ古人の意匠に任せて寫  
 出せるものなり何ぞ古今の別あらむやさらに其見な  
 きことなり畢竟粉本を用る徒白首に至て猶一點の意  
 匠を出すことあたはず故に此説を示して亦かの誹り

を免れんとして更に愚蒙を感はさんとするなり古今  
 人倫異なりとせず今何ぞ古あらざらん一偏に古圖  
 粉本を守るものは古圖粉本の窩窟を踏破すること能  
 はず終身天下の大畫をしらず嘆すべきかな』と。是  
 の言實に老婆心切にして當時の繪畫家の爲めには對  
 症藥石たりといふべし。  
 容齋また粉本にのみ依る者を罵りて古圖を盜むもの  
 なりといひき曰く「粉本を用るは當時の衣服甲冑亭  
 宅調度のさまを知らむが爲めのみ粉本のまゝに畫く  
 にあらず今の畫家多く粉本を貯へて其まゝに其畫を  
 寫して己が落款をなすはいかにぞやこれ古人の圖を  
 ぬすむものなり若し定家家隆の歌を奪て我名をしろ  
 さば忽ち人つまはじきして笑ふべし畫家懸つべきの  
 第一なり」と。この言洵に能く粉本にのみ粘着せる  
 當時の畫家をして顔色なからしむべし然れば容齋は

一畫を作すにも決して粉本のみ依らず自ら之を畫  
 史に質し又は實見して後に筆を染めたりといふ。  
 此に容齋が徒らに筆をどらざりしことを證すべき最  
 どおもろしき一話あり。そは容齋が壯年の時の事な  
 るが某侯より能樂の中なる石橋といへる獅子頭の異  
 人の赤き長やかなる毛髪を打振りつゝ戯るゝさまを  
 金屏風に畫きてよどあつらへられしを容齋頼に請ひ  
 て只今先づ金子五十兩を賜はらまほしといへるにぞ  
 侯の使者いたく容齋の腹きたなきに與さめたれどお  
 のが主侯の意をも付りかねて心ならずも乞はれしま  
 らに調へて贈りぬさて容齋はやがてこの金を懐に  
 して幕府の能役者觀世太夫の許に到りそのれが乞は  
 れし畫像のこともつばらに語りいでゝあはれ石橋  
 の能を一曲舞ひて見せたまはれかしその舞はるゝ態  
 を寫したくこそ侍れどねもころにたのみてそが謝儀

にどて彼の五十兩を太夫の前に据えたりければ然ら  
 ば舞ふて見せ申さむが石橋の亂といふはなか／＼に  
 筆もて寫し取らるゝ如き緩なるものにはあらざる  
 さへいと目眩きほどの技なりと云ひつゝ裝束して  
 舞臺に上りきさてその舞へる様を見るに實に太夫の  
 言ひしに違はず手の舞ひ足の踏む所さながら烈風の  
 樹木を吹き怒濤の船舶を覆へすかと怪しまるゝばか  
 りにて如何にもその伎倆のすぐれたるに驚きけりさ  
 れど容齋もさすがに名匠なれば舞の終ると共に二様  
 の圖を作りて示したれば太夫も此處はしかく彼處  
 はかく／＼とあのが思ふ節々を残りなく語りて遂  
 には最もめでたき石橋の圖を成したりければ彼の  
 使者後に洩れ聞きて大に愧ぢ入りしとむ。容齋が  
 畫事に丁寧にして苟くもせざること概ねこの類なり  
 き。



草冊子などの書を作る者は「まち書」と呼ばれて當時の書家よりは大きく鄙められたりしが容齋のみは然らず之を悠揚しまたそが短をもあげつ曰く「天下の書を論ずるものは書風卑しとて棄べからず草紙物類ものに書を作る書才あるものにあらざれば之を爲しがたしこの流や絶て粉本を用ひず世間流行の新様を寫さむことを競ひて古の風を學ばず偶々古のさまを識くにもまたさらに古圖粉本によらず當時の風はさあらむと思はるゝ様に巧意に作書す其意匠なか／＼粉本に粘着して古圖を賤するものになくらぶれば遙かに勝れりといふべし然れども書風卑俗にして筆足らず故に粉本の徒いやしめてまち書とす俱に片輪にして天下にきしるものにあらざ」と。是れ能く兩派の短長を見徹したるの言なり。

また曰く「或書家に娼妓の圖をもとむ書者思へらく

我流にて箇様のいやしき圖を書きたる例なしと甚だ迷惑困窮すれども勢書かざることを得ず勉めて元祿享和頃の昔の風にのがれ書きて贈る需る者意になはず強めて今時の風俗を寫さむことを乞ふ彼の書者言へらく我家は町書と同じからず何ぞ今時の風をいやしき姿を寫すべきとて終に書かずといふ此事如何に古き書巻物書起の類を集めて作書家の依據とするも當時のさまを知らむが爲めなり後代の人に於て元祿享和の人物を書き理に於て如何ぞや只今時の様を書けば段を人に得むことを恐るゝ歎町書といふものに混ぜむことを慚る歎又書品のくだらむことを慚る歎畢竟書くこと能はざるを慚るといつれぞ實に頑にして書かざると思ふ人あり又書かむとすれども其才町書に及ばずして書かざる人あり是等の徒は妓女の圖にかざらず都て今時の人物を書くことをせず

かくの如くせば後年何の用をかなさむ歎すべし町書師は専ら勉めて年々に變移せる新様を寫すを要とすさすれば百年の後書者の粉本町書にあらむ昔の妓女の圖を其時代には定めていやしき様に思ひけむ今に至りて是を見れば容かはりて雅致を覺るがごとく今時の風の俗なりと見ゆるも後年これを見れば今の圖を見るが如くならむ何の意ありてか今時の人にして今時の風を町書にゆづりて書くこと能はざるを耻とせざらむ余甚だこれを異しむ」と。されば容齋は世の粉本にのみ依りて見ぬ世の昔の様ばかりを寫すことをなさず努めて斬新なる書題に向つてそが伎倆を試みたりき是れ全く容齋が當時の繪書家流と徑庭する所のもの即ち此にあるを見るなり。

容齋つねに書を學ぶ者に告げて云ふ「眼に見耳に聞くもの皆書かずといふことなし故に轉化自在窮りな

きものなり其窮りなきものを以てかの狹き流の中にいれむとして刻苦するものは流によりながら書く處あり我流のみを知て書の大なるを知らざるものに醫しかたし余試みに其流によるものを見るに別に其流の一世ありて馬を書き其流の馬なり牛を書き其流の牛なり山水人物も亦其流の山水人物にして其眞物に反せるをいかにせん只己が流の牛馬山水人物を知て意を眞の牛馬山水人物に寫することをしらず夫れ書は人を畫かば人を師とし山水を畫かば山水を師とし禽獸草木を畫かば禽獸草木を師とす詎ぞ別に師を立て流によることをせん然れども人幼にして學ぶ始めより師なくむば有るべからず只筆の執りさま五彩の設けやうを習はむのみ」と。けだしその意直ちに眞物を寫すべしといふにあり人を畫かば人を師とすべしとは何ぞの語の簡切明快なるや。



然かあれど實物を寫すのみにてはいまだ繪畫の能事を完ふしたるものとはなさず。曰く「茲に一流あり鳥獸花卉の眞を摸すを要とす其花の形狀其鳥の羽翼悉く眞にして美なり然れども草木に生氣なく禽獸の飛動の勢なし是れ強めて眞ならむとする故におしたる花死したる鳥を見るが如し畫いつくにか有らむ畫は然らず能く其眞を知り其情態を精くし筆力を專にし生氣あるを要とす然れどもかの粉本の徒と日を同くして論ずべからず能く其源を知ればなり」と。その謂はゆるおしたる花死したる鳥とならしめたるは是れ實に繪畫家の參究すべき第一義たるべし。

またその寫實の深に過ぐべからざることを戒めたりき。曰く「寫眞は畫の源なり人物鳥獸花卉蟲魚かむかへずむは有るべからず然れども深きに過れば却て

畫意に戻るものなりこゝに寫眞の徒に舞樂の圖を需るものあり寫眞の人思へらく此事容易に爲しがたし先づ舞樂の家に抵り問ふべしと伶人の家に就て問て曰く某の舞樂の圖を寫さむことを要するなり舞人それの實をなし時笛は何の指ををし笙は何の指を放ち太鼓はいかに獨鼓はいかにと樂人迷惑していふ我も亦此を詳にせず一日君が爲めに舞樂を奏せむそれを見て眞を寫せと其時に及て舞樂どもに見ること能はずいかにして其眞を得む終に樂家に入て其技を學びしといふ力むることはつとめたりこれ畫家の意には違へり舞樂の圖を作るに先づ其舞ぶりを見其裝束を詳にして已に其畫なれり笛の指太鼓の撥付るども舉るとも其狀態の大概を得れば更に難なしかの人の如く意を用ひば何の時か畫をなさむこれ深に過ぎたるものと云ふべし」と。この一段の説話は世の寫實

兒を憐みて醜を忘れたるものなり白首屹々として寫實にのみ心を碎き身を役して終に繪畫の大義諦と千里するもの太だ多きを見る願ふらくは世の寫實家たる者我が容齋がこの言を聞きて自ら反る所を知らざるべからず。

容齋の繪畫にあけるやそが眼中には素とより古今なし故をもて必ずしも古名匠を崇拜せずまた強ちに今人を捨てざりき。その言にいへるあり「人上古を貴で今をいやしむも必ず然らず上古の人は淳朴にして事を爲すこと老實なり故に研究練磨其畫の拙なるあれど拙ながらに定見あり況や高尚自得する人や故に其祖をなす者に至りては實に眞妙なるを覺ゆ今時の人は輕薄にして只々始めより其技を賣り習業兩三年はや名利にうつり四方を奔走し富貴の人に媚ぶ何の追ありて其技を精練することを得ん今こゝに

一畫生ありて能く天下を走り遍くして山水の形狀を知り雲霞の變動を見人物より羽毛鱗蟲草木花卉に至るまで能く其情態を熟視し和漢諸書に涉り讀者に問ひ刻苦練磨古今を考へ偽を書かざるをつとめとし終身持ち操りし筆と意と互に活動するに至りて始て古の祖となる人と異なることなかるべし何ぞ今時にして古なしといはん只法と流との窟窟を免れ得ずして人の意に陥ふをよしとするもの生涯畫をしらるのみ」と。洵にこの言のごとく親切にして能く學びたる者が古人の約束なるもの、羈絆を脱落することを得ば古人の頂上に超出し別に一生面を開くとまた太だ難からざる所なり。

心身境どもに雅なればその作る所の繪畫みな雅致ありて拙すべく心身境どもに俗なればその繪畫自か



ら俗氣を帯びて遂に觀る者をして之を厭ふの念を生ぜしむ是は免れざる所なり。この故に梁楷さては吳道子の如き酒を嗜みその天真爛漫たる後に筆を揮ひたりき又明兆のごときは尺八を弄してその機熟したる後にあらざれば書を作るとなかりき近きは近世圓山派の泰斗たりし森寬齋がつねに一粒琴を鼓したるなどみな心身境をして俗氣のために襲はるを避けたるに外ならず。わが容齋の如き常に尤も之を言ひ反覆丁寧なりき曰く「書生心に風流ありて時々名山勝地に遊び林木山川我が胸となりて適する所時文の餘興琴書の暇其書筆をとりて山水及び花卉の類を作り出すに清韻高致いさゝかも俗氣なし是れ人俗氣なくして書く所も亦雅なればなりこの俗氣なきものも書を事として書く所のものを擇ばず巧ならんと欲するに至りては必ず其韻致一等を減却す而して其技妙

處に至る時始めて眞の「韻」を現すさてこゝに至るもの稀れなるべしこれ人物の雅俗によりて書くもの、雅俗によらざるなり或人いふ俗韻なきものを選て寫さば人俗なりと雖も書く所自ら雅ならむと此は大に違へり縱令其寫す所のもの雅なるも俗韻を以て書くときは雅物忽ち俗氣に汚る書生雅致あらむには俗なるものも俗ながらに本色を失はずして却て風流を備ふるに至らむこれを眞に書を作るものとす何ぞ其物を選ばむ人只書の高逸なるを歎て却て我俗胸を脱せんことを思はず斯の如くにしていかで天造に勢驚たるものを得む」と。この言洵に然り見よ池大雅などの作れるものはその書の何たるを問はず皆自ら一種の言ふべからざる仙氣を帯びて見れば見るほど愛すべきを覺ゆまた之に反して春木南溟などの畫きたるものはいたりてはその名山名水を畫きたるも

のも遂に久しく人をして把玩せしむること能はず是はみなその作る人の身心境の雅俗如何によりて然るのみ世の繪畫家たるもの之を思はざるべけむや。そもく容齋の畫を作るは恰かも文章を作るがごとく大に世の繪畫家流と相異なるものありき唐賢の謂はゆる内に譬して外に溢るゝの一語をもて容齋の畫を品すべきか請ふ試に容齋が嘗て門人に教へたる所の言を聞け曰く「位置はあらかじめ定まるものにあらず紙中意の滿るに止る譬へば大紙中に一小草一小石を畫きても意充るに至れば則ちといまる滿紙皆畫なるも猶滿たざるあり溢るゝも滿たざるも心をこゝに用ひざれば知ること難し凡そ畫の位置を定むるに折をわて屢々拂て屢々改めて後朽墨の規矩を失はず筆をひく斯の如くして生氣活動いつくにかあらん凡そ折を用るは服の及びかたき大書或ひは古畫を其

まゝに大小畫に作る時ならでは用ひざるものなり密なる畫に至ては別に疎々たる草稿を下し豫め圖中のすべきものを定め置て畫くれば折を用ふる所なし畢竟平生人物草木宮室などに意を用ひず物事にくらきが故にかゝる煩しきものを用ふるに至るなり先づ山水の圖を畫かむに紙絹の大小を見て樓臺山林人物の有るべき處を意中に定め而後筆を下す其筆を下すに及びて自ら意中に思へる所と異なること有り是れ筆を下さざれば知りがたきことなりその知りがたきは何ぞ意筆自ら別なればなり山林樓臺中にても始めに畫き出せるものゝさまに從て其位置次第に備はり意自ら滿つ始めより林木山川を折にて作りそれを規矩にして畫かば意こゝに極りて更に變化することあるべからず山水猶斯くの如し况や人物鳥獸をや筆と意と隨て馳するやうなれど意筆互に異な



りこの意を辨へずして筆をして意の如くにならしめんと欲するも及ばじ意を枉げて筆に隨はしめんとするも能はじ此際毫釐の差にして必ず千里を懸るに至らむ學ぶものそれこれと思へば甚だしきに至りては畫くべき圖を小圖に作り畫を需る人に贈て其人の意に稱へば其小圖を忽ち大畫にして少しも違へず描き作せるあり夫れ畫畫大小の骨格素より異なり小圖の位置偶々其處を得れども忽ち其まゝに大圖にして豈に全く備はるの理あらむや推して紙中に容れむとせば何の圖かこれならむ茲に至りて筆舌に盡しがたきの意味あり學ぶもの又それこれと思へ」と。容齋もど少くして文學を攻め文をもて羽倉簡堂、鹽田松園など、交を結びたるほどにて當時畫家の没字碑の類ならず遺裡の事は文法上より悟入したるものならむ。

畫法書法一致の説は長崎春徳寺の鐵翁が常に唱道したる所なるが我が容齋の言ふ所もまた同じかりき。曰く「畫畫元一途なり而して畫を本とす故に古人畫を作らずして畫を作るものあり未だ畫をなさずして畫を作るものはあらず畫を學ばずして畫を作るものは筆力少くして潤澤乏し畫生先づ畫を學ぶべきなり今時の風書と畫なるやうに覺えて畫家に畫をよくする者なく畫家に畫をよくする者なし甚だしきに至りては我が落款のみを習ふなど如何なればかく拙きや」と。是は鐵翁神師と同時暗合せるものといふべし。されば人ありその門に入りて畫を學ばむことを請ふものあれば習字をも併せ學ばしめたりきと云ふ。

容齋すでに畫畫をもて一途なりとなしき故にその畫を作るに世の畫家の如く畫筆なるものを用ゆること

なし。その説にいへらく「畫を作るには必ず畫筆を用ふべし余常にこれを用ひて試むるに人物の骨法はさらなり巖石枝幹勁くして味あり小篆文の勢あるものは畫筆にあらざれば得がたし其故いかにとなれば畫筆の鋒長きものは繞ること速かならず速かならざれば弱し故に巖深からず樹圓からず結髮の所に凝滯ありて勁からざるなり畫生これになやむが故に險巖の突兀たる老木の輪圍たる必ず秃筆を揮ふ秃筆何のよきことかあらむ甚だしきに至ては毫鋒を燒禿して此に換ふ其惡拙を知るべきなり何ぞ早く畫筆を用ひざる是れ作畫に意を留めざるの故なり畫筆を用ひしと思はるゝもの漢畫よりして多く觀る所なれどしはらく言はずわが朝の蛇足、永仙、雪舟等に多く見る所なり畫畫一途の論故ある哉畫生試みて知るべきなり近世の人浮華を好むがゆゑに畫も亦麗はしきも

のしみを好で殊に毫鋒の長きを用ふ鋒長ければ筆をひくに易く美なりと雖も弱くして薄きを如何せむ畫筆は秃潤ありて勁く且つ圓なりよく、意を留めて此味を知るべきなり」と。けれど容齋かつて福山の士にて筆札をもて一家をなしたる小島知足に従て畫訣をうけ頗るその妙を極めたりしかばこの畫筆を用ゆるの得失など自ら神契せるものなるべし。

容齋の畫を作るや世の畫家の如く卒然として筆を取て一掃したるがごときことなく曾て前章にも述べたる如く必ず先づ之を畫史に質し工夫沈思したるの後、に當て解衣盤礴神暢び心利かなるの機に乗じて筆を染めたりき。然れば如何なる權貴の需あるとも決して席畫などを作りたることなし此をもて容齋が前後作りたる畫の中には際立て見苦しきものは絶えてなし。



阿部伊勢守が幕府の老中を勤めたる時のことなるが一日伊勢守一二の大諸侯をそが邸に招きて饗應し餘興を添るためにとて都下に名ある畫師らを召して席畫を作らしめむと欲りしその旨を大久保一翁に傳ふこの時の伊勢守の威勢は殆んど今の世の人が信ずること能はざるほどにすさまじく泣く兒も聲を潜めたる有さまなれば都市の畫師らみな怕れをのこきてその邸に参し運ることを要ひたるもの如しされど容齋のみは毅然として之を峻拒して曰く余すでに跡を翰墨の間に寄せ優游自ら適し貴人の前に屈伸俯仰するが如き決して堪ること能はざるの所なり况いて席畫の如きは誓つて之を作ることも能はずとて應ぜず而して伊勢守の召すこといよく急なり此に於いて中に立たる一翁いたく困じ果て別に一駕を備へて親ら容齋の家に来りて曰く今日都下の名家みな來りて

特り先生のみその席になきは侯もいと物足らぬ心地をなす所なれば切に會したまはむことを望みつ強ひて禮に従ふて屈伸したまふことを須みずまた必ずしも席畫を作りたまふにも及ばじ唯だ席に列なりたまひて打くつろぎて風月韻事を談じたまひて事足れり願ふはこの一翁に免じて任けても來りたまひぬとてその言いよく「恭しくしていと懇なりき容齋乃ち一翁のために氣の毒に思ひ遂にその駕に乗り一翁に伴はれて伊勢守の邸に上りぬ。時方さに宴酣にして畫師ら競ふて席畫を作りて賓客の笑に備へり。席上たま〜春木南溟あり南溟は權貴の意をとるに妙を得て常に御座敷のみにて口を糊したる畫家なるがこの日また賓客の間に俯伏し頻りに扇を呈し宛がら狭斜の帯間なる者に異なることなし容齋この有さまを一見して最とにが〜しき極みに思ひしみ兩手

を膝につき眼をつぶりて俯ふきたるまゝ始めより終りまで一語をも發せざりきとぞ。こは故の大久保一翁が容齋の氣節を稱するの次には毎もこの事を語りたりき。容齋が穉々たる氣節は傳へてもて世の畫家たる者の鑑ともなすべきなり。また容齋が門人を養ふや前章に記せる如く流派及び粉本に拘泥することを戒め始めに起筆運腕の法を教ゆるのみにて即ち此もて足れり他は天地の間ありとあらゆる氣形類に即きそのれが見聞する所のものに意匠を加へて繪畫の本旨となすべしと言ひき。尙し門人中に容齋が風に倣ひて書きしものを呈するときはその筆眞に迫るとも能く予に肖たりとて悦ぶ氣色とてはなく却て一種の筆意にておのれが新意匠を書き出したるを見ればその畫太だ巧ならずと雖も欣然として之を賞し丁寧に筆を加へて正したりき。

容齋は學術をもて繪畫の基となしまた書畫一途となしき故にそが門に入る者あれば先づ之に讀書をすしめ書を習はしめたりしかば一室の中此に書史を讀みて節を拍つ者あれば傍に古法帖を學ぶ者詩歌を朗吟する者あるは劍をとりて舞ふ者など雜然として席に滿ち畫家の塾とは思はれぬ有さまなりきといふ。その門人を養ふ法は世の畫家などたがひて最とあもしろし。容齋がその畫道を成就するため心に苦めたるは既に述べたる所の如くなるがその繪畫界に貢獻して最も後世の繪畫家に利益を與へたるものは實にその歴史畫なりき。容齋よのつね世の畫家の描く所のもの多くは外國の人物にして却て我が日本の前賢の事蹟に筆を染るもの最と稱なるを慨きたりき。その言に曰く「鳥獸最



魚花卉の類皆畫の精粕なり山水これに亞ぐ僅かに只  
兒女子の眼を歎ばしむるに過ぎざるのみそれ猶容易  
に得ること能はず况や人物をや夫れ畫は人物を畫く  
を本とす其故は漢書よりして多く孝子節婦忠良の士  
を寫す孝子節婦忠良の士を寫さむには先づ筋骨を明  
かにするにあり筋骨正しければ狀態自ら備はり其  
情筆の外に顯はれ人をして萬一に興起せしむるに至  
らむ然らざればいかむぞ畫の徳あることあらむや漢  
土の人物を畫くもまた可なりと雖も同くは我皇國の  
人物を畫くにしかず皇國に士闕けたりと雖も孝子節  
婦忠良の士に乏しからず余竊に怪む古へより我國の  
人にして我國の人物を畫くことをせず多く漢土の人  
物を畫くいかなればかくの如きや理に於て悖れりと  
いふべし聖賢障子に辨内侍が歎める宜なるかな」と。  
その畫は人物を畫くをもて本とすといへるに至りて

は素より點頭すべきの論にはあられど我國の人物を  
畫かざるを悖れるといへるは大に理ある所なりとい  
ふべし。そはとにまれかゝる意見なりければ容齋は  
努めて日本前賢の事蹟をのみむねと畫き初めたるが  
之を成すに先立ものは史學なりとてそが友にて當時  
宿儒中にもわきて史學にふかき羽倉簡堂に諮ひて多  
く史籍を涉閱しまた骨相を知らずはとてその道の學  
者の門に入りて頗る蘊奧を極ることを得たりきその  
力を繪事に用ゐるの心切なる多くその類を見ざる所な  
らむ。世の繪畫家の多くは骨相に通ぜず故をもて寒  
山拾得の如き風流佛の畫きてもまた儉父を畫きても  
同む骨相なるがごとき笑を博するは最も多けれど特  
り容齋に至りてはこの弊なし是れ容齋が歴史畫にか  
けては群を抜くの稱ある所以なり。  
容齋すでに歴史畫を作るに尤も必要なる當時の衣服

器玩宮室の制を審かに知ることを得たりしかば此よ  
り多く南北朝このかたの忠臣義士さては節婦などの  
事蹟を描きたりきとは後進の繪畫家を利益したること  
と大なりき然はあれど容齋の本志とする處は此にお  
らざる實に之をもて三百年來地を拂ひたる大雅を宣揚  
し名節を激勵するに外ならず容齋が歴史畫の尊き所  
以のもの即ち此處に存す世人須らくその毛色のみを  
認めて眞面目を差過することなくむば即ち好し。  
容齋は多く史跡を畫くのみをもて遂に自ら満足する  
こと能はず我が皇祖の紀元より近代に至るまで代を  
追ふて上げ摺紳より下は士庶人に及ぶまで大凡その  
事の傳ふべき者を網羅して之を畫かむことを思ひ立  
ちき是れ長へに畫家の珍たるべき前賢故實を著すの  
發願ありしなり。  
前賢故實の思立は何時頃にありしかは今確かに知り

がたげれど菊池武磨の母（即ち容齋の女にして養子  
武憲に配したる者）の言ふ所に依れば文政の初年に  
初めて業を起しきその文化十四年（容齋年三十）に  
徳川氏を辭したるもこの書を成さむが爲めなりとい  
ひきされば容齋は而立前すでに之を思立たるものゝ  
如し。  
久貝因幡守、羽倉簡堂などみな容齋の志を聞き節  
を拍て激賞し乃ち爲めに請ふて柳營秘庫の古圖書を  
閱覽せしめ又之を諸侯に介してその家に秘する所の  
舊記などを見せしめたりき容齋こゝに於て鎌倉以來  
の事につきては略ぼ之を知ることを得たりき然れど  
上古の事に至りては尙ほ疑ひなきこと能はず江戸に  
ては之を審かにするに由なく又之を質すべき有職  
故實家に乏きを以て遂に行李を修めて京畿に向て旅  
立ぬ。



武磨の母およびその門人松本楓湖などの説く所に依れば容齋の上方行は四十歳を過ぎての後なりきと即ち文政の末年のことなり。

容齋の京に留ることおよそ三年あまりにて遍ねく有職故實に精しき公卿の門を叩き或ひは神社佛閣に詣でその建築を見その什寶を拜覽し又土佐、圓山などの名匠を訪ひて互ひに商量しその益を得る所太だ多かりきと云ふ斯くて又去つて大和の古都を探りぬ。

容齋の大和に入るや先づ奈良、法隆寺、三輪、初瀬などの古蹟を訪ひて遍ねく古器圖書を調べまた南朝の遺事を探るためにとて吉野に上りき曾てその門人西村北郊に書きて與へたる吉野紀行のぬき書あり曰く。

丁亥の年(文政十年なり)吉野の奥如意輪寺に杖

白くかたやけるさま深遠筆に及ばず雲の山頭を吐呑する幽禽の時々鳴くも聞きなれぬ聲なり。

西へ行く月を見るにもしのぶかな

むかしすみけむ人の心を

月や、かたぶきてにしの圓窓にのぼる頃不覺一睡の夢をむすべり醒て見れば東天白して上人の影ありくともみゆよつて立出でんとて戸を開けば山雲雨を呼で嵐はげしく吹きわたれり曉の山のけしき雲山腰をめぐり谷くの人煙白く起るなど見つ、歸る既に萬城より雨來りてわづかに衣を濡せり。

こは吉野紀行中の文なるを西村君の求むるまゝに書を加へて書しておくる 容齋道人

容齋もと南朝忠臣の裔をうくる者として其かみの事ども痛想して感慨うたゝ深かりしなるべし加ふるに西

をといめしころ十一月十日のことなりし若清水の月見んと黄昏過ぐる頃よりかの寺を出で、山に登ること五十丁雲足下に起りて咫尺海のごとく只一痕の月あるのみ飄然羽化して空中を過ぐるがごとしこの間奇言ふべからず。

抱月直過金嶺夜。埃々白々世何看。山浮鷲背一雲如。海。大笑乾坤在。三昧端。

樵夫を友として稽のぼる愛染堂にいたる頃初更より下りて若清水の西行庵に着。

重々杉又檜。巖々霧還雲。秀嶺背行盡。若水隨歩聞。有庵背應宿。無月徑何分。流派今誰汲。默言猶在君。

草堂わづか三疊に爐をきりて一片の能をしきたり上人の木像に對して坐すること通夕櫻木簾を捲へども一葉だにのこらず只枯尾花面をめぐりて月に

行法師はそが平生尤も悦ぶ所なりしかば草枕はるけき旅路の勞にもあらで半年餘を吉野の山奥に過しけり。

容齋の吉野にあるや如意輪堂の僧たまゝ容齋の南朝忠臣の裔にして書を能くするを聞き後醍醐天皇の御像を書かむことを囑みき容齋大に感激して之を諾ひ乃ちまた京都に至りて天皇の遺衣冠を拜觀し齋戒すること七日にして後に筆を染むこの御像の成るに當りて山陵鳴動するもの三たびなりき世傳へてその至誠遙かに在天の御神慮に應ひたるものとなしぬ。

容齋の大和にあることおよそ一年餘にして江戸に歸りまた北越および東奥をも探りぬ蓋しその代料を調ぶるための旅行は前後六年餘を費したりきといふその故實を搜索するに熱心なる殆ど比倫を絶せりと云



ふべし。

容齋の江戸に歸るや家事大小となく悉く之をその妻飯田氏の手にて委ね一室に潜みて客を謝し専心この業を初めぬ。

むかし唐の吳閻二氏百代畫聖の稱あり而かもなほ仲由木劍、明妃畫朝の墨を免かれず吳閻二氏且つ然り況いてその他の畫家をや。然れば容齋は之を成すに當りて誤謬なからんがために苦心したること實に一方ならざりきそは後世傳ふる所の前賢肖像なるものは各々來由ありと雖も而かも疑義あることを免れず或ひは後人にして上代の装を爲し或ひは古人にして後世の装をつけて一身の服飾古今を採つたるものもまた有るをもてその全く取りたるもの僅かに十の一に過ぎざりき全く信を置くに足るべきものは率ね之を縮寫しその他は唯だ顔容を取り或ひは服飾のみを

取りき。

また寧樂朝以上のものは世に傳ふるもの太だ希れなるをもて率ねその人材品行に因てその神韻風度を想像し意を構て之を畫きたりきその官服戎裝および凡百の器物の如きに至りては確として知ること能はず故に國史と古神祠佛刹あるは舊家の藏する所また州郡の地を穿ちて獲たる古物とに據りその年代を推し彼此參酌し湊合して之を寫しきその引用したる書のみにてても上は古事記より續起、僧史に至るまで無慮百卅八種なりきといふ考證の勞想ふべきなり。かくて神武の朝の可美眞手命より初め後龜山の朝の細川頼之に至りて筆を止むその間すべて五百人ものくみ小傳を加へて瞭然たらしむ。この書の全く脱稿したるは天保七年丙申の春の初にして即ち容齋の年四十八の時なりその初めて業を起

せしより前後十七年を経たりきその精力の大なる實に尋常にあらざるなり。

容齋がこの業を成すの際に手塚光照(真仙と號す長沼侍醫)長谷部惟正(杉村と號す門人なり)西村方大(北郊と號す)天野眞暎(平岸と號す駿府の人なり)四人始終側にありて校訂の勞をとするその功また没すべきにあらず。

丙申の春三月容齋自らこの書の初に序して曰く、

「尙因ニ斯編ニ使ニ童蒙ニ粗見ニ前賢事蹟ニ長而益詳ニ國家治教風俗之盛美。則方今濼々然合ニ哺鼓ニ腹乎春風和氣之中ニ者。皆亦知ニ聖君賢臣二千年來休養生息德鉅功崇ニ矣。庶乎有ニ少補ニ于人心忠孝之事ニ云。尙第以ニ尋常畫譜ニ視之。則非ニ余區々訓蒙之意也」云。羽倉簡堂は跋を書して云ふ「容齋菊池翁實東肥帥寂阿公之裔。而茲所圖。迄南北朝一而止者豈有所感於乃

祖ニ乎。此の一語實に能く容齋の微意の存する所を見徹したるものといふべし。

清の道光年中(即ち我が天保年代)吳人顧湘舟といへる者あり吳郡名賢圖贊八卷を著はし先賢五百餘人の像および贊を載すその牀裁略ぼこの書と相類せり又た一奇と云ふべきなり。

さて容齋は十餘年の長きまの辛苦を嘗めて漸くにして前賢故實を物しつ然るに容齋の家もどより裕かならず加るに多年諸方に遊びたる爲めにその窮いよく甚しかりければ自ら之を梓に上すべき計のあるべきにあらずまた都下の書林も一人として我こそ引受てむといひ出る者もなき故に折角の苦心をなしたるも之を世に出すこと能はずその脱稿より以來殆んど二十年間空しく之を篋底に藏めおきたりきそが憾いかばかりなりけむ。



然れど天またこの名著を埋却せしめず此に因縁を假してそが志を成さしめたりきそは故の浄土門主福田行賊と邂逅して忘年の交をむすびたるがその緒なりけり。

福田行賊は今事珍らしく言ふまでもなく學徳ともに高く淨門に在りては實に二百年來の碩徳なるが當時の老儒と稱する者率ね口には仁義を説きながらその行を問へば却て俗人よりも名利を貪ること甚しきを厭ひて曾謝して交らず唯だ小島知足、飯野厚比の二人と交りき知足はその通稱を五市といひ備後國福山の人にて尤も書法に精しまた厚比は又の號を嫩園と稱し法號を一蓮居士といひ景樹の門人にしてやさしき歌を詠みたる人なりこの二人は心術も最と正しかりければ常に親しみ益をうけたるが一日行賊語りけるは稍久しく書を能くする友を得まく欲すれど

の人と爲りを知りその交宛かも盧山遠公と陶潜との如くなりき。行賊は即ち容齋の爲めにをりく繪畫に益ある古經を擧げて垂示し容齋またその教に依りて多く佛事を作すべきものを書きぬ。容齋かつて行賊の爲めに金粉の上に如來を書き自らその因由を記して曰く。

行賊上人依關救乘之暇。使余更造妙覺明體于光相幢上。於是。恭遵佛制。設色不取。藉皮膠。代以樹脂。蓋自起筆。乃至卒業。凡五十餘日。方此時。上人亦入關精修。無少懈怠。云。弘化丁未嘉永朔日。小天台山下隱士容齋保。書沐蘭記。願末一如此。

この函書を見ても容齋と行賊と神契する所のもの太だ深かりしを窺ふべきなり。容齋は行賊に逢ひて實やかに約りつゝも日を經るま

も當世の畫師と稱する輩は多くは俗漢のみにて相近つくべからずわはれ二君の交遊の中にて心も清く行も高き畫家あらばひき合せてよどあるに厚比の曰く上人のたまふ如く多くは隨るに足らず此にひと菊池武保容齋と名のる者あり南朝忠臣の後なるが和歌を余に問へりその人品いと高くして當世多く得やすからず上人彼に交りたまへ彼も上人の如き高德に近づきたらむには彼の爲めにも此上なき幸なりとて即ち容齋を小石川の傳通院に招きて行賊に紹介しぬ是れ容齋と行賊と相識りたるの始めなりき東台花下に始めて相會したりといふは全く誤れるものなり花下會合は暫らく相別れて久しぶりにて逢ひしを容齋之を奇として圖にしたる話を誤りたるものなるべし。

容齋と行賊とはその年三十餘も違へど互ひに能くそ

こに物みな平生に遇くなりしかば乃ちこの前賢故實の稿本を似めし且つ資なきために年久しく篋底に藏めて畫魚の腹を肥やせるよしをも告げつ行賊もその書の大に世の名教を激揚するに足るべきものなれば如何にもして之を梓に上せてやらむと思へども如何にせむ僧伽たるの身はかゝる大枚の黄金を得るよすがもなく唯だために憐れに思ひしみて日を送りけるに萬延中にいたりて此に圖らずも最とありがたき奇しき因縁のありて黄金一千兩の供養をうけたりき。

江戸牛込に加藤金兵衛とよべる商人あり家資鉅萬を累ねて名ある者なり一女あり挿頭の花と愛しみけるが年頃にもなりければ盛んに衣服調度の料を具へて之を某氏に嫁しぬ然るにその女幾ほどもなくして身まかりき某氏乃ちその女の持ち來りたる所の衣服調



度を悉皆里方に贈かへしたり加藤を辭事なりとし  
て受けずして言ひけるは我が女すでに貴家に嫁せし  
上は貴家の人にてその持品はみな貴家の物たりさる  
を今更その品を返へさるゝは死したる女房を離縁す  
るといふに異ならず世間かゝる理りやはあるとてつ  
きもどしき某氏はその言の理あるも妻なれど子なく  
之を譲るべき者どもなく且つ後妻を迎ふるに前妻  
の諸道具の遺れるは此上もなき都合なりとさまざ  
まその情實を述て返戻の旨を申し入れてやまざりし  
かば加藤氏さらば我に好き思案こそあれ今深川にお  
はす行賊上人はむかしの無能和尙、祐天上人にもを  
ささく劣りたまはぬ聖なりと聞き侍り之に供養しま  
るらせたらむには衆生濟度の料にもつかひ給ひて我  
が女の冥福の爲めにもならむとてやがて相談の上一  
切賣代なして數百金を得しかば尙ほ兩家より補ひて

一千兩となして行賊に捧げぬ。  
行賊この千金を得るに及びて容齋の平生の心事を思  
ひ出し急に容齋を呼びて告げゆるやうは今日もは  
ずもこの金を得たり半分は足下に贈るべし之をもて  
前賢故實の刻料に充てられよ決して返済するに及ば  
ず然れど足下もこの金を使ふ上からは佛事をせせ  
はかなはずそは後ゆるく談ずべし先づ上梓に取か  
ゝるべしとあるに容齋この賜を拜して最とありが  
たく天にも上る心地して直に版をまこしぬ。

前賢故實の版にえり初めたるは萬延元年なるが九年  
を経て即ち明治元年の九月をもて功を竣ゆその初め  
て業を起せし以來幾んど四十九たび委葛を閱みしたり  
きと云ふ。

この書の刻成るや關白藤公に依て之を孝明天皇に献  
げ天皇ふかく感じ玉ふ所ありて之を内庫に留めさせ

玉ひき既にして特に勅ありて和氣清庵に神號を退  
賜せらる世或ひは之をもて前賢故實の致す所なりき  
といふ。

前賢故實の一書は實に日本書家に益する所大なるの  
みならず史を學ぶ者もまたその恩恵を受ける大なりま  
た實に日本人のみに止らず泰西の學士が日本の美  
術及び歴史を講究せむとする者は必ず遠くこの書を  
取寄せて珍とす支那にても大に之を珍重するよしは  
前の蘇報社の社長にして文人畫をもて名高き胡鐵梅  
の親しく語る所ありき前賢故實の眞價即ち知るべき  
なり。

さて容齋は圖らずも行賊の恵をもてそが三十年來の  
志を成すことを得てければ之に酬ゆる佛事を作さ  
るべからずとて行賊に謁して之を問ふ行賊の曰く  
そは五百羅漢を描きて納めたまはば彼の女の冥福の

爲めにもはた施主の爲めにも此上の功德はあるまじ  
ぞとあるに容齋最と悦びて言ひけるは我すでに世に  
もめづらしき因縁にて賜をうけまた聖衆に筆を染  
るは尤も願ふ所なりとて乃ち齋戒沐浴し一日に二人  
の割合もて二百五十日を費して五百羅漢を十二幅に  
書き更に中幅に三尊、左右十大弟子十六羅漢の三幅  
を添へ合せて十五幅となして行賊に捧げぬ。この羅  
漢の容は支那杭州淨慈寺の塑像摸本に據りたるもの  
なるが筆力雄健にして設色もまた好く實に容齋が一  
生涯中に作りたるが中の大作なりとす。

容齋がこの十五幅の末にもしたる落款に略ぼこの  
因縁を記せり曰く。

去歲庚申初冬。加藤智勵來請。余畫釋迦文殊普賢  
及十大弟子十六羅漢五百大阿羅漢等十五幅。並聞  
智勵母發願。令智勵故妻妙馨之遺費而作佛像。



寄附一寺。欲以爲其先祖考妣及亡妻之追薦也。願仙聖之倫各具神通力。備慈悲相。如余之凡筆何足<sub>レ</sub>以寫之。然隨喜其母子至誠孝貞之懿。則亦有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>堅辭者。如五百羅漢。形容多據西土抗州寺塑像模本。蓋自起筆乃至卒業。凡半歲餘。其間智勵母子亦力修善事。無少懈怠。因誌其由。寫善願之意云。文久初元秋佛歡喜日。容齋居士并願。

この後明治四年の二月行誠この五百羅漢を供養するやその函に題して曰く。

文久元年の秋のころ加藤金兵衛志を發して容齋菊池翁に五百羅漢の眞を寫さしむ十五軸になりぬ。或實に神通を現すと謂ふべし明治辛未二月後來の供養をらまほして永くそのれに附屬す其月新に供養の式を行ふ當日は結縁のためにとて菊池翁

も留待りぬ供養の法師を十六口に定めたるは十六羅漢を表したるなりけりやがて其かたを翁に托して畫かしむ此上下きたるは金兵衛なり供養に用ひたるは銅の臺子と此一幅を添て加藤氏の家に贈るながく子孫に傳へて祖先の志をしらしむべし明治壬午七月十四日 東京増上寺大救正沙門行誠録す。

これこの五百羅漢の出來したる所以にして即ち容齋が前賢故實上梓の資を得たるに酬めたるものなりき苟くも前賢故實を續かむ者はこの一段の因縁を知らざるべからず。

この後明治十六年の三月三日に至りて行誠乃ちこの五百羅漢十五幅をその高足なる深川高橋本誓寺福田循勝に附屬し且つ之を護持するの方軌を垂請しき曰く

一 一年兩度彼岸貴坊所居に於て舊規の如く供養すべし。

供養式の具容は隨時不定なるべし一七日を期して稱讚並に道俗の爲に說法すべし羅漢應現傳三冊附屬之。兩回の供養雜費二十圓限。

一 貴坊命終後之附屬は弟子法類たりとも護法尊重の志淡薄の衆をば傳持すべからず若くは他宗他門也共其仁物護持すべき器と見得るに於ては附屬すべし宗縛類執を捨離して無所得に住する固より大聖の公意なるを以てなり。

一 世間無常なり万一世上飢饉其餘天下の大災等有之候節人溝壑に顛れ乞人土地に充満する様の時節あるに於ては僧徒は大悲心を基とし衣資寺産を盡して窮迫を救療申すは固よりの志なり右様に及ばし無遠慮此聖畫を賣却して米錢に易え

存者得樂の方便とすべし。價直の高下を論ぜず救窮に急なるべし猶此事を施家へ斷るべし。微塵計りの懸着心を懐くこと勿れ但し造像起塔等の容預の喜捨には之を禁ず是録眼福經版の財を以て救飢を行ふ兩回に及ぶに倣ふなり。

右三條を以て聖像護持の方軌とす一切有爲法如夢幻泡影と説つれば此とても決定の法あるに非れども一日の護持は一日の護法扶宗也乃至百年に至る如是是を以て尊重珍敬供養するに於て廣くは聖體安寧國家安泰の御所りなり遠くは怨親平等存亡衆生の回向なり自行化他茲より發生し福德智慧茲より出現す苟も輕慢玩弄の志あらば現當過罰決して空しき事なし恐るべし昔し本所羅漢寺の五百羅漢地震出水の爲に損壞視るに堪えず愚老往て此が洗浴を行ひ假屋を造りて遷座し奉りき當日住寺



に言て白く師也聖像を以て座親泥親す果して過罰  
 あらん請ふ奉仕尊敬書式に還れと後年傳聞す此僧  
 木より墜ち石に首を損して死せりと蓋し慳吝輕賤  
 自業自得の報を獲たる者なるべし前車の 賊あり  
 幸に覆轍を恐るべし録して護持の人を賊む苟  
 も其人を釋ふは所謂其人を憐むが爲なり。明治十  
 六年三月三日附屬の日三條山沙門行藏  
 世間は無常なり萬一飢饉などありて人の溝壑に顛す  
 る時は遠慮なく急に之を賣却して賑恤せよといひた  
 るは行藏が大慈なる群生を憫むの心のよのつねなら  
 ざるの見えていとたふときか此の行藏の心ぞやとて  
 三世の諸佛の心ともいふべく加藤氏が行藏に捧げた  
 るの本志にも副なるべし。  
 さて曾て前にも述べたる如く容齋夙に王室の式徴を  
 慨きたりしも分その分に匪らざるを以て 往にそが

丹青の上に古忠臣の事蹟を顯揚し四海勤王の志を  
 激發するの方便ともなれかしとて老腕を振つて忽ち  
 ざりしが端なく黒船の來航す是は維新の導火と成り  
 て志士驍をつぎて起つた此より凡そ二十餘年の間は  
 世は刈菰と亂れはてて天つ光も最も暗かりしかば容  
 齋も年こそ老いたれ大君の大事にはこの老耄を捨て  
 むとて常に甲冑を備へ太刀をも研ぎすまじりたりし  
 に天運循環し容齋はそが年八十一をもて明治の維  
 新にめひぬ是時の容齋が喜びは實に狂を病みたるも  
 の、如くなりき。  
 車駕の東幸するや容齋乃ち三條實美、東久世通禧の  
 二公に因て前賢故實十卷を御前に獻す今上その書を  
 を御嘉賞めらせられ「日本書士」の號を賜ふ容齋に  
 どりては實に萬戸侯に封ぜられたるの恩にも優たる  
 なるべし容齋乃ちこの時より「期日本書士」の印を

用ひぬ。

維新後は容齋もよる年波につれて手も自ら顛ひた  
 れば已むことを得ざる囑の外はまた多く大書を作ら  
 ず明治七年に至りて土佐日記繪巻物三巻を作りき抑  
 も紀氏の土佐日記は千古の美文として學者の誦する  
 所たれど之を畫に成したるは前古未だ之なきをもて  
 容齋つねに之を藝苑の一欠缺事となしければそが年  
 八十七の時に子孫への形見にせむためにとて書畫と  
 も三巻に物したりき。

この繪巻は地は絹本にて船路の日記なれば圖ごとに  
 水波のなきは少きに悉く水波の畫き方を替へたり  
 その意匠の博きを知るに足るべし殊にその服飾調度  
 家屋垣塙舟船の構造など悉く皆古實に徴したれば  
 昔を今に見るが如く又布置は奇勝にして人物姿態の  
 古雅なる筆に生動の妙あり詞書は紙本なり容齋は書

には繩索を用ひず蓋し手の拙なきを愧ぢたる爲めな  
 らむ然れど書もまた決して凡筆にはあらざりしがこ  
 の巻を書す時にあいては手顛ひて字跡もさだかなら  
 ざれども却て奇古にして壯年の書よりは善きが如し  
 書は斯く手の顛ひたるに畫に於ては少しも顛ひたる  
 の迹を見ず蓋し五十年練磨の効とも見るべし。この  
 繪巻の卒業するや容齋之が落款に書して曰く。  
 老の手のふるひながらに土佐日記をうつしてその  
 長き船路のさまをぬはせまがきて見孫らの爲に残  
 置かんとするは明治七といふと己の卯月中の七日  
 なり。八十七のおきな容齋武保。

容齋の歿後菊池家にては如何なる事情のありけむこ  
 の繪巻を親族某に與へるのち某またある骨董商に賣り  
 わたしたるが外國人某之を見て垂涎しそが歸む所の  
 金をつみて購はむとせし所にたま〜福田行藏の信



徒等之を償ひ得て上人の消閑の料にて寄附せり行  
賊之を得て最と喜び自らその縁起を書しきは容齋  
が逸事をも知らるゝものなれば此に收めつ。

容齋名は武保南朝の忠臣菊池武時の遠孫なり徳川  
幕府の書臣なれども仕を辭して専ら學道を務む天  
性書を好しより一機軸を出てよに比類なしと稱せ  
らる維新のはじめ自作の前賢故實廿卷を進獻す獻  
感ありて厚く恩賜あり後日しばし御所望の書な  
ど奉りしとかもとより無欲の人にて不利に食着  
せざる人なり其かみ下田浦賀の邊に黒船のよりこ  
し折にや人の心も何となく色めきしころものれ翁  
の宿訪ひ侍りしにかたはらに具足槍など引よせて  
有りしを見て翁もいくさの支たくし給へるにかと  
問ひたるに古稀の老人物の用にはたゞざるも夷賊  
の首一つ二つなど笑乍ら申さるゝかも其膽力のほ

と思ひしられき。うばき嶺山其頃はまだあがり  
し一日庭の花見んとて翁と二人あのが庵に招きし  
日權山は謙遜の人にて老翁に古今の書法ともの  
疑を請問したるに翁少しもゆづらず事々に申教  
へられたるいとをかしかりき。此土佐日は昔よ  
り書巻物に絶てみずとて翁が八十七ばかりの時物  
せられたる也けり其ころは手もふるひ酒づきなど  
もたれても酒こぼれなどしてければそばのもの  
手かりて呑むほどなりしかばかゝる書まきいかに  
してと尋ね申せしかば書は馴てければむづかじか  
らねど文字には困じ侍ると申されき家に傳へあか  
んとて物せられたるなれども翁なくなりて其家も  
火災にかゝりつるころ此親屬の家にゆづりたりし  
を又其家もさまざまの事にてよき價まつといへる  
を或外客の價の貴賤をとはす得まじと申事を片岡

五兵衛といへる市人の傳へきよて此は皇國の寶物  
なりまた取らるべきものにしもあらぬをとて遠に  
あがなひてける夫がかたの同志の人々もろ共に喜  
びて翁の舊知音のちなみもあればとてやがてあの  
れが庵に贈られたるなりけりあのが所藏の五百羅  
漢十五軸は翁が生涯の大作なり春秋の彼岸に一七  
日の供養すれば此巻も供養の一聯にとて其いはれ  
をかくはしるしつ。明治二十年一月増上寺の隱士  
老比丘行賊八十二百書

末のよの鏡なるらむ土さの海の

ふかき心をうつし繪にして

行賊の滅度するやこの巻物もまた福田循誘に傳はり  
て今尚ほ深川本誓寺に藏せりかゝる大作の外つ國の  
手に落ちずして日本にのこりたるは此上もなき幸な  
りけらし。

また容齋の絶筆の書ともいふべきは神功皇后の御像  
なりきこは某軍艦の囑なりしが外つ國を征して日本  
の武威を顯はしたまひたるはこの君が始めなりとて  
憤發して筆をとりきこの御像の成りたるは十一年の  
夏の初めにて此より老病ますく加はりまた手に筆  
を受らず中ころ少し快くなりて全快の祝宴を開か  
むとよりく相談ふ中に病忽ち革りてその年の  
六月十六日に壽九十一歳をもて永眠し下谷谷中の公  
塋の中に安りぬ。

日本にて九十まで生きたる名匠は殆んどなく信實、  
覺融、明兆、元信などみな八十をこえたるのみ唯だ  
越前介岸駒が九十まで生きたりき西洋の名匠にても  
僅かにシヨンペリニが九十、チシャンが九十九の長  
壽を得たるのみ容齋がこの前古類まれなる長壽を得  
たるにてもそが身の健康なりしとそが精力の尋常な



らざりしを見るべし。  
容齋、驅幹太だ大ならず然れど目の光り顔のさま自づからなる威嚴を備へ何さま一くせあるべく見えて人を畏れしめたりきと云ふ。

前賢故實の外に著作としては枕紙と題する隨筆七卷及び詩集一卷歌集一卷あり中にも枕紙は繪畫などに開したるものが意見を記した書と挿み最と世に益あるものなるが未だ刊行せず。

容齋壯にして飯田氏の女を娶りて四男一女を生む長は武昌といひ出て河原氏を嗣ぎその外の三子皆早世せり飯田氏また先たちて歿す乃ち繼で榊原氏を娶りしかどもまた先づ身まかりき此よりまた娶らば榊原正義の子武彦を養ふて配するにその女をもてす即ち武彦の父なり武彦今は書を業としてその母を養へり。

如上述べたる所に依りて容齋が一生は嘗て知ることを得べきをもて此に贅語を録して頌するを須めず唯だ子爵秋月種樹がその墓に銘したる語を舉す曰く。  
豈特寫真之妙。兼存慨古之誠。先生之前。既無先生。先生之後。世仰典型。  
秋月子爵は早く容齋を知りてその前賢故實を宮中に献ずるに當て幹旋したるほどにて容齋が知音の一人なりきこの語もて容齋を千秋に托するに足るべきなり。

浮島か原にて

齋池 武保

春なれや布士の根あるし寒けれど

小草もえいつうき島が原

梅開得客

いつの間ににはひを人にしられけむ

今朝こそ梅の花はさきしか

神無月末つ方大原の里にて

山のはの松にゆふ日はさしなから

かたへ雪ふるもほはらの里

海邊納涼

浪よする松のしつ枝に風ちちて

玉津しまえは夏としもなし

### 狩野一信

黒田清輝かつて佛國に遊びて巴里の美術館を訪ふや館長某博士開口第一先づ狩野一信の事を問ひたりきと云ふ。一信の名夙に外國までも傳へられたるにも拘らず却て吾が邦に在りては未だ廣く知られざるは何ぞや蓋し一信、一切を放下して大作に従事し身を終るまで人の爲めに雜畫を作らざりしに由るか。

明兆、等楊よりこのかた神仙佛陀に筆を染る者世々其の人に乏しからず。然かはあれど多くは境界、手腕二つながら未だ達せず謂はゆる心仙せずして仙を畫き心佛ならずして佛を畫く者のみ。微風吹く幽松の旨を會するにあらずむば如何ぞ寒山の風流古佛を描くことを得むや。俯し近代に於いてその境界、手腕共に仙佛を畫くに堪えたるものを舉れば一信のこととき或ひはその人ならむ。

一信又の號を顯幽齋といひ幼名を逸見豊次郎と稱す文化十三年をもて江戸本所の林町に生れぬ。生來畫を好み筆墨をもて竹馬の戯に換へ能く草木鳥獸の形を圖して往々人にも譽めらるるまゝに自らもわはれ一代の畫人とならむとて父に請ふて初めて等琳派の或る畫師の門に入りき。後いくほどもなく四條派を學び又土佐派に轉ず。時に一信自ら謂へらく他事を



は且らく措く唯だ設色の一事にいたりては狩野氏に  
あらずんば竟にその妙を究るを得べからずと最後  
に狩野素川の門に入り日々その盤に通ひぬ初めに素  
川に學ぶといへるは傳者の誤なりとぞ。

一信商買の家に生れながら牙齋を執ることはせず繪  
事にのみ身を委ぬるよりして遂にその兄の爲めに疎  
まるゝにいたりき。一信二十二歳の正月元旦たま  
く兄と争ひ箒をもて打擲せられ大に憤り家を  
飛いだしつはらに平生の志を素川に告げ僕となり  
てそか家に住こみ飯を炊き水を汲むの暇をぬすみて  
繪畫を學ぶこと三年はかりその業大に進みき。是に  
あいて獨り心に謂へらく是れ以て家を成し名を揚る  
に足れりとして素川の家を逃れたまゝ兩國橋を過く  
時に易者逸見氏なるものあり一信の袖をひきとめて  
曰く子の顔に異相あり必ず大望を抱き居るならむと

て強ちに伴ひて家に誘ひ共に語りて大に喜ひ一女を  
もて之に配し淺草福井町に小なき家を借りて之を住  
ましむ女は即ち妙安尼是れなりき。  
其頃の習として師承を重んずること甚しかりけれ  
ど一信少しも之に拘せず自ら奮つていひけるは是れ  
なほ元信、常信の奴たるを免れず逸見一信は須らく  
逸見一信の書を成すべきなりと。是れより刻苦工夫  
して等琳、四條、土佐、狩野四派の長を探り別に一  
機軸を出し竊かに古名匠に譲らずとなしき。されど  
當時一人のその書を顧る者なし乃ち看板又は行灯  
の書を作りて且つ働き且つ學びたりしが一貫洗ふが  
ごとく頓上座を生ずるにいたりぬ。  
兩國の仕事師に車屋治兵衛なる者あり任俠をもて市  
井の間に重んぜらるたまゝ一信の窮を見て大く之  
を憐み一信及びその妻妙安を家に寓せしめ衣食を給

してその技を勤めしむ。是に於いて一信或ひは實物  
を寫し或ひは名利大家の藏する所を尋ね展覧盡さし  
る所なく技大に進み治兵衛の勤めに依つて牛若辨慶  
の圖を描きて淺草寺觀音堂に挂く。然るに尙ほ之を  
稱する者なかりしかど獨り菊池容齋、佐竹永海の二  
人のみは大に激賞して後必らず大家たらんと語りき  
といふ。

又下總成田山不動寺の囑に依りて本堂の天井に龍、  
天人、壁に釋迦、文珠、普賢の三尊及び十大弟子を  
作り法橋に翫せらる。これよりその名漸く藝林の間  
に知らるゝにいたりしかど貧乏は舊の如く淺草より  
横山町に移り筆硯を安するもの間なく火に遇ひて  
又芝の濱松町に移れり其の流離困頓の状想ふべきな  
り。  
一信少き時より深く心を佛乘に寄せ尋常畫家と流を

同うすることを愧ぢて容易に筆を售らず。慨然とし  
て自ら思へらく題目高からざれば落想自ら卑し刻苦  
筆を磨りて飛禽走獸を親し優媚市俗を寫して能くそ  
の神に入るも究竟みな俗人の玩弄物たるに過ぎず吾  
が方外の想を寓すべきもの唯だ道釋人物あるの  
み。抑も大雄氏の道は甚深微妙不可思議の法門なり  
世尊六年端坐啞然として大笑の後鹿苑の說法より涅  
槃の遺教にいたるまで其の間四十餘年接化無量なれ  
ども吾が心能く之を思ひ吾が筆能く之を書き得べき  
ものは唯だ羅漢なるかな。羅漢は菩薩の下位に在り  
ていまた二乗の境界を脱出せずといへども既に有漏  
の煩惱を離れて塵表に超然たり其の數甚だ多く意匠  
もまた自在なれば我畢生の心力を盡すも尙ほ且つ足  
らざるを恐る。殊に江戸城下いまだ大作五百羅漢の  
全備せるものあるを見ず實に吾が門の一大缺典な



り。富貴功名我において何かあらん一信の一身を  
擲て五百の聖衆に手向け誓つてこの大願を遂げて

も之を人に語らず竊かに淺草の觀音および成田の不  
動に到り誠を致して祈願し一切の善根みなこの一事

世に福せむと。是

一純寫○

れ實に一信が年三

に回越し速かに成  
就せむことを願ひ

十五六の時のこと

たりき。一信その

にして彼の優に國

資を得るの方便に

資の中にも入るゝ

もならむと思ひそ

に足るべき大作を

の妻をして髪をお

成すの發願なりけ

ろして尼たらしめ

り。

むとまでなしきと

一信すでに大願を

いふ。この一事を

發し誓て之を遂げ

見ても一信の願の

むとす然れど家太

如何はかり切なり

だ貧にして資を得るの便りなし又募緣して資を人に

しがを窺ふに餘りあらむか。かくて空しく年月を送

取るもまたさすがに其の本意にあらざるをもて荷く

るうちに適ま三緣山の塔頭源興院火災にかゝりき何

信 一 野 狩



そ圖らむ是れ一信が多年の宿願を成すの緣とはなり

き。

源興院の再建せらるゝや一信他の市中の畫師等と共に  
に備はれて多く畫を佛堂の壁につくりき此の時一信  
の畫く所の十六羅漢の圖いじめでたく際立て見をた  
りき。今佛國巴里の美術館にあるもの即ちこの幅な  
りといふ。院主了登和尚、一信がかばかりの妙腕を  
有ちながら徒らに市井尋常の畫師と相追隨せるを訝  
しみ或る日一信をその室に招きて之を見る一信すな  
はち詳かに語るに宿願の事をもて了登和尚ふ  
かくそが志の懸なるを憐み且つ曰く老耄もまた  
豫めてより一勝事を營みて護法の萬一に擬せむと思  
ふの志あり況いて羅漢は住世護法の師なれば此の  
畫體を作りて之を吾が三緣山中に置かば特り希世の  
珍たるのみにあらず勝緣ひろく見聞する所の道俗に

及び共に多少の覺因を結ばしむることを得む是れ洵  
に曠世の一大善根なり汝須らく他事を願ふこと  
なくして其が志を遂げよ衣食を憂ふることなかれ  
老耄まさに衣盂を儉して汝が資を助けむと一信の  
悦び知るべし。一信こゝにおいて筆を起しぬ是れ實  
に嘉永七年の春なりき。

一信が五百應眞を寫すの大願を發して了登和尚に會  
するにいたるまでの辛苦は如上に説くところのこと  
し。さて漸くにしてその資を得て筆を下さむとする  
に經營慘澹爾はゆる其工心獨苦もの尤も深かりき。  
荷くも羅漢の圖あることを聞けば遠きをも辭はず必  
らず自ら往きて之を尋ねあよそ名山大利の藏幅展  
觀して盡さるものなかりきといふその勢あもふ  
べし。

また平生寫す所の山水動植にいたるまでもまた悉



此が資料となさるはなかりき。一信がこの書を成す爲めには如何ばかり心をつくしたるやを知るべし。是れ近時市井の書家者流が唯だに粉本にのみ依りて古人を形似の上に摸するもの、夢にも知らざる所ならむ。

一信かつて宋明諸名家の手に成れる羅漢を見るに唯だに定坐飛空、龍經乘拂のみならず山光、樹色、殿宇、勝槩、布景千般なりその他諸家の寫す所もまたその相みならず乃ち思へらく是みなちのくその意匠にいつるのみぞ將さに自ら一新圖を出さむとなき。すでにしてたましく清の胡觀瀾が刊行せる所の江陰軍乾明院の石碑五百羅漢名號なるものを見るに及んで心ひそかに羅漢の名號に由りその徳相を考へて行相を畫かむと欲りし而かも苦擣していまだ筆を下すに及ばざりき。

がごとくその説く所に隨て更に筆を下圖に染め初めぬ。

一信すでに筆を起すや交遊を絶ちて敢て闕より外にいつることなく棲居して塵を遠ざけ寒暄を忘れ飲食を損しその妻といへども書室に入ること禁じ宛かも長齋するものごとし。家事鉅細となくすべて之を妻に任せ膏油を焚きて晝に繼き枕々としてつゆ倦むことなし。嘉永七年甲寅の春歳三十九にして筆を起し四十八歳にて病にかかり淹滞歳を閱す然れどその志すこしも挫かれず病革るにいたるまでもなほ毫を握りて置かず生前に卒業せむとせしかど定命これを如何ともすること能はず惜いかな六幅の稿本と四幅の腹稿とを殘して文久の三年九月二十三日つひに長逝したりき。その間畫く所のもの九十幅なりき。その妻妙安門人一純、信友の二人と共に遺稿

この時にあたりて三縁山の學寮に大雲和尚といへる人あり淨土門中の碩學をもて稱せられき。一信すなはち之に相見して質すに名に就て相を圖するの説をもてす。大雲和尚の曰く汝が説もまた謂なきにはあらねどいまだ頭陀行道神通化相を圖するの寛きには若かず。宋明よりこのかたの名匠の畫ける所を見るにその衣衫器物などおほむ多くは漢土當時に有る所のものを寫せり。老翁またかつて金澤の稱名寺に藏する十六羅漢像を拜したりき是は實に唐の禪月大師の筆なりと稱すその衣相多くは梵土の古儀を畫きたるものごとし。今汝もし新圖を出さむと欲りせば宜しく意を梵儀に留めよと。よて一信の爲めに信伽乘法、蘭若抖擻の故事を説示しまた三衣祇支などを出して一々指點しその特色披著の方を擧げて審かに之を教へぬ。一信すなはち闇中に燈摩を得たる

に據りて十幅を補成し遂に能く百幅を卒業することを得たり是れ實に慶應二年のことにして初め一信が筆を起せしよりおほよそ十有四年の長き年月を經たりき。

幅の巾おほよそ三尺長と五尺、筆力遒勁にして渲染また丁寧を極め面貌の端嚴、衣相の變化より樹石、雲樹、鳥獸、鬼物にいたるまで個々生動し意匠の咳博なる伎倆の熟練なる自ら別に一家を成せりき洵に破草鞋子より以後多く見ること能はざるの傑作ならん。此に大雲和尚の物せる圖肥を書いぬきてその概題を示す。

每幅五幅その首の八幅は則ち一信が前に携る所なり。昇堂説法、施衣燒香、執扇吹貝より誠勸感衆等に至るまで皆名に就て相を顯はすものなり。第九幅以下は僧事化相等を摸出するなり。その中第



九第十は浴室剷除なり。十一より二十に至るまでは授戒布薩論議及び剃度弟子降伏外道なり。二十一より四十に至るまでは攝化六道寒熱泥羶に入り勝劣鬼神を恵み傍生の癡闇を哀れみ修羅の戰諍を息め國王長者の供を受け及び天に上り天を下り天子迎送する等なり。四十一より五十に至るまでは十二頭陀關若分衛より露地常坐に至るなり。五十一より以下は遊觀神通にして飛空定坐、逐鬼伏魔、救厄治病、現火酒水の種々神變或ひは禽獸を憐れみ龍供を受くる等つぶさに記述しがたし。七十七および八十は經營伽藍、墨業工を施し諸鬼給役するなり。八十一より以下は七難を救ふの相なり。九十二より下は遊化四洲の相にして前の四は即ち南洲、後の六は則ち東西北の三洲なり。(原漢文)一信が能くかくの如き大作に筆を起したるは了登和尚の資を助けたるに依ることなるが之をしてその功を卒へしたるはまた實に亮迪和尚ありしに依らざるべからず。亮迪和尚は即ち了登和尚の門人なりき。けだしはすめ一信が筆を起しいまだ數年ならざるに了登和尚微恙を示めして寂す亮迪和尚すなはち師の遺囑を奉じて之を助けたりき。この故に一信は終始その資の乏しきを憂ふることなくして業に従ふことを得たりき。この羅漢圖の由来を傳ふるにはまた必ずこの事を述すべからず。

この後妙安尼が一室を三緣山中に構へ羅漢圖を撰裝して供養するや淨土門主福田行誠上人ためにその縁起を物して曰く、諸大羅漢其數甚多し中に就て此五百員は別して釋迦如来宿世結縁の御弟子なり鹿野園の始より法華涅槃の終りに至るまで轉迷の旨開悟の趣を示現し

給へるなりされば迦葉尊者は頭陀第一の御徳を以て七葉巖に於て多聞第一の阿難尊者及一千人の大阿羅漢を率ゐて遺教の三藏を結集し給ひ或は目連は神通第一と稱し舍利弗は智慧第一と傳ふ衆聖各六和敬の徳を備へ三大劫の行を滿す特に佛世尊雙林に臨て遺法七萬年を期して此を護持し入滅すべからじと勅令し給ひしを以て今に在て無數の眷屬と共に人天の界に散在して其懇請に應じて冥顯に現益を施し玉ふよし難陀羅漢の法住記に記しされたり畫工法眼一信族逸見東京の人なり幼にして畫を好み信佛の志あり始め素川の門に入後諸家に入出入す五百羅漢を寫して世人の善種たらしめんと思ふ事久し清貧資縁に乏しきを以て素志を舒る事わたりはす緣山源興院丁登此を聞て喜んで其費用を給す即ち嘉永七年の春(齒三十九)筆を起し

文久三年九月にして功を畢る中間十年潔齋肅然饑食を忘ると云ふ同月廿二日晏然として没す定て宿願を果せる人なるべし其妻剃髮して妙安と號す身緣して羅漢堂を建立し供養懈るなし縁起如是間世の一大徳の筆を假りてそが由来を記すその文簡なりといへども一信およびその畫を千古に傳ふることを得べし。けだし聞く世界の後業社會にその名を轟かしたる獨逸國有數の名匠アルハルド、アールは黃白の念を絶て専ら枯淡を甘まい繪畫三昧をもてそが一生を終りたりきといふ。道般の境界に身を寄せたるにあらずむば争かかその畫を大成することを得むや。千秋に傳ふるに足るべき大作を遺さむと欲りせば必らずや硯田をもて金紫に換へず、董玄宰の謂はゆる萬里千里の間にあつて高尙の想を養ひ我が赤肉團上



の眞人をして常に冷徹々地に遊ばしめざるべからず。わが東山時代の諸名匠を見よ明兆の如き如拙の如きさては周耕、雪村、周文の如きものくみな高く自ら標して豪華を避け山高水長の風格を失はざりしにあらざるや。もし往々に名を釣り酒筆錢を食るがときは決して美術家たるの器にあらざるなり。狩野一信のときはその風格また古名匠に追随するに足らむか。

一信人と爲り津村温柔にして儉素をもて身を奉じ他の嗜好なし唯だ繪事をのみ之れ勤めたりき。一信かつて謂へることあり曰く人の世に處するやその欲りする所を奪ねるにほむねみな名を揚げ家産を興して之を子孫に傳ふるに過ぎず一信のときは唯だ繪の一事によつて成す所めれば則ち足れり人多くは圖なきを憂ふれども我は然らず吾が見早く病して之を

生育するの類なし是れ却て我が爲めに幸の極みなりき筆蹟を世にのこしたる志ある門人を養ひて業を授れば萬戸侯に封せられて桂を炊くの樂にもはるかに優れり何等の遺憾ありてか兒女の泣をなさむやと。そが心を設ること斯のこととしその終に能く一大勝事を成したるはまた宜なりといふべし。

往にしへの名匠能くそが志す所の業を成して名を揚げたるもの賢妻内助の功に依りたるもの太だ少からず。一信の妻妙安尼のときはもまた共に傳ふるに足るべし。始め妙安尼の一信に配するや一信技いまだ達せずその名世に知られざるをもて人の來りて書を乞ふ者なれば朝夕の煙をも上げがたき有さまなりしかど妙安尼つゆばかりもそを厭ふ心なく一信を勵まして業をつとめしめおのれは人の爲めに絲をつむぎあるは

衣など纏ひその得る所を米に替へて辛くも二人の飢を療したる暇には一信の爲す所を見まねて筆とることをもなしき。

はじめ一信のいまだ技達せざるや妙安尼ひそかに淺草の觀音に祈願をこめていはく所天をして業を成し名を揚げしめたまへと一信の眠につくを待ちて夜ごとく金龍山に養し三年ばかりの長き間雪の寒きにも風の吹すさふ夕にもつゆ懈ることなかりきといふ。その所天をなもふ情のいと深きは洵に人の妻たる者の鑑ともなすべし。

このうち一信が幸にも丁聲和尚の助を得て五百羅漢に筆を起すにいたりて妙安尼の喜び餘へむかたなく能く一信の志を奉じて家事鉅細となくみな代て之を營爲し一信をして繪事以外の事にかゝつらばじめずその業を専らにすることを得せしめたりき。一

信の身まかるにおよむで遺弟一純、信友の二人と共に遺稿に着色を加へて百幅を完成し一切の家財をすて、羅漢堂を三縁山中に構へ尼となりて之を守り毎月換列して衆人に拜せしめ朝夕の供養を怠らず。この妻ありてはじめて一信の宿願も成就したるならむ。

五百羅漢の標裝成るや之を三縁山の本堂に掛け行蔵上人に請ふて開眼供養す時たま〜三縁山回祿の災あり妙安尼門人と共に之を猛火の中より救ひいだして林中に置き自ら之を守護す人或ひは火の厄に及ばむことをきづかひて他に避けしめむとす尼かたく謝していはくこの五百羅漢は實にわが所天が一生の心力をつくしたるものなればそが遺跡とも見るべし妾が身むしる火焰の中に捲き去らるゝも誓つて此を去らずとて身をもて之を蔽ひ火殆んどその袖に及ぶも



之を避けずつひに之を全ふすることを得たりきといふ。

妙安尼かつて成田の彫刻師不動金兵衛といへる者に囑して一信の像を刻して之を堂中に安し恰かも生きたる人に仕ふるごとし曉起身口を清め像前に頼つきていはく「旦那さま早うござります」夜にいたりてもまた像前に向ひ「お休みあそばせ」と禮して床につき日ごとに一信が平生嗜みたる食物を調して供へまたをりくは像を相手に所天がいまそかりし時のおもしろきことさてはかなしかりしことなど自ら語り自ら答へながら面前にその人あるが如し知らざる者或ひは尼をもて狂を病むものとなしたりき。

三十年の夏の初めにいたりて妙安尼自らその死期の近きにあるを知りて一信の木主法號（法雲院法眼徳

りき一信の没するに及びて名利をいとひて頼昧しきた人と世事を談せず妙安尼の遺囑をうけその後をつぎて羅漢堂を守り書を子弟に授けて老を樂めりその先師に厚きことまた共に傳ふるに足るべきなり。

### 森 寛 齋

上下三千年その間繪畫を造りたる者その數皆だに億のみならず然はあれど今試みにその生涯中より繪畫の一事を除き去りその人品言行のみを千秋に傳へて赫々の光ある者を儘ふれば蓋し千人に一人あるのみならむ。

昔はリナルド、ダビンチ豪邁の性を具へその才藝多く唯だに繪畫のみに止らず博く幾何、化學、理學、工學に通じ能く運河を開鑿し城閣を計畫し百般の機械を構造するに妙を得たるのみならず又巧に詩を賦

譽一信居士の傍にわが法號（徳法院雲譽妙安大姉）を彫りつけ危坐正念してまた多く他事を語らずかくて六月三十日にいたりて忽ち微疾を示し享年八十一歳をもて眠るがごとく寂し去りぬ。その寂するにのぞみて一純を招きねむるに囑するに羅漢堂を守ることをもてし一純の點頭するを見て笑をふくみて目をつぶりきといふ。

世に賢婦少からず然はあれど妙安尼のごとく終始よく婦道をつくし所天と共に勝事を營みたるにいたりてはその類ひ希有なりといふべし倘し世に近世賢女傳を物する者あらば妙安尼のごときもまた必ずその中に收めらるべき者ならむ。

一信壯より一身を五百羅漢に委ねたるを以て多く門人を養はず唯だ一純、信友の二人あるのみ。一純は七歳より一信の左右に侍しました着色の勢を頌ちた

し音楽を能くしその仕を求るに當りて詩家及び音樂家として招聘せられたるも尙ほ道家彫刻師、土木師として用ゐられんことを要求したりき。又吾が國の柳里恭の如きその身は大藩の貴戚の家に生れ才文武を兼ね旁ら佛乘に通じ醫藥、音律、書畫、篆刻などおよそ百技藝一として精通せざるものなかりきと云ふ。以上二人の如きは縦しや繪畫なくともその内の一能おらば世に立ち名を傳ふるに足るべし此等は固より例外に屬せざるべからず。

また文武の餘事繪畫を作る者あり獨の諸葛亮の如き是れなり南齊圖なくともその大名を留るに損する所なし。晉の王逸少の如き畫なくともそが絶代の風流は千古に足れり。南宋の鄭所南の如き露根閣を描かずと雖も二天を戴かざるの志を見ることを得べし。又我が昔右府さては根來の開山興教大師、南禪



の開山無開國師、永平の開山承陽大師、慧心僧都等の如きに至りてはその畫巧は則ち巧なりと雖も固よりその本色にあらざるをもて繪畫を作らざるもその人にありては歎る所ありとなさず故に此等もまた例外に屬す。

我か此に言ふ所のものは則ち然らず世の繪畫家と稱する者の生涯中より繪畫の一事を除き去りてもその人品の高く而かも言行のめでたく後人の龜鑑として世に傳ふるに足る者を云ふなり尙し之を明治繪畫界の名匠中に求むれば先づ指をわが森寛齋に折らざるべからず。

森寛齋少壯より王室の式微を慨き諸國の志士と周旋して屢々死生の途に出入す其の苦辛を嘗めたるもの尋常にあらざりきそが功にても實に聖天子の恩寵に老耄を養ふて名は汗青の上を照すに足れり。况いて

の繪畫をなす者概ね之に倣ひたりきその極途に他に脚實を求めず規模漸く小にして復た古意を見ることが能はざるに至りぬ。然れば當時江戸の繪畫は春信、歌麿、榮之などの浮世派は姑らく措いて言はずその他は概ねみな死物と成り終りたりしかど京畿にては新進作家漸く起り宛かもふり積める雪の下より新草の萌えいつるが如きものありき乃ち彭城百川が南宗を唱へ初めしより祇園南海、望月玉蟾、池大雅の一派いで、盛に沈倪の筆意を描きたるあれば蛇足の風を慕ひ奇峭豪放をもて稱せられたる蕭白の如きあり或るは温秀をもて勝れたる幽汀あれば南蘋の風より入りて別に一生面を開きたる岸駒ありき。圓山應舉實にこの間に崛起す應舉初めは石田幽汀の門に學び後にひろく諸家に入りました多く古蹟を慕し最も力を寫生に盡し花卉翎毛等つぶさにその状を究め設色

其の繪畫は圓山の正脈を傳へ又益す之を大成して後進を陶鑄し南畫全盛の時に當りて飢寒を忍びて之を維持しその繪畫界に功あるや最と大にして狩野芳崖と東西相對するものをや是れ吾輩が忝々として自ら已むこと能はずつばらに此に寛齋が八十餘年間の功業及び言行を物して世に告げんと欲する所以なり。

嘗て三百年來の繪畫史を綜ぬるに狩野守信が前古希有の天才を以て和漢を涉獵し家法を變じ別に機軸を出し一種輕妙の風を成し終に徳川氏の用ゆる所となりて畫權を握て天下に倡ふる是に於てか水墨を用ひて氣韻卓絶なる自適齋尙情さては駿河臺の祖たる洞雲、古畫鑑鑑の名ありし中橋の安信、文藻を好みたる永納あるは守景、養朴、探山の如き前後みなその一門の下より出で高に據りて唱導したるをもて天下

清潤意匠もまた清新の妙を得て高く法燈を掲げその門下より美人翎毛花卉を能くし設色に巧なる駒井源琦の如き新意匠をもて稱ある長澤蘆雪、秀潤をもて勝れたる森徹山、精密をもて勝れたる奥文鳴、逸氣をもて勝れたる西村楠亭、輕淡をもて勝れたる渡邊南岳、邦俗雜畫をもて名を得たる山口素絢などの名手輩出するに及びて遂に京攝以西の天下を風靡するにいたりぬ。圓山應舉はかゝる多くの英才を擁して關西の繪畫界に虎踞したりしが寛政七年七月十五日に享年六十一をもて没し同じく二年にして高足源琦没しました二年にして高足蘆雪没しこの後二十年ならずして素絢、楠亭および應瑞、應震など相つぎてこの世を下り唯だ徹山が大阪に在りて門戸を張るのみにして圓山派の法灯まさしく倣ならむとすこの時に當りて天忽ち替



人を下してその柄を續かしめたりき替人とは誰ぞわが森寛齋實にその人なり。

圓山應舉没してより後十餘年京攝の間には森狙仙が獨擅の猿を以て岡本豊彦は山水を以て松村景文は花鳥を以て佐伯岸駒は虎を以てものゝ繪畫界に虎踞したりきこの時に當てわが森寛齋呱々の聲を長門國萩の雁島に擧げぬ實に文化十一年甲戌の正月一日にして圓山應舉が没してよりこのかた二十年を經りたる時なりけり。

寛齋諱を公肅といひ幼名を幸吉と稱す別にまたその書室に遍して書三昧齋といふ。父を石田傳内道政といひ累世毛利侯に仕ふ母は前田氏にして寛齋は即ち道政の第三子なり。

夙世の縁ともいふべきにや寛齋は髻髮垂るゝ幼なき時よりも繪畫を悦びて筆あれば物を描き紙あれば繪

二人はつねに相會して共に草木鳥獸の形などを寫してその優劣を競ひこよなき樂みとはなしたり。

この時萩の濱崎吹上なる瀧福寺の寺侍に太田田龍といへるものあり繪畫を巧にするをもて名あり寛齋乃ちある日合章に逢ひて曰くこの地にて繪畫の師とすべきは太田田龍より外にはなかるべし願はくば子と共にその門に入りて學ばむかと否りけるに合章は答ふるに昨すでに太田氏に束脩を執りたることを以てす寛齋驚きつゝ果して然らば明日にも我を太田氏に伴ひて子弟の約を結ばしめてよ我が生日は子よりも數日早くして兄たれど子先づ太田氏の門に入りたれば繪畫にあらは我は弟たり然れば今日よりは子を兄と呼ぶべしとて互に契りつも最と喜び直に馳かへりて前田氏に請ふにそが志願をもてす前田氏その言を聞きもあへず太く之を賦めて許さず寛齋乃ち悞

引してをりくは寝ることをも物食ふことをも忘れたりき母前田氏を深くうたてきことに思ひしみて賦めて言ひけるは汝奇くも士人の子と生れながらも刀をぬく術をも學はず弓をひく技をもえまねずして家にも身にもあるまじきかゝる淺ましむの戯をなすはわが殿に對しては不忠なり親に對しては不孝ならずやとて殿かに折檻を興へたりしかど天性の嗜好は中く留るべざるもあらず後に至りて京都の繪畫界を脊負ふて立つほどの業は實にこの時よりぞ付り知られぬ。

同藩士有地氏の子に合章(また繪畫をもて業とす維新後萩の平安古村に於て没す)といへる者ありその家もまた石田氏と近く年もまた同齡なりければ最と親しく交り一暇一遊曾て之と共にせざるはなかりきこの合章もまた幼にして大に繪畫を好みたりしかば

々として樂まず爲す業も手につかずして空しく日を送りぬ。

時に寛齋の兄才市郎なる者が嗣として養はるゝ杉山氏の家に隠士木村某といへるが寓せり某は人物を鑑するを以て稱ありけるがつねに寛齋が幼年ながらも器宇のよのつねならざるを見て之を愛すること恰かもわが子の如し偶々寛齋が繪畫を學ばむと請ふも母の爲めに許されざるを聞き直に石田氏に來りて前田氏に逢ふて語りけるは畫師とても決して刀自がのたまふがごとき賤しき業にはあらずさればこそ古への名將あるは高僧も繪畫を作りたる者最と多かり弓矢の道のみが主君に仕ふるものとは限らず畫にても主君の役に立つすべのなきものは世の戯にも嗜きこそ物の上手なれと言へりき願ふは狂びてその意に任せたまへとて強がちたすめて已まず前田氏も



げにもと悟りけむ遂に田龍の門に入らしみたりきこの時寛齋年甫めて十二なりしが好める道とてつゆ倦む状はなくして日夜學びたりしかば數年ならずしてをさく大人をも推倒するが如きの勢あり田龍の許を得て號を桃溪とつけたりき。

寛齋十三歳の時なるが養老孝子掬水の圖を作りたるにその意匠筆勢ともに最とめでたく老鑿をして舌を捲かしめたりき。この圖は去る明治二十九年十月三日京都建仁寺本山に於て擧げたる寛齋が三回忌薦事會に掲げたるか見る者みな驚きて鉅匠となるべきほどの人はさすがに幼年より凡ならざるものかなと語りぬ。

文政十二年藩主安三郎公（忠正公の前代なり）が新婚の式を擧るの故をもて幕府の招きに應じて江戸に下らるるに當りて寛齋時に年十六をもて安三郎公に

學び後また洋書を學びて稍やその風を變じて別に一格を成し人物を畫くに長じ兼ねて花卉禽獸を工にしよう墨秀潤なるをもて當時畫林の推重する所となりてその名大に大阪に畫けり寛齋こゝに於て贊をその門に執りぬ。然るにその後幾日を経ずして戸田氏たまた病に罹りて長州に歸ることとなりしかば寛齋乃ち已むことを得ずまた共に從ふて大阪を去り僅かに徹山と子弟の約を結びたるのみにて未だ筆を取つて教を乞ふに至らざりき。

寛齋萩に歸りていまだ幾ばくもなく父道政が藩侯の命をもて遠近方より御撫育に轉じ三田尻に行くこととなりて寛齋また從ふて移りぬ。

三田尻の近き地に俠客某なる者ありまさしに事を以て嚴島に赴くに會す寛齋よつて父母に請ふて某と共に嚴島に遊び居ることとよそ數句某の勧めに依てその

供して江戸に來りぬ。寛齋乃ち遍ねく當時の都下に名ある者の作る所の畫などを見て頗る益を得たりかくて公事も終りたりしかばその翌年即ち天保元年歸國の途に上りきこの行ゆく東海、山陽さては京都の諸名勝を探りておもしろき山の靈水の流などを寫しけるが大に繪畫上の益を得たりきとぞ。

天保二年は寛齋年十七なり尙ほ日に田龍のもとに通ひて毫も怠ることなかりけり。

天保二年藩の重職戸田九郎右衛門が檢使となりて大阪に上るや寛齋乃ち自ら請ふてその從者となり共に大阪に來りぬこの時に當りて圓山門下の十哲なる源琦、蘆雪、素絢をはじめ補亭、孝敬、應受および應舉の子應瑞、應震の如きもみなすでに淵識し唯だ森徹山のみ大阪にありて法灯を掲げて後進を教授せり徹山名を守真といひ字を子玄と稱す早く應舉の門に

名にて戲場などに出入して日を送りけるが或る日某に語りて云ふ我は既にこの地も看飽きたれば今より伊豫に遊びむことを願ふ子若し彼の地に知己あらば能く我の爲めに一書を介せよ某乃ち一書を與ふかくて寛齋萩を分ち海を航して伊豫に達しその紹介せられたる家を尋ねて刺を通ずるに何ぞ料らむその家は實に宿場の娼樓なりき寛齋自ら心に謂へらく千金の子は巖壁の下に立たずこの家は決して一日も吾が脚を留むべきの處にあらざるとて直に謝して去りそが近隣なる某寺に食客となりて住みこみ寺務をとるの暇をぬすみてはその邊の山水の眺をかしき地を訪ねては之を寫し知らず二年あまりの月日を過しけるがこの地もすでに看つくしたれば今は要なしとて急に舟に搭じて萩にかへりき。扱て此より先き道政夫妻は寛齋が數日ならずして歸ることならむと思ひ



けるに其の後待てども、音沙汰もなければ今は早  
や現世の人にはあらざるべし責めては追福の爲めに  
なれかしとてその家を出でし日を忌日と定め供養修  
善をのみ旨としやがてそが三回忌の薦事を營まむと  
道政夫妻より一語りあひけるをりしも突如として  
寛齋歸り來りぬ道政夫妻が悦は如何ばかりなりけ  
む實に嵐にさそはれし挿頭の花の二た次手にもどり  
たる思をなしたるなるべし。

寛齋の郷にあるや一日山口湯田に至るにたま／＼相  
撰の興行あるに會す年わかき力士ども相集まり相撲  
の朝番古をなし家屋の柱に向つてその額を逆打し家  
中爲めに響を生ず時には其額を破り鮮血淋漓として  
迸り出るものあり寛齋つら／＼之を打見て大に感激  
し自ら心に謂ひけるは彼の力士もまた寧居逸體を願  
はざる者ならむや而かも自らその身を苦めて辭せざ

もまた能くそが志の毒ふべきにあらざるを悟り寛  
齋の言ふがまゝに藩廳に願ひて家を出しやりぬこは  
即ち天保六年のことにして實に寛齋の年二十二の春  
なりき。

寛齋は多年の願も許されたりしかばその悦びは餘へ  
む方なく急に行幸を修めて大阪に上り會て師弟の約  
をなしたる徹山を訪ひその志を告げて留學を請ふ  
徹山乃ち寛齋の面貌を熟視して曰く汝士人の家に生  
れながら何の因果をもて乞丐の徒とならむと欲する  
やと寛齋訝みてその故を問ふ徹山の曰く今苟くも書  
家たらむと思はし須らく露ほども名利を食ひ好き衣  
をかけ旨きものを食はんと欲するが如きの邪念ある  
べからず汝知もや世人が書家を罵るの語に繪家を  
食といふるありその語も書家を冷罵するの語たり  
といへども深く吾が憤が衣帯の中に銘すべきなり

るゆゑんは必竟その筋骨を練りて以てその技を進め  
むと欲りするに外ならず嗚呼爲すある者はみなかく  
の如けむのみ然らば人はそが志す所の業のために  
はあの一彼が如きの痛苦もまたゆめ厭はざるの覺  
期なくてはかなはざる所なりとて感嘆して立つもの  
や、之を久うして去りき是れを實に寛齋が繪書を學  
ぶためには如何なる辛苦も避けずと心を固めたるの  
時にてありけるなり。

さきに寛齋が伊豫より歸り家に在りて獨り古名匠の  
畫を見て學ぶことちよそ五年ばかりなりしが正師の  
耳提面命をもうけずわが意の向ふまゝに筆を走らす  
のみにて尙し誤て邪路に踏こみ遂に再び之を回復す  
るの術なきに至りて後に之を悔ゆるも詮なかるべし  
今にちいて早く好き師資を求むるに如かずとて切に  
道政夫妻に請ふに暇を賜はむことをもてす道政夫妻

故に書家たらむと思はしその身のつねに窮途にありて  
或はず愛へざるの決定心あるをもて第一義とす然る  
に今の世の謂はゆる學畫の子弟は即ち然らず是れ名  
手の輩出せざる所以なり今汝の身を見るに軀幹太だ  
たくましく辛苦を嘗るに堪ゆるもの、如し而かも能  
く繪家を食の心を保ちて尙し不幸にして時の不祥に  
あひ世人の賞する所とならず一枚の售ることなき  
も自ら心に安じて尙ほ筆を吮ひ盟て畫三昧をもて世  
を終るの勇あるやいなやとて太だその中途にして挫  
折せむことを危ぶめるもの、如し。

寛齋こゝにおいて覺えず掌を拍て云ひけるは是あ  
るかな先生の言洵に我が思ふ所と節を合せたるもの  
、如しとて乃ちかつて山口湯田にゐいて力士の朝稽  
古を見て感じたる時のこといをも語りいで切にその  
門下に留らむことを請ふ徹山さらばとて頷きつ寛齋



といへる號はこの時徹山より受けたるものなりき。寛齋これより徹山の家に留ることとなりしが徹山の家もと太だ廣からざれば家の裏なる物置小屋に身を置くこととなりぬ。この小屋といへるはおよそ二坪ほどの最で見苦き建物にて一時大工の仕事部屋に充てたる後なるを以て錫屑など土間に堆くその汚穢なること實に言ふべからず然れど寛齋はつゆ之を厭ふことなく古びたる礎を土間の隅に敷き唯だ土風爐と一箇の土鍋のみを備へ自ら炊きて僅かに朝夕の飢を凌ぎ朝は日なほ上らず鳥雀の聲を聞かざる頃より起き徹山の家に到りて席を掃ひ庭を清め或ひは徹山が家内の手傳などをつとめ晝の中は絶えてものれが用をなすの暇なし夜は亥の刻を過ぎ徹山が枕に就くを見とめて物置小屋に退き始めて身の自由を得て筆を取りきこの故に夜は決して衾にかつき臥す時なく

横かに壁に憑つて知らず／＼眠るのみなりきこの間の辛酸は實に言語の外にいでありきその不撓の精神は後の學畫の徒の氷鑿となすに足れりといふべし。されば徹山もつねに大に寛齋が辛苦を嘗めて憂へず厭はざるの心を稱したるがその畫もまた大に進みて同門中にありて一頭地を抜ずるものあるをもて之を遇すること甚だ厚く恰かもそが子を見るが如し一日徹山、寛齋を閑室に引て囑して曰くわが門俊髦頗る多しといへども能く我が衣鉢を傳ふべきものは特り汝あるのみ汝にして失墜なからしめば圓山の門風大に揚らむ汝能く勤めて我をして人を見るの明なしと言はしむことなをれ抑も我が同門の士も今はみな世を下り京にありて先師應舉の道を揚るものなきをもて一の畫盤を京に開きて後進を陶鑄せむと欲すといへども今年老い力衰へて之を爲すに足らず汝

須らく今より森氏を名乗りて旅職を京に揚げよとそ  
の言最と懇なり寛齋はその手胸いまだこの囑に當るに足らずとて固く辭すれども許されず此に於いて改めて森寛齋と稱し筆硯を載せて京に上りぬ是は寛齋が徹山に従學せしより二年ばかり後のことにして實にそが二十五の時なりけり。

寛齋の京に上るや當時年少く氣鋭にして眼中に人なくその畫をもて世に傳らむことまた容易の業なりと思ひたりしがこの時に當りて松村景文、岡本豊彦などの老大家は世にありて藝林の爲めに推重されま九南宗を以ては小田海庵、貫名松翁、浦上春琴の如き名匠のありし時なるを以て未だその名も知れざる寛齋の畫を需るものとはなく潤筆錢を得るに由なければ一貧洗ふが如く飯上座を生ずることもしば／＼なりきと云ふ當時の辛酸想ふべきなり。

佛光寺通堀川に田中藏之丞なる者あり之は徹山の親戚なり寛齋は初めその技の傳れざるより自ら一家を支ふこと能はず已むことを得ず一時此に假寓することなしぬ。この田中氏もまた最と貧しくして土蔵はあれどそが中は空虚にして一物の存するものなく何時もその扉開放なりしかば寛齋あまりのをかしさに堪えずやありけむ一日藏之丞に向て我ちか頃になき名歌を咏み侍りきと云ふに藏之丞も和歌に心を寄せたる者なるからにそは妙なり如何なる歌にやとく似めしてよと云ふ寛齋乃ち「見わたせば質ちく草もなかりけり藏の戸前の秋の夕暮」と言ひをはるやいなや藏之丞忽ちその面を赤めこはなめけなりとて大に怒りたりき。是れもどより一場の笑話に屬すといへどもその連遺悲慘の間に處りもてそが心づねに照春麗日にあへるが如くなりしさまも見えたりか



る不虞の性なればこそ能く繪事の成道を遂げたるなるべし。

寛齋が京に上りてよりもなほ時々その作る所の書を徹山に寄せて正を乞ひたりしが僅かに二年餘にして徹山は天保十二年をもて遂に身まかりぬ寛齋恰かも考妣を喪ひたるが如く悲歎やる方なく最とねもごろに追福を營みたりき。

さて寛齋は此まで徹山の正をうけしも今は現世の人にあらねばまた教を仰ぐべきにもあらず他の老大家の門に入らむと思へども當時圓山派の者宿みな凋謝して一人をのこさず今はた誰と共に語りて益を求むかと思ひまどひぬ。

時に寛齋自ら以惟へらく日本の諸派みな一長一短あり氣韻をもて勝れたるものあり寫生をもて勝れたるものありて未だ容易にその優劣を論ずべきにあらず

吾が圓山の一派はわけて寫生を尙びて關西の畫風を一變したりき然かばあれどその寫生を専らとするの極は遂に俗に流れ易しこはまた免がること能はざるの所なりと雖も之を救はざるべからず今尙し圓山派の寫生に南宗の氣韻を得たりむにはこの病なからむとて此れより輞川さては芥舟に至るまでの歴代南宗の畫論を讀みまたその派の名匠に質して大に工夫する所ありき。

野村文學の説く所によれば寛齋は徹山の歿後紀州に遊びて野呂介石の門に禮して南宗を學びたりきといふ説ありといへり然れどその説に疑ひなきこと能はず抑も介石は名を隆年といひ字を松齡と稱し別にまた十友、混齋などの號あり早く池大雅の門に學び後また伊半九の法を學びて山水を能し後世門下の長町竹石と併せ稱せられて南海の二石といひき左れど

竹石は文化の三年に享年五十をもて歿し介石は文政の十一年に八十二歳をもて歿し文政十一年は寛齋の年十五の時にしていまだ菽を去らざれば介石に學びたりとは信じがたし。備中倉敷の産にて三宅西浦

といへる人あり曾て六法を紀州の野呂介石に受けその山水に學りては出畫の譽あり然るに西浦家實もど稱にかして書を曾らざりしが爲め世人また西浦の名を知らざる者多し西浦老いて京にいて木屋町に住す寛齋が介石を慕ふの餘り之を訪ひ共に語りて大に喜び往來晝日なく遂に岩石の皴、山峰の脈絡などの揮毫を請ひ之を長卷となして常に座右に置き大に得る所ありきといふ思ふにこの事より誤り傳へて介石の門に遊びたりとの説起りしならむか。

寛齋が何人に従ひたるにもせよとにかく南宗を窺ひたるは疑ふべからざる事實なるが如し。さればこそ

寛齋は圓山の堂に入りたるにも拘らず脚ばかりも俗氣の厭ふべきものあるを見ずこはもとよりそが身分の高きにも依るべけれどもその南宗を學びたる功もまた大に興りて力ありたるなるべし。

寛齋また思ひけるは萬里の路を行きて胸底に許多の活山水を貯ふるにあらざれば決して畫を成すべからざるのみならずそが筆端に煙霞を帯ぶることを得難しとて遂にその家をたゞみ僅かばかりの路費を携へ汗漫遊にぞて京をいでぬ。

寛齋これより通ねく天下の名山大川を歴遊してその氣を養ひちもしろき山のたゞすまひ水の流などを寫したりしがその益をうけたるもの最と大なりしなるべし。

當時は寛齋の名もいまだ著はれざればその妙腕を知る者なかりしかば潤筆とても唯だ僅ばかりの草鞋錢



を得るのみにて、漢底はつねに冷かなりきこの漫遊中  
いつの頃にやありけむ携ふる所僅かに銀一分を遺す  
のみなるが客中知己もなければ策窮して富儀を購ふ  
當らず益す困窮したりきといふは寛齋が老後つね  
に人に語る所なりき。

客中またある時好事家あり袖書帖と稱する小帖を出  
して揮灑を請ふ蓋し輕蔑の意に出るなり寛齋心竊か  
に笑て細密なる業平東下の圖を描くに精妙殆ど比  
倫なし請ふ者始めてその妙手に驚きたりきとぞ。又  
書を屏風に請ふ者ありその人また寛齋の巧拙を疑ふ  
寛齋乃ち筆を染めて滿面に大象を描けり之を細視す  
れば帝舜が歷山に耕すの圖なり快筆自在觀る者大に  
敬服すと云ふ。

寛齋また四國に遊び阿波の櫻間池に到る池畔に西行  
法師咏歌の碑あり相傳ふこの碑昔時は海濱にありし

貯へ得て京に歸り來りまさるに先師徹山滅度に臨んで  
附屬する所の衣鉢を捧持し鼻祖老漢の道を擧げむと  
なしたりき然れど天は寛齋をしてそが奮勵の中に潜  
み畫三昧をもて騰々として日を送るを許さしりけ  
り。

寛齋その忠厚天性に出で平生ふかく名節をもて自ら  
激勵し善を好むこと宛かも渴するが如しわきて夙に  
心を玉堂に寄せたるか稜威もいたく衰へ果てし紅さ  
す日もいと暗くおるかひもなく空しく手を拱ねて  
宮居の奥にのみ禁めさせ玉ふを見て悲憤の涙に袂を  
しぼり同志の士と語ひてよりそが策などを講し  
ぬ。當時寛齋は堀川の佛光寺通に住むたるが常に國  
事に奔走するも名を繪事に托するが故に幕吏の嫌疑  
を招くことうすきをもて同志の士は多く寛齋の家を  
密藏處となしたりき。

ものを此に携き來りたるなりと云ふ何時の頃の藩主  
にや尋常の手段にては動かしがたし大釘抜にて之を  
挾まば容易に動かむとて長さ三間餘もあるべき釘抜  
を鑄立て多くの人夫を役じて之を挟み上げむと試み  
しが釘抜の重き却て碑石に超えたるが爲めに功を爲  
さず全く無用の長物と成れりきと云ふ寛齋これらの  
故事などを思ひおはせて「櫻間の池の邊に來て見れ  
ば蛙の面に水莖の跡」と一首の狂歌を咏みきこは今  
もこの地の人の傳稱する所たり。

寛齋平生決して人に向つておのれが經歷を語るこ  
なかりしがば今つばらにその游踪を知ること能はず  
と雖も中國および四國などは尤も多くの日を過した  
るものゝ如しそはこれらの地にその作る所の畫の多  
く存するを見ても知るべきなり。

さて寛齋は名山大川を涉りて胸底に許多の活畫圖を

寛齋が尤もわりなく心をうち明けて語らひたる志士  
は甚だ多かるが中にも福岡の平野國臣、聖護院宮家  
臣河瀬太宰、彦根の谷鐵臣、備前の藤本鐵石の如き  
或るは小室信夫の如ききた長藩にては廣澤兵助今の  
山縣侯爵および品川子爵などは深く往來したる所な  
りき。品川子曰く當時の宮家の臣、公卿の諸大夫に  
して苟くも勤王の事に従ひたる者は概ねみな寛齋と  
周旋したりと左れば彼の當時勤王黨の領袖たりし久  
我家の諸大夫春日讃岐守あるは有栖川宮の臣飯田忠  
彦、三條家の諸大夫小林良典の如きみな結納する所  
ありたるなるべし。

尊攘論の尤も熾盛を極めたる文久二年のことなるが  
山縣、品川の諸氏の思ひつきにて尊攘の手初めに伯  
理の肖像を的として射撃を試みむと欲し寛齋に囑す  
るに伯理の肖像二葉を描くことをもてす寛齋自らも



又なくもしるき事に思ひ直に肯なひたりしかど未だ洋人を實見せず又その姿繪をも見るに由なかりければ寺町松原の錦繪店にて和蘭人が祇園二軒茶屋にて豆腐切を見るの圖を求の之を手本として長さ六尺の洋人二葉を描きぬ(或ひは云ふ舶來皿器の畫に依りて描きたりと未だいづれか異なるを知らず)山縣氏は之を三條蹴場長州屋敷に掛けて射撃し一時の悶を遣りき。時たま一橋侯この側を過ぎ銃聲を聞き大に驚き戦々として通過するの状最とをかしく藩士ら腹を抱へて笑ひどよめきたりき。遺般の事もどより一時の見處に類すど雖もまた頗る當時の人心を鼓舞したるの功なきにあらざり。この畫一は品川子の家に藏し一は三條大橋の旅舎豊後屋に藏し後には尊攘堂に寄附したるが共に銃痕を存せりまた當時の事を想見するに足べし。

文久年中に至りて寛齋は居を朝霧陣坂町の路次に移し番をもて兼と成すと雖もその名未だ能く世に知られず加ふるに當時騒亂の際なりしかば揮毫を需る者最と希れなり。寛齋性太た音律を嗜みかつて笛を烏丸佛小路通に住める樂師神田某に學び頗るその妙を究めたりしが吹笛の温習に托して諸國の志士を會して國事を議す故に幕府の偵吏も此にかゝる士どもの絶えず集へるとは夢にも知らざりきといふ。文久三年八月毛利家は堺町御門警衛を解かれ長藩士の入京を禁ぜられたり此れより幕吏は多くの偵吏を市中に放つて嚴かに長人を搜索しその士たるを商工たるを論ぜず長防の者なりといへば直に縛して之を獄に投じその危きこと喻へむ方なく父子途に相逢ふも唯だ目もて睹るがごときの有さまなりき。時に

長州に代りて御所を警衛せる會津藩士の亂暴猖獗至らざるなく市人も大にそを病み俗語を作りてうたへり曰く。

わいの(會津)いなして好いか(加賀)もらふて銚子(長州)杯して見たい

此に於いて會津の長人を惡むこといよ／＼甚だしく派羅剔抉その手段を盡さずといふことなし巧に偵吏の目を避けたる寛齋の居も志士の集會所なるを知れて來つて寛齋の家を襲ひき寛齋は唯だ命のみを拾ひ物にして逃れいで清水産寧阪なる階樓に投じたりき。此に於いて長藩士四五人一日密かに某處に會して議すらく今の長州はまた昔日の長州にあらざり空しく朝敵の名をうけて整伏するを以て交通杜絶して京阪の状態を明にせず藩屬がその機を過つこと曾だに三四に止まらず今日の急務は我儕の中の一人急げ

長州に歸り具さに京都の事情を我が老公に陳するにありと兼みな然なりとして遂に寛齋を擧げてこの任に當らしめたりきこの行は當時に在りては實に白刃の上をわたるよりも危きの業なりしなり。

寛齋この囑をうけて自ら思へらく尋常の服裝にては偵吏の目ののがれがたしとて身には簀笠を着け後手は一升徳利を提げ宛かも農夫の姿に模して京を落ちぬ是は實に元治元年の七月二十三日なりきこの日偵吏また寛齋の産寧阪に潜めるを悟りて來り襲ひたり倘しその市を落ること二時ほど遅れたらむには或ひは陽世の人にはあらざりしなりといふ。左れば寛齋は後年に至りてこの日をもて共に艱苦を嘗めたる人々を招きあつめて記念の宴を開きぬ。

寛齋やう／＼大阪にのがれつきて先づ岡村熊七を訪ふ熊七乃ち急に折衷して同志を招集しけるが人の耳



目を怯るゝ爲めに共に小舟に投じて海中に漕出し何  
くれとなく密議をこらしぬ。かくて寛齋は熊七など  
に別れ便船にて讃岐に向ふこの地には知己も多けれ  
ば長州に歸るには最と便り好きが爲めなりけりこの  
時に當て寛齋は名を變じて晚山といひその身は金比  
羅詣の姿を装ひたりき。

寛齋すでに讃岐に着したるが金比羅は諸國の旅人も  
多く集まれば世の動靜を窺ふとを得べしとて暫らく  
此に足をとどむ。一日たゞく金比羅の社に詣ふで  
應舉の描きたる虎の圖の覆立を見るには應舉が傑  
作中の傑作なるが大に剝落せり寛齋之をすてかくに  
忍びず腕部ともに謀りて補筆したりき然るにその補  
筆は毫もその筆法を損することなしとて世の賞賛す  
る所となりぬ。

また此にももしろき話は銅馬の事なりきそは金比羅

燭下より生ずるを知らず。

明れば寛齋まさに三田尻に向て發せむとす南波氏曰  
く兄一人にて行くは最と氣遣はし此に三州の産にて  
久兵衛といへる者あり彼また正職の士なれば之を従  
へて行くべし且つまた見うる所兄は大小を帯せざ  
るにあらざやとておのれが佩く所の刀を脱して之を  
贈る寛齋乃ちその志を拜し久兵衛を拉して宮島を  
いでぬ。

寛齋と久兵衛は宮島をいでより二日を経て三田尻  
の警護町に達す時たゞく兵卒數十人の操練するの  
り寛齋は何氣もなく此側を横ぎりて行く久兵衛後る  
こと十間ばかりなりしが急に追ひつき密かに寛齋  
の袂を引きて云ふ今彼の兵士どもが彼處を過る者は  
怪しき者なり僻者ならめ撃つべしと口々に  
叫べるを聞き侍へりき願ふは戒め玉とあるに寛齋

の祠前に奉納の銅馬ありその姿勢宛かも應舉の筆法  
に似て最とめでたきものなるが參詣入らばみなこの  
銅馬に跨がるをもて例となす寛齋はその馬背磨擦し  
て銅色を失ふのみならず神馬の威嚴を潰すを恐れま  
た祠部らに謀りて石柵を繞らして人の之を潰し弄  
ぶを許さず然るに端りなくもこの神馬夜間に奔走す  
るが爲めに斯くは石柵をもて守らるなりとの説を傳  
へしより見る者群集し賽錢を投ずる者太だ多く祠部  
らは思はぬ所得を納めたりきといふ。

やがて蘇州へ航する商船あり寛齋は之に搭じて讃岐  
を發し海上 恙なく宮島につきぬ時恰かも好し清水  
清太郎、南波某の二人藩廳の用を帯びて此地に在り  
二人大に歡びて寛齋を清水氏の寓居に迎へ入れ先づ  
その無事を祝して一別以來の事さては京阪の事情な  
どをかたみに問ひつ語りつ酒を酌みかはして晨氣の

そは怪しからぬ事かな我往きて辨せむとて後へもど  
りて操練處に入り語て曰く我らは決して子らが爲め  
に怪しまるべき者にあらざ最と急ぐべき御國の御用  
ありてこの地の代官大津氏に行く者ぞ子等尙ほ胡亂  
と思はれ我らを圍みて大津氏の家まで尾して來るも  
また妨げずと抑も二人がこの時の服裝は垢つきて所  
々破れたる單衣に角帯を結び羽織を着けずして大刀  
を横へたれば商賈ども見えずまた士ども見えず兵卒  
どもの怪しみたるもまた理りなきにあらざ斯くて二  
人は兵卒らに守られて大津氏の旅館に抵り刺を通ず  
大津氏隱り出で曰く森先生かゝる世の中を能くこ  
そ歸り玉ひしとて手をとりて之を奥に誘ひ恰かも狂  
するものゝ如し兵卒等は寛齋の何人なるを知らねば  
かゝる見苦き様の人か代官に好遇せらるゝはいと訝  
かしなど咄やきつゝまかりぬ。



その夜は二人とも大津氏の心ある響應に逢ひ翌日三田尻を出で、山口に入りぬ時に老公安三郎君山口城に在り乃ち直に登城し親しく之に閑室に謁することを得てつばらに京都御所の事情、幕府の機密さては諸藩の動靜を説きたりき。堺町御門の變ありしより以來上國の事情に杜絶したるの時に忽ち寛齋が奮し歸りたる消息は實に霧海に南鍼を得たるにも勝りたるものありしなり。

謁見も終りて寛齋は城を下りしに途上會ふ舊知なる秋山義兵衛に邂逅す互ひに一別以來の事ども語りあひてその恙なきを喜びつ。扱て秋山氏語りけるは兄が萩をいでより還らざること此に二十餘年の久きを經たるが兄の慈母も今は年八十にも迫り最とほげしく老いたり兄が末の子なるが上に遠國に在るの故をもてつねに寝るゝの暇なく兄のことをのみ言

ひつけ居たまへり今歸りたるこそ幸なれ遠くもあらぬ萩に一たび歸りてそが倚門閭の情を慰めよと其の言最と懇なり。寛齋も情にふかき性として義兵衛の説く所を聞きて五内ために裂るが如く血涙の双袖をしぼるを覺えざるなり良久して狂然として曰く大義親を滅するは古聖人の教なり君の爲め國の爲めに家をすて親を忘るゝは志士の常なり今や皇國は内憂外患ともく迫り眞に累卵の如し此の時に當て公事の暇を偷みて私事を至すは大丈夫兄が身をもて君國に許す者の爲す所にあらず平生聖賢の書を讀みて學ぶ所果して何事ぞ我が母が日夕門閭に倚りて兒を待ち玉ふの情たる實に忍びざる所なりといへども之を國家の大事に思ふべきにはあらず子請ふらくは能く我が意を母に傳へてよとて涙を拭ひもめず袂を別ちて直に山口を去て備前に向ひつ。

寛齋が山口を去る時はすでに霧中甚だ冷かなりしかばまた行くゝ晚山の名をもて書を傳て旅泊の料に易へ或ひは同志の國事に奔走する者の資に供へその困頓實に言簡の外に出でたり然るに幸にもその書を需る者殊に多かりければ終始その乏しからざるを得たりきとぞ寛齋老後時にこの事を語りいで、眞に天祐ありしものゝ如くなりきといひぬ。

かくて寛齋は備中國下津井に抵りき時に一橋侯の混華に下るの報至ると頗りなり。一日備前の家老下役を勤むる齊藤某なる者寛齋の寓を訪ふて告げ入るは頃日道路の傳ふる所に依れば毛利侯は遠からず幕府の命に従ひ使者を混華に送るといへりきこの使者にして混華に行かむには到底斬首を免るゝこと能はざるべし倘しこの難を脱がれしめむとせば子急に山口に歸りて使者を送るの職を止めしむるより外に策なか

るべしとて切にその時途に就くを勧めき。然るに寛齋はこの説をもて野人の傳ふる所なりと聞き流して冷然として之を意に介せず。此に於て齊藤某自ら急に三田尻に行き數日を經て歸り來り告るに使者の上阪するは全く事實にして山縣備後すでに命を受けたれば近日三田尻を發するよしをもてす。寛齋乃ち大に驚きて曰く果して然るか是れ一時も猶豫すべきにあらずとて金比羅の禰宜上田宗平に囑するに備後を廣島に待伏てその上阪を止むるを以てし且つ曰く備後もし肯かすむば我直に往き一身を擲て之を止めむと宗平その旨を領し輕裝して廣島に抵り備後の邊するを待つ時に宗平たまく街を歩して精進十の床屋にゐるに邂逅して相語り共に備後を止ることを謀りき。然るに備前藩の密告ありし爲めにや備後の廣島に着するやいなや藩州藩より早くも士卒を遣し



備後を守りて城中に誘ひ去り宗平らが折角の苦心も果なく水泡に歸し去りしこそ是非なかりけり。時に京都にては會津、桑名の兵麿集しその事情大に迫りたる様なれば急に備中を發してまた京都に歸りき。この時の京都は大火の後にて去年までも壯麗を極めたる街衢も今は漠々たる一面の燒原と變り果て花も紅葉も昔の夢に見るばかりなる凄まじき様なるが上に白晝に盜賊横行し加ふるに壬生浪士處々に屯してその暴逆到らざる所なく最も酷を極めたるがわきて長人を惡むこと甚しく之を捕へて恩賞を得ばやとてその搜索頗る嚴なりこの間に寛齋は或ひは隠れ或ひは走りさましく苦心して機密を探りぬ。寛齋平生ふかく先師徹山が碎啄の恩を感じつねにその報恩底の業をもなせばやと思ひしかど國事の爲めに心にまかせず年月を經りしにせめては之が追福を

修むる爲めにもとて潜居中餘閑を得ることに齋戒沐浴して細楷をもて般若心經を寫しまた如意輪觀音の像を描きて首に掛けたりけるがこの年の九月はその忌日なれば之を其の香火地なる佛小路通大宮の淨土宗清光寺に納めて法要を行はむとせしがこの寺も當時は會津新撰隊別組の屯所となれるを以て迂濶に門に入りがたし乃ち一夜更深けて後密かに觀音と心經を密封して清光寺の門内へ投げこみき然るに幸にして住僧の手に入りて寛齋の投する所なるを悟りて翌日懇ろに法要を營みたりきといふ。寛齋が曾て住めたる明藥師塚町の家はその失踪せしより以來新撰組の穿鑿尤も嚴しく兩三回もその町年寄なる八木良則を西本願寺の屯管へ喚びて詰問し若し隱匿せば斬に處すとまで威迫せしとぞされば寛齋はその家の近傍へ行くべくもあらずまた潜むべきの

家もなければ林間の叢中または寺の床下などに眠りたりき。此の時の事なるが三日間も食を断ちて最と困じ果て夜間密かに柳馬場の裝演師木村治助の燒失後の假屋土藏を訪ひ且つ囑みて曰く余は既に三日前より一粒の米をも口に入れずかて加へて昨朝來の兩雪衣に徹し飢寒こもく至り今は半死半生の間に在り願はくは我に一飯を與へよと治助いとわはれなることと思ひしみて曰く當時は我も一入住にて餘分なく米飯の君に供すべきものはなければ尙ほ一時の飢を療すべきほどの物はあらむ然れど壬生浪士の街上を往來すること繁き故に此に居り玉ひては危ふしとて一碗の食を持たしめて之を土藏の床下なる穴藏に潜ましめたりき。寛齋が穴藏に入り了ると間もあらせず新撰組の關三十郎等捕吏六人と共に拔刀にて入り來り治助を呼起

して長州人森某今此の家へ來れり直に引ずり出せど口々に叫びて鐵扇にて治助の肩を亂打す治助もこの時は最早うろたへてかなはずと最と落つきはらひて更に知らざる跡をまね三十郎が云ふがまゝに土藏の二階に至るまで悉く搜索せしめたるが穴藏の上を敲へる床には籠を敷きつめたる爲めに床下までは心も注かず今は用なしとて出で去りぬ。これ實に寛齋が幸運なるにも屬すべけれども抑も亦忠義の鬼の呵護ありたるにも由るなるべし。寛齋は辛くも九死の内的一生を得て穴藏より匍ひいで今に此に長く留るべきにあらざると厚く治助に謝し側に有合せたる簑を被ぶり農夫の姿に扮して辭し去らむとす治助乃ち料紙硯を呈して後の形見に書きのこしてよとあるに寛齋もさすがに胸せまり今生の別にならむも知れずとて根柢に龜の圖を描きて治助



に與へざらばとて立去る途しも本願寺の僕に行逢ひ  
そが法被をもらひうけて大和路へのがれいでたり  
き。

寛齋が當時藩中に在りてその長州の産なることを他  
に覺られざらむが爲めに苦心したること實に一方な  
らざりき元來長州人は一種の土音あり例へば他國人  
が噂をなすに概ねみなハクシヨンと叫ぶ所なるが特  
り長州人のみはハクシヨロと響かすが故に直に長州  
人たるを否と覺ることを得るなり幕府の捕吏は之を  
一つの手がかりとして常に長州人を捕ること多しと  
れば寛齋はこの訛を避けて巧に幕吏の手をのがれた  
りと云ふその困難想ふべきなり。

この時に當りて長藩は狼狽の厄にかゝりし爲めに俗  
論もまた盛に起りて幕府に服従すべし尊攘必らず行  
ふべからずなど唱へ議論紛々として決せず寛齋曰く

しなり。然れば後に國道は大に之を徳としそが恩に  
酬る所あらむとせしも寛齋が人と爲り濼泊にして金  
錢などの賄をうけざるを知るからに唯だその尤も嗜  
める物を贈りて老後の心を樂しましむるに如かずと  
て維新後は北海道、東京また熊本にありても断えず  
美酒を贈りたり後國道の十四年二月に知事として京  
都に行くや一二日ごとに寛齋の家に入りその禮いと  
厚く恰かも嚴父に仕ふるものゝ如くなりきとは能く  
世人の知る所なり。

寛齋は行程を急ぎつも山口に達しいまだ旅装をも解  
かず直に登城して老職どもに見え説て曰く近日道路  
の傳ふる所に依ればわが長藩は俗論に惑はされて勤  
王の事を擧るに躊躇し徳川氏に服従せむとの説あり  
若し萬が一にもこの説の如くならむには吾が藩太祖  
が深く心を王室に寄せ玉ひたるの微旨に違ひて王室

是れ實に毛利家に關する大事なり等閑に看過し去る  
の時にわらずとてまた急に西に向て馳せ下りぬ。

寛齋が始めて長州に歸りし時なるが將た二たび歸り  
し時にや今の男爵北垣國道を救ひたりきそは國道も  
いまだ柴捨藏と稱したる頃にて生野銀山の義舉に加  
はりしが戰破れでその領袖たる平野國臣は幕吏の  
捕獲する所となり南八郎、戸原卯橋などみな陣歿し  
義徒悉く潰れて國道は辛くも身をもて免かれ長州へ  
潜行するに偶々奇兵隊に訝しまれ幕府の間諜なりと  
て將さに首を刎ねられむとす。この時運よくも寛齋  
通わはせてその刀を止めこの士は銀山の義黨一味の  
人に紛れなし我もかつて屢々會して國事を語りきと  
て百方辯疏し之をそが志す處まで行かしめたりき  
寛齋が當時その處を過ることなかりせば國道は空し  
く刀下の露と消え果て後に幕代に遺ふことを得ざり

に對し奉りて不忠なるのみならず抑もまた藩太祖  
の罪人なるべし断じて之を行へば鬼神もまた避くと  
いへり紛々たる俗論衆とより意に介するに足らず君  
等苟も老職たる者宜しく老侯を補佐して勤王の實を  
擧げよ意氣軒昂口角沫を飛ばす老職等その言の激烈  
なるに怯へて答ふる所なく漸くにしてその場をつく  
らふて云ふ子が言また理りなきにあらざる然れど之を  
文に章して老侯に呈するには如かずやと寛齋曰く大  
に可なりとて直に旅亭に歸り樽酒十と共に臥床の上  
に在りて燈下に建白書を草し詰且之を奉行所に進達  
せりその文に曰く。

一此度御國之爲及御變動一候其元來は尊王攘夷よ  
り起り候事に而已に昨年八月十八日變動に及び幕  
府より其後を與勅と申前を違と申旁以て未だ  
其真偽不明已に三條公其他堂上方御當國に被



爲に在候而其決定は御眼前之事に奉存候處以後追々御上書或は御願書等終に被成御貫徹一故不<sub>レ</sub>得止當七月之變に及候然れども素より可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>追<sub>レ</sub>天朝之御所存にては更に無<sub>レ</sub>之段天道之明なる衆人之知所に御座候得共曲て幕府よりは其備を糺さず偏に罪せんとのみ謀計に御座候處當今に至り候而幕府之申分を被<sub>レ</sub>遊<sub>レ</sub>御承引候而者昨年八月迄之勅命全く反古に相成全御恭順のみ御唱被<sub>レ</sub>遊候ども御意味相立不<sub>レ</sub>申愈當七月を眞之疎暴にも恐多も天朝を御迫りの意に悉く相成可<sub>レ</sub>申左様候得者必定御當家様之御罪に極可<sub>レ</sub>申候折角是迄御申立之御正義も一時に亡び無<sub>レ</sub>據朝敵之御名難<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>逃御儀と奉<sub>レ</sub>存候間千萬一追討使來り候ども先づ彼之罪より御亂可有<sub>レ</sub>之其論も無<sub>レ</sub>之傍に彼より打出し候は<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>止御決心をもつて御合

取に及され候ども天朝を對し逆意には相成不<sub>レ</sub>申候素より追討御輪旨も未だ下り不<sub>レ</sub>申由乾度承り候且又夷艦勢差向候ども攘夷は兼而天命之御事に候得者御望固御處置被<sub>レ</sub>遊度其上自然御盡力に及ばずして終に御滅亡に至り候ども御先祖様は不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申皇國御爲に候得者少も御諂無<sub>レ</sub>之御正義に被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候は<sub>レ</sub>天朝へも御申譯相立可<sub>レ</sub>申左も無<sub>レ</sub>之太平に相成り候ども此儘御因循之御相續遊され候而は天朝は不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申諸國へ正義並萬民に至る迄御當家様を可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>恨何卒御上は御末家様方御老中様其外眞に無<sub>レ</sub>私論御會議之上御議論を御兩殿様被<sub>レ</sub>遊<sub>レ</sub>御聞取不<sub>レ</sub>動之御處置を以て追討使御引請可<sub>レ</sub>然奉<sub>レ</sub>存候同天下之人心悉く御國に隨ひ候者全く是迄御正義に被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候は<sub>レ</sub>こそ如此御座候得者何様天朝より開命之時を御待被<sub>レ</sub>

遊見角御兩國御堅固に武備御盛に御布置可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊已に三太夫様方之御處置も今此時にては有<sub>レ</sub>之間敷と奉<sub>レ</sub>存候何角御延引可<sub>レ</sub>然且つ山口にても諸勇士大會之儀も零承り候是等御鎮靜之儀も御人數少にて得<sub>レ</sub>御議論有<sub>レ</sub>之候願くは御兩殿様之内御出馬にも相成り候間御鎮被<sub>レ</sub>遊度奉<sub>レ</sub>存候たとへ一人たりとも無益ならざる様御處置可<sub>レ</sub>然奉<sub>レ</sub>存候火急之儀に候は<sub>レ</sub>ば前後不<sub>レ</sub>文之段御推免奉<sub>レ</sub>希候以上

十二月

寛齋すでにこの書を奉行所に進達し自ら心に思へらく是れ必ず老侯及び老職どもの意に忤ひ軽くして切腹重くして斬首は免がれざる所ならむとまた生を思はずかくてこの翌日目付役たる能美某、竹中某の二人の名にて寛齋を城中に召す寛齋さらばこそと心

靜に用意して登城しその上意を問ふに二人の曰く足下の建白書は昨日すでに奉行所より老侯の前に捧げたり老侯ふかく足下の言を嘉みし玉ひて御威いと勢からず尙ほ王事の爲め力を盡すべき旨を寛齋に傳へることに侍べりきと寛齋は既になき命と思ひ定めたるに今圖らずもこの有がたき言をうけ大に感激してまかりき。

○寛齋翁の攘夷祈願の聖像

(此に掲載せる観音像は寛齋翁が國事に奔走せる際攘夷祈願の爲めにとて金泥をもて紺紙に寫したる二圖の一なり一は曾て毛利侯に献じ之は自ら常に頸に掛けて守本尊となし維新後そが一命を助けられたる形見として之を装演師木村治助に贈與したるものなり今回翁の門人岩島虹石氏特に臨寫して遠く寄贈せられたり)



為攘夷祈願書

橋公南



橋公南

越てまた一日茶遣飯田宗治、寛齋の旅亭に來り老侯  
 燕室の袋柵の小襖二枚を出して且つ曰く今日我の來  
 りたるは全く老侯の命あるが爲めなり老侯には寛齋  
 なほ未だ城下を去らざるべし急ぎ行きて此に書を命  
 ぜよとありき足下須らく命を奉じて可なりと寛齋乃  
 ち之に小松を書き捧げぬ蓋し老侯のこの命ありたる  
 は彼の建白書の見付役どもに遮られて侯に達せざる  
 やの疑なからしめむがためなりきといふ之を見て  
 も老侯が賢明なりしを知るべし。寛齋ふかく老侯知  
 遇の恩に感激しまた此より兩三回も京都と長州との  
 間に奔走して國事の爲めに力を盡したりき。當時京  
 都の書林に俵屋清兵衛なる者あり頗る文字もありて  
 尋常の商賈にあらず常に王室の式微を慨き志士等の  
 爲めに便を興ふること太だ少からず故に後には寛齋  
 この後屋へ投じたりき。又長州にては松原貴遠あり

兼寛齋

て力を添へき貴遠は當時三田尻新渡の代官をつとめ  
 維新後は太和三輪の大神神社および山城男山神社の  
 宮司となりし人にて和歌俳句を能くしたるが寛齋の  
 實家なる石田氏とは親しき間なりしかば何くれとな  
 く便宜を興へたること太だ多し左れば寛齋は平生つ  
 れにこの二人を徳となしぬ。  
 元治元年も憂きふしにげき中に暮れて明れば慶應と  
 改元す。この年將軍徳川家茂二たび長州を征伐せむ  
 として進軍を令す天下みな之を非として云へらく今  
 や外憂あるに當てこの舉に出るは是れ敵の戸隙を窺  
 ふ時に兄弟室に相闘ふものにて遂に併せて敵の得る  
 所とならむと諫る諸侯もありしかど徳川氏肯かず五  
 月を以て江戸を出發す。時に河瀬太宰思へらく是れ  
 變を内に生ぜしめて之を中止せしむるには如かずと  
 て同志の士數人と密議し家茂を途に刺さむことを謀

百二十九



りき然るに不幸にもその密謀は幕吏の知る所となりて太宰空しく縛につきぬ。この太宰の妻は淑徳の養高き女性なりしが太宰の身は遂に死を免がれざるものと知りけむその身もまた場を去らず刃に伏しき翌二年二月に至て太宰は志を賣して断頭場上にあく舞と消えをはりぬ。扱てこれより先きに寛齋の妻なる者一幼女をのこして先だちて男一人の手にて育つべきにもめらねば之を京都在の浄土寺村なるある農家に里子として托し既に十歳になりし時之を取戻したるが國事にて諸處を奔走することになりしかばまた之を太宰の妻に托しおきたりき今この變の寛齋に連するやその驚き言はむ方なく寛齋が往きて後事を整理するにめらねば河瀬家の存亡もまた知るべからず之を傍觀するは平生の交誼を没するものなり我争ぞか之を思ふべけむとて遂に家職を奉還しまたも

京に上りその後事を經紀しまた直ちに防州に向つて出發せり。

この後暫らく山口に住みきその頃畿内にその寓居を名けて狐狸窟といひまたその記をもものしつその文いどあもしろし。

狐狸窟の記

たはむるゝたひに煤の降かゝりて我かほもまなこのみ光りてさながら古狸の心地しらるゝもをかし或はつくるはぬま垣に千草茂生りたる様狐のすみかどあもはるゝより此處を狐狸窟とは號け侍りはるにものれかねてより造化齋の號あればなるべしどあもひあきらめてその造化するあもむきをいはし常に酒を好めどもうつはものさへたらねば例の器具皿は手皿に化し筆洗は盃ながしとなり雨夜のつれづれには狸に化て酒をかひ酔ひのあまりに

はものか狸の腹鼓も皆狐狸窟の業ならむやしかはあれど都に住めばかゝるあやしき事だにあらずたいなつかしきは比叡の山風加茂の川水ながれの未は泡となるともこの狐狸窟のあやしきにはかへがたしなどうちつおやきて

ばら〜と時雨ふる夜の宵曇り

狸や里に酒もどむらむ

油もて煮るや豆腐のかほりゆえ

あのが賊を見する野狐

寛齋がその清貧に安んじて而かも洒落不礙なりしはこの記もて見るべし。

徳川家茂は他の諫をも用ゐずして二たび長州を討ちたりしかど連戦克たず次で中道にして身まかりしより天下また悉く徳川氏の令を用ゐず加るに土佐の坂本龍馬が發意にて薩長の建衛と成り土肥もまた漸

く頭を擧げ初めて大勢轉しかかりき此において寛齋また京に上り俵屋清兵衛の家に寓し諸藩の志士と會して互に王事に周旋せり。

明けて慶應の三年となりぬ。この頃の事なるが寛齋また高野山の爲めに力を盡したること甚だ大なりき。そは仁和寺宮(今の小松元帥宮殿下の御事なり)總督として南海を鎮定しその本部を紀州の高野山に

置き玉ひきこの時高野に正僧と俗僧との二派あり聞はゆる正派は常に鼠色の法衣を纏ひ専ら宗乘を收め戒行圓滿なる者にて俗派は黒衣にて行人と呼び交際し巧にして尤も世才に富めり故に以て山上の事は多くは俗派の爲めに制せられて心を得ざることも最と多かりき然るにこの俗派如何にして譎詐をもて仁和寺宮の宮臣どもに取入りけむ竟に總督の令旨を請ひ受けて山上の全權を握ることになりしなば正派大に驚



きて爲す所を知らず時に京都六角堂の側なる能満院の住職に妙観といへる僧あり高野山上の事悉く俗派に歸したるを見て曰く是れ一山頽敗の基なりと慷慨自ら措くこと能はず之が回復をなさむと思ひしかど力及ばざる爲め空しく手を束ねて之を觀るのみ抑もこの妙観は長州小郡の産にて寛齋を知れるを以て一日來りて寛齋に囑するに高野の爲めに一臂の力を假さむことを以てす寛齋事の情を聞き最と氣の毒に思ひて點頭し乃ち爲めに之を廣澤兵助に謀る兵助の曰く今に至りて令旨を消取すが如きは到底行ふべきの事にあらず唯だ我に一策あり寧ろ正俗兩派の僧の宗例に通達せる者を撰擇し混して之を登用して山事に當らしむるに如かず左ならむには山上の事遂に正派に歸すること火を賭るよりも隙かなりとてそが言の如く行ひしに幾ほどもなく高野山は全く正派の手

に落ちたりとぞ妙観大に喜び此事偏に寛齋が力を盡したるに基するものとして深く謝しぬ。後年に寛齋が高野に詣るや山僧等禮遇至らざる所なく五月間も引きとめて山を下ることを許さざりきといふ。かくて薩長土肥その他諸藩の大兵入京し伏見鳥羽の一戦は枯柴を投するが如く東兵を走らしめ次て錦旗の東征となりて世は明治の維新とはなりぬ。此に於て曾て國事に奔走したる者はみなその材に依りて登用せられた野に遺賢なかりき。幸にも生のこりたる僧はみな聖代の恩遇に逢ひたりしかど不幸にして幕吏が兇鋒の下に倒れたる者に至りては謂はゆる「死んだ者貧乏」の喩を免がれず。明治初年には未だその後を録するの恩典わらざりしかば寛齋は大に之を缺典なりとして參議廣澤兵助に説て曰く維新の事たる固より皇運の泰なるに屬

すと雖も抑もまた天下の志士が君國の爲めにその家を忘れ身をすてたるの功なり然るに不幸にも聖代を見ずして倒れその骨は寒烟凄草の中に曝されまたその子たり親たる者の飢寒に逼れる者太だ多きを見る倫し旌忠録後の典なからむには何を以て天下忠義の心を奨ふことを得むや宜しく急に一官署を設けこの事を調査すべし子ら特り幸に生のこりて朝廷の上に朱紫の榮をうけながら此等の事を謀らざるは同志に忠ならざるものなりとてその言いと切なり兵助曰く老人の言ふ所太だ宜し我もまた之を思はざるにはあられど今や維新兵亂の後をうけて財政紊亂し大賤また一物を餘さず畏多きことなから至尊に奉るべき供米にさへ事を欠くの有様なり況いてその他をや若し時を得ば兵助誓つてこの事に盡す所あるべし老人請ふ我に數年の日月を假せよと寛齋乃ち他日を

囑みて去りぬ。この後幾ほどもなく谷鐵臣が勇退して京都に歸臥するや養正社なるものを起しきこは維新前後の國事に仆れたる志士を靈山に祀りまたその行状を録して天下後世に傳へむとするに在り寛齋大にこの事を喜び直に入社して大に幹旋する所ありき。品川子爵曰く「寛齋先生と谷翁とが來りて養正社の事を泣付かれたるには困むたりき」とその熱心なりしを思ふべきなり。養正社の成りて第一祭典を靈山に行ふや寛齋は七十餘の老體を覺束なくも杖に扶けられてその式場に臨み老眼よりはふりあつる涙を拭ひつゝ一首の歌を手むけつ曰く  
もろ共につくしも果すいたつらに  
残りて君をまつるかなし  
讀來りて惻々人を勵すを覺ふ是れ他なしその肺腑よ



り洗出したるが爲めなり。  
 維新の業も漸くその緒に就き世も物静かになりしかば寛齋今は政事に拘はるべき身にあらざりてまた元の「書三昧」に立もどりて居を木屋町二條に卜して筆硯を安しぬ。

この時よりして寛齋また口に世事を語らずあのれが言て萬死を堵して國事に奔走しさまく辛酸を嘗めつくしたることなどは聊かも之を人に語らず更に知らざるものゝ如し尙し寛齋にして高を希ひ外を求るの心ありてその昔日の事を言立てしめなば子爵男爵と賜はりて榮華にその老後の身を樂むことは決して難きにあらざりしなりざるを疑はども顔にも言にも出さず二たび元の老書師に立もどりたるその心事の水よりも清きは實に感ずるにあまりあり品川子爵曰く寛齋翁の心のうるはしきは塵かしきほどなりと

その人品の高くして流俗を振んずるを見るべし。  
 寛齋すでに自ら維新前の功を頼みたりき然れど宮廷にてはその功勞を嘉みして正七位をたまひ十七年の三月を以て特に賜ふ所ありき。

森 寛齋

維新前國事に盡力侯段奇特之至に付金五十圓下賜候事。

明治十七年三月十七日 宮内省

寛齋この賞賜を拜して門人に語りて曰く老人が維新前に當りて死生の間に出入したることまた多し然れどこはみな我が書主毛利公の爲めに盡したるものなればこの賜は實に過分なり老人甚だ之を愧づと心の心を用ふるの謙なる概ね此の如し。  
 此の如くにして寛齋また繪畫をもて門戸を開きたりしかど明治初年より五六年頃までは世人みな新奇の

事物にのみ趨せてその何派に属するに論なく畫といふ畫は悉く之を顧る者なし。七八年頃より漸くまた箇中の趣味を樂むに至りしと雖も唯た南宗のみを悦び狩野、土佐、圓山の諸派の畫に至りては殆ど之を需る者なかりきこの時に當りては三都ともみな南宗のみ行はれ東京にては安田老山、藤堂凌雲、奥原晴湖など藝林に跋履し大阪にては橋本桂園、十市王洋、橋本青江あり京都にては中西耕石を始めとし今の谷口高山、田能村直入などの獨占にてその得る所の潤筆錢太だ多く最と裕かにその日を過すにひきかへて他派は見る影もなき憐れなる様に落ちぬ。  
 野口文學の言ふ所に依れば京都はさすがに美術國の名にそむかず彼の狩野芳崖が日給三十錢にて陶器畫を描きたるが如きことはなかりきとこの説或は然るべし左れと米人より京都百年後における繪畫上の名

譽は此人に歸すべしとまで稱せられて芳崖寛齋と鼎足の勢をなしたる岸竹堂さへも西村總左衛門の店に備はれ友禪刺繡の下畫を描きて僅かに飢寒を療したるを見れば南宗以外の畫の行はれざりしを窺ふに足るべし。  
 一代の老書師として繪畫史中に特筆さるべき寛齋も時の不祥に逢ひては詮方もなく縁索を擲けてその門を叩く者ともななければ飯上をりくは塵を生じ飢死と去ること僅かに一髪を隔つるばかりの有様なりきされば月末にはいつも債鬼恰かも期如く來り攻めて動かさずすがの寛齋も無き袖を振らむ様なく債鬼の來るごとく奥なる一室の中に立ちもりて筆を吹き幾人來りて聲高に呼び迫るも依然として筆を吹き一語の之に應ずるなし債鬼もつひには根氣まけして去りたりき。當時寛齋の家に侯藤助なる者あり人と



爲り篤實にして能く寛齋に仕へ常に家事を取るの暇を偷みて内職し餘蘊あるごとに自ら債家に賣らしたりとぞ。

この頃にやをかじき話ありそは同く京都の畫家中林竹溪といへるが寛齋と親しく往來して互ひに繪畫論などを聞はしたるが一夕また來りて閑談半宵に涉り辭し去るに臨みて蠟燭一丁を借受けて歸りき後日また寛齋を訪ふて曰く前夕蠟燭を借りたれば之を返さむとすれど家に一の蓄ふる所なし然るに前夕借りたる蠟燭は僅かに半を焼うせるのみなれば一丁の半價を拂はし即ち可ならむとて一文錢五文を出したるに寛齋は早速の返済甚だ有がたしとて之を收めぬこの事たる固より二人が無邪氣なる性にも依りたるものなれどまた當時の貧苦を窺ふにも餘ありぬべし。また同時にや寛齋は人の意表に出でたる畫を作りて

世を驚かしたりき。そは京都の俗祇園祭禮には家々みな競ふて美麗なる金屏風また古名匠の書きたる屏風を店頭にて建てる裝飾に意を用ふる屏風祭の稱ある所以なり然るに寛齋家貧にして飾るべきの品なし因て畫用の提引假帳を數枚並列したる上に胡粉をもて參差たる芒を畫きて之を建てるに秋風候ち座に滿ち涼味拂すべきを覺ふ人却て之を奇とし觀者堵をなしきといふ。

當時京都繪畫界に牛耳を取りたる寛齋、竹堂をはじめ鈴木百年の如き幸野樺嶺の如きさへもみな多くはかゝる有様なりしかばその餘の畫家などは言ふまでもなく淺ましき境に落ちて見る影もなかりき然れば年わかき畫家などは狼狽周章して更に面を南宗に變ふるもの多かりき寛齋はこの間に居りて屹然として類波の柱礎となりて敢て時流を越はず且つ時流に眩

惑する者を諭してその學び得たる道を勵ましたりしかど飯を喰へざるの一事には敢すべくもあらず中々に寛齋の言を用たりき。

寛齋がかゝる窮困の境に沈淪せる時に當つて唯だ一人の知己ありて常にその窮を賑はし寛齋をして飢寒の間に死せしめざりきその知己とは即ち小室信夫なりき。品川子爵かつて曰く寛齋翁の繪畫を傳へむと欲せば信夫の眼恤をもまた共に傳へざるべからずとこの言大に然り。寛齋が彼の美術闇黒界を凌ぎたりしは實に信夫の恩なりしなり左れば寛齋は死に到るまでも口に信夫の友誼を語りて已まざりきといふ。南宗畫が前に述べたるが如きすばらしき勢をもて天下の繪畫社界を靡みし僅かに四君子を畫き得るばかりの畫家もその派南宗なりとらへば翰墨の間に周旋して口を糊することを得たりき彼の竹田、介石、

梅逸などの如き諸名匠が瀬川さては石田、雲林、十洲、衛山の精華を咀ひ嚼はゆる五日一水十日一山の工夫を積み一の尖點を下すに當りても尙ほ多少の商量を要したるが如きものは讀畫界の嗜好の如何なる様に傾きたる時と雖もまた決して捨てらるべきものにあらざ然かばあれど明治初期の南宗は即ち然らずその畫の售るゝにまかせて遂にあれば畫をなすに至りなべての南宗は山を描きても披麻なるか勝た雲紋、折帶なるかの見分もつけがたく人物やら岩石やらも知れがたきものを作り森田節齋の醉中の戲墨もかくまでに至らざりきとあるはるゝ様なりき然れど盲目千人の世の中は尙之を珍とすると洪璧の如く晴湖の半切に潤筆十圓を惜まざりしなり。七八年頃に至りて三田の福澤諭吉口を極めて當時の南宗畫を攻撃したりき是れ南宗非難の聲の出でたる第一着なり



而かも世は尙ほ遺般の非難には頓着せず實にこの時こそはわが繪畫界の闇黒なりけれ。

我が繪畫界はかゝる闇黒の中に十餘年の年月を送りて明治十五年とはなりぬこの歳會官設をもて繪畫共進會を東京に開けり是れ南宗の屏息するの第一歩なりまた一二年を過ぎてヘルント氏が佛國よりピクロー、フェノロサの二氏が米國よりもの／＼相つぎて來り繪畫を發達するに及びて先づ狩野派が始めに頭を擧げ住吉、土佐、圓山の諸派も續きて外國人の賞揚する所となりき是の時に當りて多年喰ふや喰はずにわはれなる日を送りたる狩野芳崖忽ち荒物店の中より躍り出で恰かも雪村老渙が天下りたるが如き勢もて高に據て鼓吹し西にては寛齋、竹堂、百年、檉嶺の諸家も一時に芽を吹き出だしたまた二たひ藝林の推重する所となりければ彼の「つぐね」の一派

は螢火の晨光の出るに逢へる如く何時となくその影を收めをはりぬ。

關西にては寛齋は圓山の的孫にして而かもその年齒も尤も高き故をもてわけて尊重せられ殆んど應舉の再出せるが様もて遇せられ寛齋の名忽ち隆然として關西の天下に轟き書を需る者その門に群がりて市を成しぬ。抑も寛齋が繪畫に於ける一代の大家たるの妙腕を看取すべきものは水墨をもて厩左とすべし花卉禽獸に於てはその妙或ひは一籌を輸するものあるに似たれどもまた決して尋常畫家の企及すべからざるの韻致を有しその密畫に至りては一葉一葩も尙くもせず翎毛の美なる爪牙の鋭なる圓山派の衣鉢を傳へて失はず圓山派の畫は寫生を尊ぶより自づと俗に洗れやすきものなれど寛齋のみは曾て鷹鶴の洗なる南宗の名

匠にも参したるをもて氣詔横生し優に明人の域に進みたるものあり。世人また或ひは曰く設色の如きは寛齋の長ずる所にやらずと是れまた寛齋を知らざる者の説なり京都紅屋某の藏する所の京人形の圖の如きはその設色配合の妙なる實に當代稀有のものにて三十年來の畫家中に在りて狩野芳崖を除くの外は一箇半箇も能く之を辨する者なかるべし。

寛齋の畫を作るや世の畫家の如く多く粉本なるものに依らざりき元治甲子の變に寛齋の居もまた兵燹の災に罹るや門人等應舉より傳ふる所の粉本の焼失せむことを惜み倉皇之を取らざりしとす寛齋堅く之を制止して曰く粉本は模倣の弊を生じ本然特性の勃興に障害を興ふるをもて我は之を無用の長物となしき然かほあれど丹青の精采縝密なる精力を費したるものなれば補助の威なきにあらざりて今まで藏めよきた

るが今や忽ち丙丁童子の毒ひ將ち去る所となれり是れ天の我が畫を愛する爲めなりまた幸ならずや汝等危きに近くこと勿れとて切に之を誡め共に東山の上に登りて悠然として烟燭を俯視したりきさればこそ寛齋の畫は愈上出て愈新なるもまた宜べなるかな。

寛齋また決して下畫を作ることなし曾て宮内省より新皇居の御杉戸に小鍛冶鍔刀の圖を畫くことを命ずるや例に依りて下畫を徵す寛齋乃ち固辭して曰く畫家は下畫の檢束を受けて能く爲すべきにあらざりて至尊の御覽に供し奉るものをや蓋し下畫と本畫とは自と變ずるものなるが他の畫家の如く下畫を作らず解衣盤礴その心機相應するの時に當て直に筆を下したるなるべし遺般またその境界の殊なりしを見るべし。



わきて稱ふべきは同じ書を再び作らざるの一事是れなり寛齋が曾て金比羅神社に納めたる葡萄に栗鼠の畫は最とめでたきものとて或る西洋人某この圖を見て激賞措かずわざ／＼寛齋を訪ひ囑するにこの同じ圖を畫くことをもてしそが望む所の潤筆錢を積まむとて切に請ひたりしかど寛齋は斷然として之を謝絶したりき。

十五年の繪畫共進會を上野公園に開くや美術協會は全國の畫家に向つて新畫の出陳を求む寛齋乃ち墨畫赤壁圖を出品せりこの圖は意匠筆力ともにめでたき逸品なりければ漢鑑家の激賞する所となり美術協會は之を参考品として買求むことを告げたるに寛齋は既に他に約束せりとて之を辭しぬ。蓋しこの圖は寛齋自らも得意の作となしければ心に之を品川子爵に贈り子爵もし好まざれば小室信夫に贈らむとな

したるなりき。その頃品川子爵は御料局長の職に在りて生野銀山へ赴くの途次京都に抵り曾撰堂に詣つ寛齋直に子爵を訪ひ曰く我さきに赤壁圖を畫きて共進會に出陳せりこは君に贈りまめらせむことを思ふ君もしこの圖を見て望みなしとせば請ふ之を小室氏に贈らむと欲す小室氏またこの拙畫を望まざらば之を江州瀬田の橋下に投じて龍王に献せんのみと子爵曰くそは必らずめでたきものなるべし我永く愛蔵せんとて相別れき。かくて子爵は御料地を巡視しまた京都に来るや寛齋倉皇として來り曰く彼の赤壁圖につきては最と困じたること起りきそは前日至尊が共進會へ御幸あらせられしをり區らずも赤壁圖が御意にかなひ早く買上つかはせよとあるに侍臣はこはすでに他へ約束あるよしを奏せしにさらば新に同じき圖を命ぜよとのことにて昨は侍從職より勅

を下したまひき同き圖を作るの一事は縦しや至尊の勅なりとて肯がひ奉るべきことかなひがたく侍べりさありとてまた至尊の御意に副ひ奉らざるも最と恐多きの極みなれば願はくは彼の圖を君の手より宮中へ献じ奉られたし君には老人また別に作りて贈りまめらすべしと囑みければ子爵は直に東京に歸りてこの圖を奉れり至尊いと喜ばせたまひて古代硯宮を贈ふこは月に櫻の詩繪ありて古名匠の作に係る名器なりき。子爵因て寛齋に諮て曰くこの御器たる必竟翁が畫につきての恩賜にして余の私すべきものにあらず願はくは翁と二人にて之を曾撰堂に納めたくもひ侍べりき曾撰堂には翁の故人も余の故人も多く祭られたればその英魂毅魄を慰するに足るべしと寛齋乃ち大に喜こびて之に答へき曰く。

傳輪難有拜見仕候御硯箱一條奉賀候實に心願とゞき江州之湖水までもにどりなく清く可奉大慶と奉存候 先是御答迄如此御座候恐々。

四月二日 寛齋  
寛齋はかくの如く至尊の勅なりとも決して再び同圖を作らず况て黃白をもて之を需るをや倘し世に寛齋の落款ある同じき二圖あらばその一は必ず發見の圖作に係るものなり。

寛齋の筆を行ふやその健なる實に比類なし曾て攝津の池田に遊ぶ酒宴中に小野碩齋なる者あり飲中八仙歌を吟じ出す寛齋その聲に應じて筆を取り碩齋の未だ吟じ畢らざるに既に八仙の圖成りて而かも個々氣韻ありて躍出の妙ありき。扱てまたその繊細なるものに至ては壯者の眼明手快をもてすと雖も企て及ぶべからざるものあり蓋しその精蘊兼ね至らざるもの



なし大家たるに足るもの即ち此に存す。

寛齋つねに開へらくわが圓山派の畫に南宗の氣韻を得たらむには十成の畫と稱すべしとて平生つとめて古來南宗名家の畫論を讀みまたその遺墨を規仍したりきまた常に壁に野呂介石の山水圖を懸け人に誦りて曰く山水に至りては我が派到底南宗の氣韻の高き及ばず殊に近世にありては介石翁の山水を愛すその皴法の正しくして神韻擲すべきものは介石翁の右に出るものなしと是れ寛齋の畫の圓山以外に一機軸を出し秀爽にして一點俗氣を著げざる所以なりとす。フエノロサ氏の京都に來るや一日丸山作樂を伴ひて寛齋を訪ひ圓山派の來歴及び寛齋の畫に對して懷抱せる所を叩きつ寛齋乃ち語て曰く。

圓山應舉は享保年間に生れ少壯より畫を京都の石田幽汀に學ぶ幽汀は狩野常信の流派なり應舉始め

或ひは歌妓遊女の卑賤の者を畫きても之を仙佛聖賢の畫傍に置くとも敢て賤しとせざるは全く氣韻の高ければなり。

品物或ひは山水に限らず眼前の物に對して寫す時は先づ自在なるべきが對視ならざる故人の像又遠國の山水甚しきは雷龍天狗仙佛に至りては何に依りてせむや即ち氣運腕頭の力なかりせば安んぞ畫といはむや又筆力に動かさずと雖も古人の例を越はず規矩を守らず豪壯脱俗と見せて風韻がましく唱ふる者は即ち禪家の所謂野狐禪なり氣運腕頭見なくして故人師傳の惡癖かつ精粕のみを管め守る者は流俗なり。

腕乏しくて逼に強く見せむと思ふ是れ邪なり又慎縮する者も痴なりこゝに於て屢々窺ふに應舉の如きは一筆も苟もせず日々に進み夜々に發明し一

一嘯と云ひ後に夏雲、仙嶺等の號あり中年より應舉と改む時の儒者芙蓉の曰く兄の畫全く明の錢舜舉の風致ありと乃ち舉の字に應を加へて名とす印も又芙蓉の刻する所なり。

應舉は苟も師傳にかたよらず己れが欲する所に從て和漢の古人に沂り或ひは寫生をなすに密にす然れども現今の寫生と唱ふる所と異なれり即ち寫生は形のみを寫すにあらざる能く其の眞を得て筆に心を盡さざれば縱ひ精細に寫すとも畫といひがたし之を得る者或ひは鮮なし之を得るは全く筆力氣韻にあり應舉の如きは既に天稟の筆力ありて此に刻苦を以てし早年と雖も老練にして縱横に筆を運ぶ處に至りては千尺を一筆に陳延しこの勢紙中に溢る細密なるに及では方寸の中に宮殿樓閣人物禽獸等を畫くとも形全くして大作を爲すが如し

歩も止まず何となればその作す所を見るに筆に年曆あり年號なくして明に明和或ひは安永と見ゆるは應舉に限れりその他に異なるを見るべし又早年に作る所の畫蒼然として古し老年の筆益す美にして麗はしく更に衰へず而かも故人の規矩を亂さず西洋鉢の細畫に間ま之を見る筆頭に風韻あり一毛も俗ならず渾て器械を頼まず筆力嚴然たり視るべし既に今を去ること百餘年の以前なるも頓に之あり此翁今に存せらるゝとも盡ること有まじ實に腕頭無盡神妙畫墨と云ふも宜なる哉。

其門下業を開く者少からずと雖も畫鉢一として同じからず翁の一指を得ること難しとす是れ所謂盲人の大衆を探るが如し。今や開化の時に到り萬國交際世に専らなり仍て諸物品大に行はれ畫も又既に盛なるを見る然れども



諸工織物又は陶器等の類と大に異なり其國土人品の力を見弄ぶものなれば我日本は其邦土の風を現示し聊かも他國の風致を交えざるこそ善とす然るを他國の好みに媚びてその需を博せむとするは全く辨間遊妓にも劣りと云はむつらつら世間を觀るに何れの國より渡來する品も一として他の風土に似せたるを見ず皆其國の風を保ちたり他の國の好みに媚びむとて徒らに力を費すは却て笑を招く種たりたとへば田舎の婦女子たま〜都めかさむとて土くれたる顔に強て紅粉を糺ふが如きは笑ふに堪えたるものなり寧ろ紅粉を施さず田舎のまゝなりせば質朴とや云はむ。

近來西洋畫を見るに寫眞を元とし此に山水諸物度を計り其遠近を極め淺深向背毫も眞を離れず其精密素より他の及ぶ所にあらず感ずべきなり然れど

も影を寫す至極然るべきの事なりと雖も影は日月の度により四時朝夕同じからず何れの物も其影のうつること同じ左すれば活物にして活物にあらざるかと疑ふ。

我が日本は深く影をとるを嫌ふ只影も陰に有るやと見え花に香もあらむか又留りたる鳥も羽を動かさむやと思ふ所に至りてこそ始めて寫生の鉅手と云ふ。

唐の吳道子多くは仙佛の大作など有るを聞き傳ふ尤も古來の神品と云ふ然れども天竺畫の風致ある故影を深くとる是を一に論ずることあり明の平山、吳の小仙何れも鉅手なれども此風あり然れども我輩等の論ずる所にあらず李龍眠かう舜舉に至りては此病なく純粹の鉅手たり我が日本古昔は姑く措て土佐光起、圓山應舉等もまた是に類す。

嘗て聞く吳道子龍を畫き神に通じ雲を起して青天に上ると我が古にも巨勢金岡、狩野元信其他之に類するものあることを聞けり説甚だ怪異なれども深く心を鍊り力を盡したるその妙術の言暗に述べがたきを以て言ふ所なるべし尤も其畫を見るに甚だ難にして粗く雀を畫きて雀に似ず今生徒輩の寫す所にも其の密なること殆ど古に勝れり然れども今の作る所嚴然と現はれたるを聞かず更に生動するは全く筆力を用ゐるの淺く心を鍊るの薄ければなり仍て鬼神を感ぜしむること難し只名利に走りてその本分を失するに是れ由るなり是れ外國の學士が千里遠來のねもころなる間に辭みがたくて漏したる畫說の一端なり寛齋平生虚を避けて實をとり言説を後にして技術を先にしたるをもて門人などの外には絶えて畫論を吐くことなかりき

然れば道般の止啼錢は後素上の珍となすべし殊にこの心を鍊らざれば鬼神を感動せしむること能はずといひ名利のために役々たるを斥けたるなど最もありがたく寛齋の寛齋たる所以の本領を見るべきなり。この時に當りて寛齋の名つひに九重の宮居の奥にも達し有司をして命を傳て新皇居の御杉戸に小鍛冶鍛刀の圖を描くことを以てす寛齋曰く今や微臣年老い腕衰へて世にも有がたき聖旨に副ひ奉りがたく侍り殊に少年の畫人にしてをさ〜古名匠の墨をも塵ずるに足るべき儂あり願はくはこの輩をして代つてその命を拜せしめ玉へとて之れを辭する再三なりき然れど許されず特にその下圖を徵することさへ免せられてその命最と懸なりしをもて遂に筆を染めぬ。この圖は八十に近き老人の筆とも見え筆力雄健にしてめでたき傑作なりしは世の能く知る所なり



り。

二十三年の十月宮内省に帝室技藝委員を置かるゝや  
帝國博物館館長九鬼隆一は宮内大臣の旨を仰いで之  
を寛齋に傳ふ寛齋また曰ふ我其人にわらずとて直に  
辭退書を草す曰く。

道般辱くも宮内大臣より不肖寛齋に帝室技藝委  
員たるの命を下され辭令書二葉條項書一葉閣下の  
御傳達に依り滞りなく去る十三日着到急遽開  
練恭しく封中の數書を捧拜し恐懼恐懼魂爽飛  
越して身軀戰慄感涙胸に逼り心惰言ふ可らず信に  
恩命の委き深く骨髓に銘刻せり歡喜怡悅直ちに  
命を受け此大任を擔ひ而しく恩命を空くせざらん  
ことを期せざる可からざるに奈何せん素寛齋性頑  
愚朴直歳を加ふるに従ひ魯鈍狂妄老邁近頃殊に甚  
し惟だ恐る幸に此大任を拜受するも其萬分の一

をも盡す克はずして或は帝室技藝委員の名を潰す  
に至らんを矧んや業已に老朽後進を誘導し其工藝  
技術上の諸問を奉答することに於てをや到底此大  
任を蒙り恩命を辱ふするも生來の拙劣必ずや此恩  
命に乖違するあらんことを仰ぎ希くは閣下の賢明  
能く寛齋の心境を憫み不敬を咎めず目下の老骨を  
哀んで而して宮内大臣に執副繕旨以て此大任を免  
ぜらるゝことを得ば寛齋の願望亦之に過るなし爰  
に辭令書二葉條項書一葉併せて返上し謹んで罪を  
俟つ誠恐頓首。

明治二十三年十月

森 寛齋

帝國博物館館長九鬼隆一殿

門人山元春舉をしてこの書を携へて九鬼氏に抵りて  
切に之を辭す九鬼隆一更に告げて曰く是れ實に至尊  
がますゝわが國美術を發達せしめその光を中外に

宣揚せむことを思ひ玉ふ有がたき大御心より出たる  
ものなれば之を辭するは大不敬なるのみならず美術  
を愛せざるものなりと品川子爵、北垣男爵その他故  
舊門人どもさまざまに勸めて已まざりしかば遂に勅  
を拜しぬ。

その翌二十四年十月帝室御用品として宮内省より命  
ぜられて絹本双幅蓬萊山の圖を畫きその賞として金  
百圓を賜ひ又御恩石をもて白羽二重一匹を賜ふ蓋し  
特例なり。

寛齋京派の泰斗としてその名天下に高く轟きわたり  
き然れど謙徳を守り自ら謂へらく我が技いまだ至ら  
ざる所ありとて屹々として懈らず。曾て妙心寺に乞  
ふて林良の鳳凰圖を臨寫す時方々に三伏にして流汗  
淋漓たるも更に息ふことなし傍人竊かに笑ふて曰く  
冥途の土産をなして何かせんと特り野村文舉之を見

て大に感むこの老人こそ我が師と仰ぐに足れりとて  
請ふて弟子となれりといふ。小室信夫もまゝ曰ふ何  
時更ふけて寛齋を訪ふも尙ほ燈下に筆をとれりその  
精苦には服したりと。寛齋晩年に品川子爵に贈りて  
曰く我の繪畫に於ける益す學なむで已まざるの念あ  
りといへども餘命幾ばくもなきこそ憾なれ願はくは  
來世には生ながらにして今日までの修得底の技倆を  
有しまた益す學びてこの繪畫を大成せむと。曾て門  
人野村文舉に與へたる消息の中に云へるあり曰く。  
いづれも同じ襟に火打石に松のはへたる圖ばかり  
にて御笑可有之候追付生れかはりたらば新工  
夫も出候へどももはやわかぬ。

驕誇の念あるは尋常の畫家もなほ脱すること能はざ  
る所なり然るを寛齋の如く一代の鉅手と仰がれて而  
かも此の如きは益す歎すべきなり。



客の來りて畫を需る者あれば心切にその欲する所を問ふて後に筆を染め必ず之を満足せしめたりき。ある時にや寛齋は商賈某の囑にて珠め潤筆料を定め屏風に青金泥をもて満月の圖を畫きぬ某曰くこの月は先生に約束せる所より稍や大なるが如し願はく更に此より小形に畫きかへよと寛齋乃ち諾してその言の如く改めぬ門人曰く畫き換へたる金粉の料を求められど寛齋云ふ月の約束よりも大なりしは余の誤なり殊に商賈は牙籌を轉するをもて生計せる者なれば尙しこの畫に豫算以外の料を拂ふ時は畫の善惡に拘らず之に對して心常に快からず心快からざれば樂と云さず然れどもには彼が余に揮毫を囑せし當初の心に反するものなり汝らまた能く心せよと誠めきといふ。又盲て病あり醫師が堅く筆を探ることを禁じたるに尙ほ畫きて止まず門人らその身に害あらむと

て之を諫るも聽かずして曰くこは裝演師某の囑なり彼は余が畫を得て生計の一助とせり徒らに日を過して糊口の道を塞ぐに忍びずとて病を犯して卒業したりき。然れども私意に出るものは肯て道を曲げず寛齋が前年應舉の畫を修する爲めに金比羅に行くやこの裝演師もまた隨行し大に潤益を得たりその後も同社より修繕の事を謂へども老衰の故をもて之れを辭す某之を聞き來り謂ふて曰く先生再び彼の地に行き玉は奴もまた大に幸あらむ先生つひに行き玉はずとならば替り人を遣はしてよと寛齋之を許さず蓋し同派の正流を酌む者なきを以てその名畫を汚さむとを愛ふるが爲めならむ。

き。品川子爵かつてその故を問ふに寛齋云ひけるは世の畫師の多きが中には包を開きその金の多少を檢して後に筆を授る者あり余は縦しや飢寒に迫るも之を爲すこと能はず凡夫の淺ましきはその包を開き潤筆料多しとか少しとかくどきて草々に一掃し去る者最と多しこの輩は繪畫の賊なりとていたく罵りたりけるが後その没後に故舊門人ども集りて遺篋を檢したるに包のまゝにて存するもの三箇あり而かもその未だ畫き終はらざるもの潤筆料を開きたるもの一箇もなかりきといふこは實に品川子爵もまた實見する所なりき。その心の謹めるは後に傳へて世の繪畫家たるもの氷鑑となすべきなり。今日の美術家たる者は身軀壯健にして鬼をもひしき得る底の壯夫にあらざれば即ち不可なりとは狩野芳崖の常に云へりし所なるが寛齋もまた曰ふ今の世若

し子を生めば即ち云はくこの見は弱し須らく畫師かたは醫師になすべしと是れ大に誤れり苟くも繪畫を學ばむほどの者は無病息災の者にあらざれば遂に其の技をして神妙の域に進ましむることを得ざるなりとて子弟の來りてその門に入らむことを乞ふ者あるごとに先づその身軀の健弱を檢したりき。扱てその身軀検査を行ひたる後に汝は畫もて口を糊せむとするものなりやと問ひ若し然なりと云へば則ち曰く繪畫は糊口の技にあらざとて許さず。彼の山元春舉が野村文學の紹介にて弟子たらむことを乞ふや寛齋また問ふにこの事をもてしその畫をもて生計となさむと答ふに及むで呵して曰く速に去つて牙籌を彈き鋤鋤を握るには如かずとて點頭せざりき春舉當時その深旨のある所を悟らず唯々して退き去るにその言を參究して始めて寛齋の老嫗徹悟なることを悟



り此れより誠を傾けて服事しぬ。蓋し寛齋の門人に  
おけるや直に大乘もて救へたるものにて大に世の繪  
畫家流と徑庭するを見る。

寛齋の門人を見ること恰かも嚴父が愛子に對するが  
如く或ひは賞し或ひは規し諄々として救へて倦まず  
之を憐れむの心 尤も深かりきそも寛齋がその妻を  
先立てより二たび娶らず家に女子を容れず。炊事  
の如きは門人等が毎日交替して之を爲し客あれば又  
出で酒に侍せしめ恰かも禪刹にあるが如し室内掃  
除の如きも多くは自ら之を爲し殊に溷廁は常に自ら  
手を下して門人を役せず。門人の病に臥す者あれば  
間ま之が爲めに汚物を洗滌することさへありき。門  
人三輪某嘗て類似虎列刺病に罹るや兼みな嫌忌して  
家を退かしめむとす寛齋曰く汝等憐し之を怖るゝと  
ならば速かに去れ余は老年にして爲すなき者なり縱

のれが衣食の料を減じて之が爲めに紙筆の料を辨じ  
たりき。門下に久保田傳齋なる者あり當時年なほわ  
かくして血氣定まらず狹斜の巷に出入し忽ちにして  
悉く郷里より齋し來たる所の學資を蕩盡し紙筆の  
料にも事を欠き遂に塾中にも居たゝまらず事に托じ  
て退き寺町のある破寺に投じ畫をも作らず僅かに飢  
寒を凌ぎ居りたるに寛齋圖らずも之を探知し一日自  
ら來り問ふ傳齋大に驚き且つ耻ぢしかど今更に包か  
くすべきにもあらねばその此に至れる始末を語る寛  
齋涙を呑みて云ひけるは是れみな汝が誤なり苟くも  
繪畫をもて世を過さむと思ふほどの者はその畫の爲  
めに勇猛の工夫をなしてまた他の榮花を思はず須ら  
く身には紙衣を着て寒を凌ぎ口に精糠を舂めて飢を  
療するの覺悟なかるべからず况いて墨色に耽り荒む  
がごときは尤も惡し願はくは汝その誤を再びする

しや感染するも怖るゝ所にあらざ余寧ろ死に瀕する  
の病者を棄るを忍びむやとて自らその枕邊にありて  
藥をすゝむ衆大に愧ぢ且つその慈愛の厚きに感泣せ  
ざる者はなかりき。

また山元春舉が一とせ脚氣を病み又赤痢續きて發し  
木屋町の下宿屋にありて呻吟するや寛齋は八秩にも  
近きはけしき老軀を覺束なくも杖に扶けられて  
日ごとに來り問ひ藥餌をすゝめ時には手づから汚れ  
たる衣などを洗ひ何くれとなく看護に手をつくし宛  
かもそが生みの子を見るが如し左れば春舉は寛齋が  
この有がたき慈愛に感じ常にうれし涙を病 褥の中  
にしぼりわたりきといふ。寛齋が門人を愛する概ね  
この類なり。

寛齋たゞ門人等が學資に窮する者を見るときは  
双眼に涙を浮めさながら情に堪えざるものゝ如くお

ことなかれとて扇面十枚を購ふて之に興へ汝が得意  
のものを畫き來れと云ひて去りき寛齋乃ち蘇生した  
るの想をなし直に勉強して十枚を畫き終り携へて寛  
齋に呈す寛齋つら／＼見てその中の宜きもの數枚に  
落款せしめ且つ曰く速に龍麟堂に興へよと龍麟堂  
は室町の筆墨舖なり傳齋直に龍麟堂にゆきて紙筆に  
易ゆることを得たりきといふ。

寛齋は門人ども呈する所の月餅の如きも決して自家  
の費用につかはせず之を集めおきて月末には例に席畫  
會を開きて門人をして席上畫を作らしめ時には鈴木  
百年、岸竹堂、幸野棋嶺、河邊御楯、川端玉章、野  
村文舉などを招きて之が批評をなさしめて高點を得  
たる者にはもの／＼賞品を興へその後は主客相混じ  
て酒宴を開きたりき。又毎週一回は門人を會じて繪  
畫論をなさしめ決して缺席することを許さず扱てそ



の腕のあもしろき者には又賞を興へき故に門人どもは豫め書史を閲し古實を探り師の賞に與からむとて大に勉めたりきとぞ。

然れば門人の寛齋を慕ふこと實にその親にもまさりたりき寛齋が荷めの風邪にも門人どもはその枕邊に侍して晝夜眠らずして看護す曾て地震の時も門人等その身の危きは思はず寛齋を擁したりき此の如く子弟が心相孚するは當世にありては希に見る所ならむ。

寛齋の繪畫にふけるや特りその門下の子弟を奨勵したるのみにはあらず總べての繪畫家をして振作せしめむことを謀りたりき。寛齋かつて京派の繪畫の地に墜ちむことを憂ひ元治元年の十一月を以て土佐光文、鶴澤探眞などを開らひて如雲社なるものを結びきこの會は後進の學畫者を啓迪して畫道を研究する

りしかどその京都畫家の融和を念としたるを見るべきなり。

寛齋つねに曰く我六七歳の昔より筆を授り初めて今や八十の今日までも如何なる流離困頓の際にありと雖も一日として畫を作らずといふことなし然あれどもいまだ曾て一頓も我が意にて之ならばと思ふほどのものを作らず是れ全く天賦にも由るべけれども抑もまだ繪の事の容易ならざるにもあるべし故に我は格に入るまでは修業するの心なり格を盡ひたる時こそ卒業とも云ふべけれ然るに此にあやしくも合點のゆきがたきは美術學校の何年にして卒業といへることなり繪畫の技たる中へ五年十年にて能く卒業し得るものにはあらず當世の年わかき人たちの爲す業にはかゝるあやしきことこそ最と多けれど笑ひき。蓋し寛齋のこの言は當世の畫家が僅かに世に售れ初

をもて旨とするものなるが會の始めて起りしよりこのかた例會を開くこと二百餘回にして三十年を経たり然るにこの會には一の社約なるものをも置かず互ひに信義をもて交り道を講じて倦むことなく斯く永續せることは他に類を見ざる所なりとす是れみな寛齋がその監督者たりしに由るなり。

今の鈴木松年は瀟灑にして奇節ある畫家なるが毛ぎらひとも云ふべきにや幸野棋嶺とは交道契はず往來することもなくあよそ十七八年の間更に一語を交ぬることなし岸竹堂ふかく之を惜みて曰ふ同じ京都に時を同じして松竹梅と生れ合はしたるは最とめつらしきことなるに松と梅との契めしめてはこの竹もあもしろからずとて爲めに之を和解せむとするや寛齋大に之を可として斡旋する所ありきこの和解の事たる松年が頭を撞つて肯んだざりしを以て遂に成らざ

ると早くも心に腰を掛るを戒めたるなるべし。

京派の繪畫界にては寛齋の後に到りてその門下の士は更なり他に青年の畫家濟々として出でめでたき製作も多く作られて優に東派を壓するに足るものあるに至れり是はまた寛齋などが元治以來直接間接に啓迪したるの賜なりけり京派の畫家はその派たる他派とを問はず概ねみな寛齋を推重するもまた宜なるかな。

忽にして巖 開忽にして巖 穴忽にして洞 林奇くも一藝一能ある輩にはみな之と往來しその交通のものも博かりしは寛齋なりき蓋し寛齋の人品最と高くして襟懷の水よりも清かりしが爲めに一たびその手神に接したる者はみな評々として捨てがたきの感ありしが故なるべし。

その交遊の多きが中にも近衛老公、山縣侯爵、品川



子爵、伊丹重賢、天龍寺義堂、本願寺嚴如、本願寺光尊、小室信夫、谷鐵臣、富岡鐵齋、北垣國道の數人はわりなく契りたりき。

品川子爵と始めて相識りたるは遠く尊攘論の熾盛を極めたる時よりなるが以來四十年の久しきその眼を塞ぐまで常に音問を絶たざりき品川子爵つねに曰く今もなつかしく我が心に忘れがたきは寛齋翁なりけり翁は我をそが子の如く思ひたりき我もまた翁を親の如く思ひぬとその相得たるものよのつねにあらざりしを親ふへし寛齋かつて木屋町二條なる井上伯爵の別邸（今は川田子爵の邸となれり）に假寓す寛齋云ふ是れ一時の腰掛なりとて匾題をその居室に掛けて一時館と云ふこの時戯に今様歌をもので曰く。

春は梢になく黄鳥。夏は高潮に鳴かはず。あはれ

をこそ友千鳥。雪のあしたのかん酒は。すこしぬるても大事ない。

寛齋之を子爵の獨逸國に在るに寄す子爵直に之に酬みて曰く。

・三千里外の旅寝の枕聞くも戀しき一時館。

この贈答は一時人の話柄に上き山縣侯爵たま〜聞きて奇となしこの四季今様歌を讀題して四幅對を作らむことを囑す寛齋乃ち病を力めて書きぬそは春に梅に鶯。夏に青楓の下に畫顔と水邊に蛙。秋に月に七草と蟲。冬に雪もつ松に數相子その根べに千鳥の四幅なりしが筆力壯年の作に譲らざりきと云ふ。また二十四年に品川子爵が一贈して内務大臣となるや寛齋之を聞き直に一首の俚語を寄す。

何事もいけでの森のフン郭公かけておんじているわいな。サコリヤ〜。

思召厚きふとんを打冠り

冬はいづこと萬夜やねん

我が子の如く思ひ居たる子爵が忽ち變理の盛職に上りたるを惜ひ而かもまたその失墜なからむことを祈りたる心情の自ら文字の上に溢るを見るなり。品川子爵の寛齋を見ること此の如く厚かりしかば夫人もまた自づと寛齋に對すること恰かもそが奥氏に仕ふるが如くなりき夫人かつて子爵と共に寛齋の病を問ひたるをり寛齋が最と破れて垢つきたる衾にて臥せるを見て情にふかき夫人とてさすがに見かねたりけん直に書林田中文求堂にあつらへて好き衾を織たてそを寛齋に贈りたりきこの時寛齋の書に曰ふ。

拜領のふとん四枚昨日文求堂より爲持遣一候正に難有頂戴仕候先は不取敢御受御禮まで如此に御座候奥様へよろしく奉願上候。

品川様

寛齋

品川夫人かつて寛齋に囑するに四季の月を畫くことをもてす寛齋いふ他の畫に至りては君がのぞみたまふものを作るを辭まざると雖も四季の月の如きは今や腕衰へて君が心になふほどのものは作り得べくもあらずとて之を謝しぬ夫人いふことは多くの人に見すべきものにはあらで妾が室中に掛けて獨りにて眺め樂まむと欲するものなればさまでむつかしきものを作りたまはずとも事足りなむ願ふは之を畫きたまひてよとあるに寛齋もなほ辭むべきにもあらねばより〜思を拂へたるが扱てあもしろき意匠もなく過ぎ去りき。この後夫人たま〜病に臥しつれ〜なるまゝに曾て寛齋に囑みたる四季の月の畫のことを想ひ出し時〜子爵に向ひて寛齋先生はいまだ四季



の月をあくりたまはすやなど問ひけり子爵乃ち書を  
寛齋に寄せて夫人が四季の月の成るを待ち戀ひつゝ  
あるよしを告げたるに寛齋大に感じたるにやその書  
を見るや直に筆を染め四季の月を四幀に畫きて夫人  
に贈る夫人最と惜びてその室に掛けその永眠するま  
で之を此上なき唯一の樂となしたりといふ。

また近衛老公、伊丹重賢などは元治以前より知り  
合ひ共に國事を議したりき谷鐵臣もまた維新前より  
知りたるが義正社を結ぶにつきてますます親密を加  
へたるなるべし小室信夫に至りては維新以降十餘年  
間南畫のはびこりたる時に當りて常に米鹽の資を贈  
りて乏しからしめざりき實に寛齋をして飢寒の間に  
死せしめざるもの一にこの信夫の恩なりしかば寛齋  
は知音として恩人として最も信夫を徳とし常に門人  
どもに信夫の厚誼を語りて已まざりき腐史いふ心に

に涼風徐るに來りて絃上微妙の音を發し人の心竅  
を洗ふがごとし是に於て寛齋始めて風琴の稱あるこ  
とを知りき後京に歸るに及んでまた之を屋上に置く  
に音て海上に聞く所の音と異なることなし三味線を  
もて之に替ゆればその音錯雜にして聞くに堪へざり  
きといふ。

寛齋は繪事および風流酌事に屬する技藝にのみ妙を  
得て武士たる者の表藝たる武術は學ばざるかと云ふ  
に決して然らず劍および槍なども皆之を能し頗る人  
に敵するに足るものありきとぞ是れその世の繪畫家  
流と異なる所以なり。  
酒に至りては寛齋の性命なりけり朝晝晩の三食とも  
酒を飲み客あればまた必ず斟酌して古への忠臣義士  
の事跡を談論し或るは古畫畫を品藻し座上客常滿、  
樽中酒不空の概あり。殊に月の一日には故舊門人は

合して行に合ふと此等數人との交道を見なば寛齋が  
人品の如何を知ることを得べきなり。  
一處透れば萬處皆透る尙し能く一事を參究して因地  
一聲を得たらむには他の事に於ても悉く會し得ざ  
るものなしとは古賢の云ふ所なるがその證はしは  
之を名匠の中に見る寛齋繪事の餘嗜む所多く往  
々その奥を究めたりき。

寛齋年わかき時律呂を烏丸佛小路の樂師神田氏に學  
び笙および笛はその許可を得たり又一絃琴、三味線、  
一節切をも嗜みたりき。そが中にもわきて一絃琴を  
愛でたり然るにこの琴は支那の風琴と云へるものと  
同じ類なりと聞きけるがその然る所以をも知らず年  
を経たるに十六年の秋たましく金比羅の相きにて讚  
岐に渡るをりまたこの琴を携ふ時に月明なりしかば  
之を敷して興を助くやがて敷し罷て之を絃頭に置く

更にもいはず酒、米屋、薪屋の如きに至るまです  
べて日頃その門に出入する所の番頭どもをも呼び集  
めて大酒宴を開き三味線大鼓にて大騒をなし寛齋自  
らも三味線を弾きて一日を遊び暮すを例したりき  
這般またその爛熳たる天真を見る酒を嗜む者多くは  
茶を嗜まざれば寛齋はまた茶を好みてその燕室の中  
に爐を切り常に趙州の古味を搦しぬまたその爐中に  
炭を點するに出岳に擬し斂法を正して樂む。

唯だ寛齋が嫌ひとも云ふべきは女子がべちや〜醜  
舌することなりき然れど時には老妓を集めて遊ぶこ  
とあり大石忌の時などは祇園の一方亭に遊び義士の  
行 状などを畫きて歌妓に興へたりき。  
寛齋は此の如く多愛なりけるが毎朝先づ抹茶を一二  
椀を啜りて餘醉を洗ひ然る後に長槍を攪り之をしど  
きて勇を敷し或ひは深夜孤灯の下に秋水を閃かし勝



一陽す。或ひは月下に笙または一節切を吹き一絃琴などを敷し神清みたるに乗じて筆を授る或ひは夕陽傾く頃には橙の雀に餌を投じ群集して飛舞するを見て阿々大笑し之を怡ふこと恰かも小兒の如し。蓋しその人と爲り時としては尙ほ用ふべきを示す老將軍の如く時としては火食せざる巖穴の道士の如し。

練素の上の山水もまた能く人の心神を養ひその眉壽を介くとは泰西美學者の言ふ所なるが古來繪畫界の名匠多くは長壽なり實に然る理りありてや寛齋わかし時より雨に沐し風に櫛りさまざまの辛酸を嘗つくしてそが心身を勞したるにも拘らず古來稀なりといへる七十も恙なく過ぎ來りて今や八十とはなりぬ蓋し寛齋は強壯魁梧にして身體最と健なるをもてかゝる長壽に上りたるなるべしと雖も抑もまた練素の

山水がその眉壽を介けたるにも依るならむか。寛齋白首皤々として畫を作りて已まらずいまだ曾て一日も筆硯を廢することなく杜少陵が丹青引に謂はゆる丹青不知老將至、富貴於我如浮雲の句は直に移して以て寛齋を評すべく實に曹將軍の風采あり。されど新白髮をもて蒼青山に對しては轉た感愴の念の起さるるにあらざり八十歳の時その髻を垂れて雁島に戯はしことなどを想起し筆をとりて小兒二人が相戯るゝ圖を作りそが上に題して曰く。

雪やこんこ靱や紺の前だれにうけてたはれし昔戀しも。  
思ふにこの圖はいはけなき頃有地合章と遊びしことを思ひだしての事なるべし。

二十六年は寛齋誕生より八十年に相當するを以て故舊門人ども相謀り八月六日を以て八十の賀筵を京都

博覽會場に開くこの日會する者近衛老公、蜂須賀侯、品川子、伊集院子、北垣男、伊丹重賢、中井弘、毛利元昭、大谷光尊等を始め五百餘人の多きに及べり博覽に斯の如く多くの人士の會したるは古來殆ど例なし此を見ても寛齋が如何ばかり世人の敬慕する所たりしかを知るべきなり。

この歳の十一月下旬に至りて寛齋たま〜感冒に罹り肺炎また併發し遂に褥につきぬ寛齋の病むや品川子爵來りて之を問ひ且先生の家はた誰をもて之を繼がしむるか今に於て早く之を定めよとその言最と懇なり蓋し子爵はその名家の後を絶たむことを憂ひたるが爲めなるべし寛齋曰く我に一女ありしが夙に之を工學士に嫁し今は門人雄山を養ふて子となせり我に畫孫あり肉孫のなきを愛はず繪畫に屬するものは悉く擧げて之を雄山に傳へその他の物は甥なる石

田常之助(今は京都府の屬官たり)に贈らむのみと子爵乃ち曰く先生の家繪畫に屬するものを除けば貧乏徳利に破杯のみならむと笑つてやみぬ。

寛齋病に臥してより門人等はこの年の内にもむつかしかるべしとて日夜その枕邊に侍して介抱怠らざりしが元來寛齋は強健の性にしてアンチヘンリンの如き劇藥にも能く耐へたる爲めに日々に快く十二月の中頃に至りてその病褥をたゝみぬ。

明れば二十七年の春なり元旦には庚午に因みて春駒の圖を畫きまた梅花先春の御題にすがりて早梅を畫きその後彌々自ら適して閑日月を樂むやがて彌生の春にもなりて櫻花咲ひ初めたりしかば一枝を手折りて瓶中に挿み半紙小切に一句を題して櫻の枝に結びつけたり曰く。

やう〜に春もと〜なひひち枕



この時は俗に云ふ所の中日和なりしとは後にぞ思ひ  
あはされける。

この月京都地方裁判所判事小室権爾來りてそが父の  
八十四歳を賀する爲めに蓬萊山の圖を畫かむことを  
囑みつ小室氏の父は寛齋もと共に國事に奔走したる  
人なりければ心よく肯なひ直に筆をとり四月三十日  
をもて卒業すこの圖には十五日ばかりの日支を費し  
たりと云ふ是れより先き品川子爵は寛齋が八十一の  
年賀にとて陶器の印材に練筆をもて八十一翁寛齋と  
刻して贈れり嘗て用ゐることなかりしが始めてこ  
の陶印を蓬萊山の圖に捺せりと云ふ。

五月に入りて作りたるものは補公が萬里小路公と會  
談するの圖なりこの圖こそは一代の名匠が最後の形  
見として世に遺したるものとなりしこそ最と悲しけ  
れこの圖今は尊攘堂に藏せり。

五月中頃に及びて天候不順なりしが爲めに寛齋の舊  
病再發し加ふるに喘息の嚴しくして藥石も遂に効を  
奏せず唯だ褥中に困眠するのみなりしが越えて六月  
二日の午前九時に至りて果なくもその歿を易ふ故舊  
門人四方より走せ集り四日を以て遺骸を身いて靈山  
に葬りぬ。

寛齋の没するや品川子爵直に來りて後事を經紀しま  
た故舊門人どもを立合せてその畫印に封を加へたり  
是れ技見のその畫印を偷みて贋作に捺す者あらんこ  
とを憂ふるが爲めなりき品川子の寛齋に於ける洵に  
能くその交を全ふせるものと謂ふべし。  
そも寛齋の畫に於ける世の藏家たる者みな推して  
一代の名匠となせるを以て今更に饒舌を弄するを須  
みず唯だ外國審美學士の月旦する所のものを此に示  
さむ米國フェルノサ氏の京都に來るや京中の畫家と

勸業場に招集しその見る所について日本の美術を

論じまた當代の繪畫家を評して曰く當時日本畫家の

多きが中にも意匠斬新、筆力雄渾にして而かも日本

古名匠の作すこと能はざる所の設色を作して泰西の

古名匠をも瞠若たらしむるものは實に狩野芳崖唯だ

一人ならむまた圓山派の神に入り殊に山水を作りて

應舉よりも神韵高きものを舉れば唯だ森寛齋なりと

こは野村文學が親しく聞きて余に語る所なりき。こ  
の言を以て寛齋が繪畫の折紙となすに足るべし。  
また寛齋が出處大節に至りては赫々として人の耳目  
を照破する所たり寛齋の三回忌追福會を修るに當て  
品川子爵爲めにその肖像に題して曰く。

天將ニ廉潔ニ鑄ニ肺肝。又授ニ丹青ニ發ニ厥眞。志在ニ勤

王ニ親ニ名士ニ畢生愛。酒安ニ清貧ニ二十七年八十一。  
蓋ニ棺ニ三回逢ニ忌辰。警暖彷彿猶在耳。昨非今是淚

満巾。紛々世上丹青手。未見清廉如此人。  
道箇數字の贊語はまた實に寛齋が人品を定むるに  
足るべき折紙と爲すべきなり。

### 田崎草雲

渡良瀬川の水浴々として上州の桐生より來り小俣を  
經て斜に淺間丘を抱きて走り淺間丘の双尖淡翠洗が  
如く水を隔て、織姫、兩崖の二山と相掛し恰かも一  
幅米元暉水墨の圖を披くが如し織姫山の麓渡良瀬の  
瀨に邑を成すものあり足利町これなり。  
足利の町面積周圍三里三十二町三十間、東西一里五  
町、南北一里三町二十間に達し戸數四千五百六十六  
戸、人口二萬三千八百四十九人を有し商賈往來し炊  
煙盛に上りまた山間の一繁華をなす。  
舊記を綜ぬるに足利は三變したるもの、如し。上古



は姑らく措きて言はず中古は文學をもて著しく少し降りて武を用ゐるの地となり後つひに工業の地となりぬ。天長年中參議小野篁勅を奉じて足利學校を再建し孔子の廟を設けて春秋釋典を行ひ東國の子弟を教導し彬々としてまた盛なりき。平安の朝に至るに及びて下野大榛藤原村雄の子秀卿身を足利に起して城を南崖山に築き自ら下野押領使となれり是れ即ち藤姓足利氏の鼻祖なり以來その子孫行房兼行、成行、家稱等累世その業を襲ひ東國に雄視したりしかど仁安中事に坐して足利の庄を失ひその孫忠綱が自刀するに及びて藤姓足利氏遂に仆れ源姓足利氏之に代り新田冠者義重より子孫之を受け尊氏に至りて遂に起て天下に霸たり足利氏亡び北條氏、豊臣氏を経て徳川氏の天下となりてより足利は代官領となり後また土井氏、本多氏、秋元氏等の分封地に屬せしが實

永二年二月戸田氏三河より移りて此を領して明治の維新に至りぬ。徳川氏の世となりてより三百年間の昇平は上古の謂はゆる足利の於里加毛なるものを發達せしめ機業家八百戸の多きに達し三萬餘人の職工を畜し織物一年間の産額輸出向一百十九萬一千七百八十六疋内地向六百三十七萬五千五百六十一疋、合計七百五十六萬七千三百四十七疋その價格一千七百五十六萬八千五百二十四圓の巨額なりといふその工業の盛んなる日本國中に在りて二三位を下らざるなり。此くの如く足利は文學時代、武略時代を經過して工業時代に移りその工業の盛を極むと雖も昔時の文華は悉く銷し去つてまた見るに足るものなし世態の變遷もまた太甚しからずや。文化の末に至りて天忽ち一偉人を下して兩毛二州の

文武を奨めまたその入神の繪事はわが丹青天地を輔敵したりきその人は誰ぞ曰く田崎草雲實にその人なり。

足利町の西に一小丘あり怪巖落々として相重なりて巖を自ら倪家の皴を描き老松垂柳その上に生ひ芙蓉、胡枝花、鴈蜀花などその間を點綴し幽味掬すべしまた深潭碧を湛へて丘の麓を繞り自ら人間を隔つるもの、如し丘上、矚目尤も佳く南は附して渡良瀬一帯の水を眺み遠く甲武の諸峰さては赤城、妙義、榛名の山々一起一伏して波瀾の如く赤た一方壘なり丘の稍や平なる處に數椽の茅屋あり是れぞ即ちわが田崎草雲の白石山房なり。

そもこの丘もとは榛奔地を掩ひ狐狸を棲ましめまたその側なる沼の如くなる處に千年の大蛇棲めりとして郷人みな避けて行くことを取せりしが草雲ひとり

笑つて曰く我此に居るに何の怖るゝことやあるべきと維新後官に請ふて之を購ひ開きて山房を繕しそが養老棲遲の處とばなしたるなり。草雲人と爲り魁梧にして身の長六尺に及び臂力人に過ぎ磐石稜々として人を照らし顔貌尤も凡ならず自づからなる威風具はりたりきといふその人即ち想ふべきのみいでや此にそが遊戯三昧を誦らむかな。田崎氏もど本姓を羽山氏といふ世々下野國上都賀郡眞名子村に住みき恒藏なる者に至りて足利藩に筮仕し江戸小川町の藩邸に住ひて二人扶持を食み始めて田崎氏を名のりぬ是れ即ち草雲の父なり。恒藏妻を娶りて二女を擧げ次で草雲を生みぬ始め草雲の胎にあるや恒藏夫妻密かに相謀りて云ひけるは我等僅かに二人扶持の小祿のみにて一家四人の口を糊することさへも最と苦しきかぎりなるに今また一



人増したらむにはこの上の困苦はあるまじきぞ下世話にも言はずや小の蟲を殺して大の蟲を活すと洵に憐れなることにはあれど汝が胎内の見は闇より闇に遣るより外に方便もあらじとあるに妻も悲しき極みには思ひしかど扱て之を助くる便りもあらねば泣く／＼領づきつ恒藏さらば早く之を脱さんどて密かに御成街道なる鼠屋に走りて黄王散といへる脱薬を求めて歸る途すがら偶々脚下に白き一物の落ちたるを見て之を拾ひ上ぐれば即ち基石なり恒藏心に考へけるは白の色たる陽なり今日圖らずも之を得たるは胎兒は男なりとの兆ならむか男兒ならば扶持を得るべければ育て立るもさまでむつかしき業にもあらずとて路に黄王散を捨てたりきとこは草雲が自ら門人等に頼りし所なり。倘しこの藥を服したらむにはわが國の名播傳中に一人を減じたりしならむ最とあやう

きことなりき或ひは云ふ草雲の母一夕夢に白石を呑むと見て幾はくもなく孕み心安からず思ひて脱薬を服したるにその効見えず草雲恙なく生たりきと是は傳ふる者の誤なり。草雲は幸にもかゝる厄を脱れて闇にも行かず文化十二年十月十五日を以て恙なく呱呱の聲を江戸小川の藩邸足輕長屋の中に擧げぬ恒藏夫妻の喜び喩へむ方なく基石の瑞に因みて名を命じて瑞白といふ。この時は徳川の威風久しく天下を靡みして民みな泰平を樂み江戸にありては寫山樓文晁は文麗の門より出で、南北を折衷して一派を開き初めて門戸を張り或は南華庵抱一は明畫を以てし或ひは一陽齋豊國は美人畫を以てし或ひは北玉段藤珉は蠟形鑄物を以てし或ひは文晁、寛哉の兄弟は摹古の漆工を以てし或ひはその妙腕を振つて江戸の美術界を賑はしたる

の時なりき。

草雲やうやく長じて六七歳に至り近隣の兒童と遊ぶにその瑞白といへる名の醫者らしくして士流の子には似合しからずなどいひて笑はるゝまゝに己れも太古その名を耻ぢ頻りに恒藏に迫りてそが名を改めむことをもてす恒藏乃ち爲めに頼助と改めきそは天寶に頼るの意に取りたるものなりといふ。然るに同藩中に同音の名の者あるを知り更に恒太郎と改む時に年甫めて八歳なりきといふ。

草雲は天性強健にして膂力も最と強く儔輩に優るまゝに好んで武技を學びて怠らざりしが夙性のあるにや深く繪畫を好み暇あれば草木禽獸の形象を作りて此上なき樂となし時には淺草寺の觀音堂に抵りその繪額などを見て之を摸し日を暮すことさへありしかば恒藏之をうたてきことに思ひてをり／＼は嚴し

く叱することもありしかど中々に止るべくもあらずりきといふ。後來に至りて入神の技をもて名を轟かすの兆は實にこの時よりぞ早くあらはれたるを見るなり。

この時に當りて谷文晁の名ます／＼噪きその壽直の性は高く自ら標して膝を王公朱門に向つて屈せず天下の畫を學ぶ者みな禮してその門に趨りて教を請ひ市を成せり草雲乃ちまた束脩を修めぬ。草雲かつて客に語りて曰く「文晁の家へは五六回往きたるが肥え太りたる老爺にて油紙をもて楹端に日晷を掛け常にその下に畫を作りき少しく遅く行く時は酒に酔ひしれて何事の爲めに來りしぞなどいひ叱しその畫論を聞くこと能はずその家は恰かも茶屋の如く碁を圍む者あり酒を飲みて小話を歌ふ者あり席上合作をなす者ありその幾十人なるを知らず之は多くは諸侯の隠



居たりき」と。之もて見れば草雲の文界にあける儘かに束脩を修めたるに止り深くその遺奥を叩くこと能はざりしもの如し。

草雲すでに成童に達するに及びて母ます子かりそめの病にて身まかり次で繼母に仕へたりしがこの繼母の連子に男一人ありて家庭の中また元の如く暖ならずして風波の絶ゆる間もなければ草雲とかくもしるからず日を送りぬ。

やがて冠 弱に至りて身の丈も高く臂力飽くまで強く頗る武技をも究め押しも押されぬ一人前の丈夫となりければ客氣のつと盛にして膝を容るゝばかりの足輕長屋の中に熾り居り得べきにもあらず父の後は繼母の連子賢三なる者に家を繼がしめよなどあらくと書のとし一夜竊かに行李を脩めて藩邸を逃れいでぬ時に草雲の年二十一にして天保の六年な

りき。父恒藏の驚愕云はむ方なく直に走りて日ごろ草雲が最もわりなく暗らひし川上重右衛門に告げつ重右衛門は藩の重役にて後には御留守居役をも勤めたるほどの者なるが常く草雲の材のよのつねならずして行くは藩政の相談相手とも成るべくと最たのもしく思ひて何かと草雲の爲めに謀りたるに今忽ちその失踪にあふて失望すること限りなく恒藏を警して江戸市中を始めとし近國を尋ねたりしかど更にその跡を得ずしてやみき。抑も草雲の脱藩せしはそが家庭の中のものもしるからざるの事情のありしにも因るべけれどもそれは草雲が脱藩するほどの因由にはあらず元來足利藩は僅かに一萬一千石を領するのみの一小藩にして家老上席に陞るも九十石に過ぎず士卒の江戸邸に在る者合せて六十人、足利に在る者三十人餘、人夫を加ふるも總べて百十餘人に過ぎず

して大なる百姓一揆さへも持て餘すほどなれば素とより天下の大事に當るに足らざるのみか當時の制として家老の子は才能なくとも尙ほ家老と成り足輕の家は才能ある者出るもまた足輕にて斗升の米の爲めに相伸して奥前馬後に馳驅して可惜許一生を終らざるべからず然れば草雲いかで空しくする境遇に甘んずべきその脱藩したるは實に行潦を去つて天池に入らむとしたるものなりし。

草雲藩邸を脱し心に考へけるは我暫らく江戸を去るに如かず初て東せむが西せむか京極は尋常人の行く處なり我むしろ多く人の行かざる奥羽に遊ばむと決しけるがその路費なければ如何にかせむと日ごろ心知りあひたる一僧を訪ふて暗るに心事をもして且つ路費を得るの策を求む僧の云ふ所も樹下石上の身なれば財物の子か行路を助るものなし唯だ一策あり

それは奥羽に博徒嘉藏なる者あり任俠をもて東國に名あり所この者を知ること久し子もし所の書を携へて行かば或ひは方便あらむその地に着くまでは書を售るもまた可ならずやと草雲乃ちその書を抱き東なくも東に向つて行く。講武の餘暇を偷みて繪畫を學びつゝありし草雲は今や繪畫をもて奥州に達するまでの路費を得ざるべからざることとなりしかば書を傾けて筆墨さては繪具などを求め途く田舎の繪畫を好む家ありと聞かばその人を馴ひ一枚二枚の小切に筆を染めて潤筆料をとたのみつ然れども多くはその年わか殊にその服裝の揚らざるを見侮りてその畫の巧拙は問はずばかる所は僅に草鞋錢に止まりしかばその困頓いふばかりなくやうく命一つを拾ひ物にして嘉藏の家にとたどりつきて書きたる僧より與へられたる繪畫を出し



て調を求む家人乃ち出て面し即今主人は他に行きて  
 家に在らずされど留まり玉へて之を一室に請じ最  
 どねもごろに之を待し酒は飲むに任せ肴は食ふに  
 任かせ恰かも珍しき嘉寶に接する如くなれども嘉藏  
 のみは更に面せず三日ほど経へ出て曰く子は自ら書  
 師なりといへど長刀を佩びたる様といひ繪畫の器の  
 皆新なるといひ到底書師と見うくること能はず思ふ  
 に子は穩密ならむ我も今は年老いて博奕を止め「口  
 き」を業となせば穩密なりともつゆ怯るゝことな  
 しと蓋し草雲の服装のあやしき様なるを以て夜中竊  
 かはその行李を検したるものなるべし草雲いふ否な  
 く「我は足利藩士なれど志ざすふしありてこのたび  
 一書を遺して藩籍を脱したる者なり繪畫の器物の新  
 しきは路費を得む爲めに書を售らむとて江戸を出る  
 時に求めたるものなり足下の疑は理りあるに似た

れどみな當らず嘉藏いふ子如何に巧に言ひのがるゝ  
 ども我は信ぜず子の携ふる所の漆書も全く彼の僧の  
 書様と違へり思ふに我を欺かむ爲めに贋作したるも  
 のならむとて僧が三年前に寄せたる書を出して示し  
 つ草雲曰くその疑もまた無理ならねども彼の僧は  
 常に筆札を學べるを以て三年前とは大に違へりと言  
 太た力む此において嘉藏やうやう疑を解き心あき  
 なくもてなし十年の舊相識に對するが如し。嘉藏さ  
 て子今より那の處にか遊ばむとするぞと問ふ草雲答  
 ふるに奥羽を究めむとするよしをもてす嘉藏曰くさ  
 らばこの行は止めよく子は日ごとに多くの人が括  
 をかぶりて我が家の前を通るを見ずや今年五穀登ら  
 ずして食なきが爲めに彼等はみな國越するなり子此  
 より束するも食なけむ奥羽の遊は今その時にあらず  
 須らく西に歸るを可とすと草雲乃ちその言に従ひ厚

く謝して嘉藏の家を辭しぬ。

草雲は嘉藏の家をいで渡頭に到りてとある茶亭に  
 投じて舟を竣つ偶々行客三五人茶を呑み菓子をつま  
 みて雑談しつゝありしが一人あり草雲を見て馴々し  
 く問ふて曰く殿は何流を遣ひたまふやと蓋し草雲を  
 劍客と見たるものなり草雲我は劍客にあらず書師  
 なりといふ時に茶亭の女房この言を聞きそれこそ幸  
 なれ小兒の眼病を祈りたる「願はたし」の爲めに「こ  
 んせい大明神」に献納せむと欲して作りおきたる額  
 あり此に一筆染めてよとて額をそが前に据えて囁み  
 つ草雲これもまた旅中の一興なりと思ひ心安く筆を  
 どりて一人の男か懸せる女のもとに通ふ様を畫きた  
 るに行客ども皆手を拍つてその妙を稱す女房最と悦  
 びそが謝儀にとて銀錢二串を出し草雲は之を辭し  
 たりしかど聞かれざるより受納めて舟に上りきとい

ふ是れ草雲が他より書きたのまれたるの紀念として  
 老後つねに門人等に語りたる所なりし。  
 明れば天保七年なりこの年は天災ますく「豫りて五  
 穀登らず餓死する者太だ多く人心洶々として安から  
 ず實に大鹽中齋が勤民勤王の爲めに身をもて天下に  
 先んじたるの前年なりければ中く小切に書を作  
 りて世をわたり歩き得べきにもあらず草雲もどより  
 路費の時もなければ大に途方に暮れたるが大丈夫  
 一たび所志を書のこして脱走したる身の今更あめ  
 く「藩邸に歸ることもなしかたくなに下野眞名子の  
 宗家羽山氏の家にたどりつきつ。食客たる草雲が日  
 に「臥て遊び暮すべきにもあらねばその手傳の爲  
 めにとて野に出て稻などを運びつ或る日の事なりし  
 が馬を曳て若干町ある地へ稻を運びに行き通常人の  
 一日に八九回より上は往復しがたきを十二回まで往



復したりき乗みな驚きさすがに江戸の人は強しといひき。次ぎの日もまた馬を曳いださむとするに馬横に仆れて底より出でず蓋し昨草雲は行くには馬に乗り鞭をわてし飛ばし歸るには多く稻を積みまた飛ばせて行きたるを以て馬も疲れたるなり果ては昨の強かりしもまた理りなりとて大笑となりぬ。またこの家の近傍に小山ありて小鳥多かりしかば消閑の樂にどてをりく鐵砲を擲て遊びき初めて行きたる時高き崖に俯ひ上りて山鳥を見つけ之を打たむと木の股をなせる所に鐵砲を載せて之をねらふに便りわしく知らずくめとしさりして崖より逆まに落ち鐵砲は空を打て發火す草雲は身を傷けて歸りけるに家人等銃音聞えたりさては獲物ありしならむなどいふ草雲しかくなりと告るに家人等また吹いだして笑ひきとらふ。

燃ゆるが如き功名心をそが胸底にたゝみて空しく跡を遺藪の中に没し耕夫樵者と伍をなして心ならずも日を暮らしつゝありしも争かで能くその久しきを堪えうべき數閱月ならずして草雲この處をすて、江戸に歸りき。思ふに草雲の心には八百萬石の將軍の膝下たる大江戸の中にありては豈に一人の口を糊すべき方なからんやはと自ら思ひ定めて江戸に歸りたるならむ然れどこの時の江戸の様は大に草雲が田舎にありて考へたるを違ひたりき。そは丙申より丁酉と移りて諸國の飢饉ますく太甚しく到る處に餓死者路に載ちたりき草雲この時の江戸の状を語りて曰くこの時の飢饉はそこにも行樂ありこゝにも行樂ありといふ様にてこの頃町の辻などに屋臺店を擧げて大福といへる餅を賣りたるがその店の前には六尺棒を備へたりそは餓へたる者が來りて餅を取らむとする

こと多ければこの棒もて打て逐はむが爲めなりきとその飢饉思ふべきなり。この時に當りて大阪にては中鹽大齋が青天に霹靂を起して天下の肉食者を驚醒し北越にては平田大齋の高足たる生田萬が豪富の庫を發きて窮民を賑恤するなどその報日夜喧して人心洶々として騒ぎ立て天下今にも大事の起らむとするものゝ如しかる世の有さまなりければ中くこれの身を寄すべきの處もまた口を糊すべきの方もなくてさすがの草雲も大く困じたりきといふ。

徳川旗本の隠士に加藤梅翁とて好で梅を畫く人あり老後川崎の大師河原に住ひたれば川崎梅翁ともいひたり北宗より出で、寫眞を用ゐたるが白紙へ雪中の紅梅など中く能く寫し得てももしろし然れど時の嗜好に遇はぬにや世にもてはやされずして終りぬ。時に人ありたましく梅翁が筆硯に侍して用を足

すべき僕を探し居れるよしを聞れる者ありしかば草雲そは願ふてもなき幸なりとて故らに囑みて門人としてそが家に住み之れより號を梅溪と稱し師家の用を執るの暇を窺ふては六法を受けつ。

草雲はもと繪畫をもて業となさむとしたるにはあらざそは性の好めるまゝは講武の餘事之を學びたるに過ぎざりしが梅翁の門に入りたるに及むで始めて畫師となるの因をなしぬ。

草雲の梅翁の家にあるや或る年の元旦に師と仰ぎたる谷文晁を訪ふ文晁曰く聞く汝今は梅翁の門に在りともまた梅を畫くことを學びつらむ須らく余が面前において試に一頓を作れと草雲乃ち文晁の命するまゝに之を畫きけるに文晁一見して云ふ汝が手もて作る所の伎倆は此に止るのみか此しきものならんは余は脚にても能く作るべしとそその畫を抛ち阿々大笑し



てそが燕室に入り去れり草雲この言を聞きて憤に堪えずしはばしは拳を握りてその後を睨みつゝありしが偶々床上に書神を祭り造酒を供へたるを見て之を飲み盡し大聲にて今に見よ汝に優るほどのものを作りて見せむと席を蹴て歸りき。文晁乃ち直に一書を金井烏洲（今の金井之悲の父なり）に寄せて曰く梅溪の奇氣愛すべし決して凡骨にあらざる後必らず成すことあらむ足下須らく梅翁に囑するに能く彼を接することをも以てせよと見るべし文晁の一擲は草雲を激發するものなるを文晁が爲人の手段また老婆微細なりと云ふべし。草雲のち烏洲にこの文晁の書をこひうけ装演して常にその書室に掛けたりしが後門人の請ふにまかせ與へたりと云ふ。

草雲は文晁の一擲にあひて大に憤を發し自ら謂へらく我もまた堂々たる大賢丈夫ならずややはか一代の

鉅手となりて文晁の面を見かへさずしておくべきかと勤めて元代名匠の古蹟に規仿すること六七年頗る自得する所あり此ならば我一人の口を糊することも決して難き業にもあらざるべしと思ひたりしかば天保の末年をもて淺草の山谷堀に膝を容るゝばかりの小屋を借りて筆硯を安じぬ。

時に江戸にありては梅椿山が翠山の門より出て輝南田の筆意を以て花卉翎毛を作り菊池容齋は狩野圓乘の高尺として世に稱せられその歴史畫に於ける一生面を開き高く旗幟を翻へし或るは高久隆古が翠山、一蕙、竹谷等に學ひ後自ら遠く覺融を規して一派を爲し或るは佐竹永海の如き狩野晴川の如きものゝその長ずる所を以てその名藝苑の上に噪ぎたりき。

今もむかしもかはらぬは貴耳賤目の世のならひとて唯だ名ある者の作といへばひたふるに享拜して多く

の潤筆料を惜まされどもその名いまだ普れく知られざる人のものはその技倆の巧拙を問はずして願みざるの様なれば客の紳素を捧げて草雲の門を叩く者あるなく豫ねて思ひたる所と太く違ひてその因順實に太甚しく朝な夕な煙をぬぐることも最とむづかしくなりければ今は詮方もなくて心ならずも愧を忍びて或る團扇屋にたのみ團扇の下書を作りまたは仕入漢などに筆を染めて二百二百の工錢を求め辛くも飢寒を療しつ。その心中のくちをしさ如何ばかりなりけむ今思ふも最とあはれなり。

たましく入あり草雲が年わかき畫家としてなみくならぬ妙腕をもちながら世に售れずして窮途にあるを最と氣の毒なることに思ひしみて爲めに諭して曰く子は實に未だのもしき伎倆ありて今の世に時めく者の作よりも優りたるものあれどその畫は世の嗜

好に適せざるを如何せむ今や江戸にて専ら行はるゝは高久隆古なり子は心よくおもはずとも枉げて隆古の風を畫きたらむには子一人の口は安々と過すことを得べし之もまた予が世に出るまでの方便ならむと草雲この言を聞きていたく氣色を損じて云ひけるは我今日の技倆もまたすでに隆古輩の上にあるを信じて疑はず幽谷を出いで喬木に遷るは我その語を聞く未だ喬木より幽谷に下るを知らず我縦しや不幸にして飢寒の間に九死するもさる淺ましき業をなすこと能はずとあるにその人も口を噤みてまかりきといふ草雲が當時すでに自ら信ずるの太だ高かりしとを見べきなり。

古へより鉅手としてそが名を藝術史に留むる者はあの一癖あるものなるが草雲の如きは尤も酒を嗜みて性命の如く僅かに潤筆料を得ることあらば直



に酒を買ひ酔ひしれば戸をも閉ぢずして出で去りたる草雲の出で去る後は何時も隣家の老婆か代て戸を閉るを例とせしも時には老婆も忘るることありて小盗どもの忍び入りてかけ替のなき器物などを奪ひゆきたるは度々のことにてめづらしからざりきと云ふ。

草雲酔後には必らず吉原に入り流行歌などを謡ひつゝ樓ごとに女郎をなぶり歩き果ては大道の上に仰臥し野蠻雷の如し夜更けて吉原より歸るには常に淺草の奴 鰻どいへる割烹店の前に出でたるがその服装のあやしきゆゑにや何時も奴 鰻にて蓄へる犬が吠へつきて棒を括して相闘ふことを例としたり或る夜のことなるが例の如く犬の出で吠へたれば草雲怒りながら之を追はむとて街上の小石を拾ひしに何ぞ知らむとは石であらで半の糞なりきこの時にはさすが

の草雲は困じ犬と闘ふべき勇氣も退けてとある天水桶にて手を洗ひつゝ歸りきとぞ。草雲また老後酒間に語りて曰く我等の年わかき時は酒に酔ひしれて悪戯をなしたること多かりき或る時二三日の友と共に少酌するに街上たゞく按摩の過ぎ去るあり我等樓上より之を見て試に按摩に戯むれむとて西瓜の半片の肉を剝りぬき竊かに按摩の背後より之を頭巾の如くにその頭にかぶせたるに按摩大に驚きその様太だをかしく昔手を拍つて笑ひきこの後その按摩に逢ひしに殿たちは甚しき悪戯をせらるゝものかな幾回も我が頭を洗ひたれど西瓜の香失せず蚊、蠅などの頭に群がりたるには困しきと今思ひ出るも吹いたす心地すと草雲が當時の狂態をほむねこの類なりき。

草雲の行 狀かくの如くなりしかば其の窮困益々

甚しく厨 上つねに冷かなりき。或る時家にあるほどの物は悉く賣り盡して既に一長物を留めず米を求むること能はずして尙ほ何をがなど見るに蕎麥屋の蒸籠五六個座にまみれて厨 上に轉がれりそは蕎麥屋が之を取りに来ることを忘れ何處へか轉居し去りてそのまゝにすておきたるものなり草雲手を拍つて曰く天わが書を愛し我をして餓死せしめずと直に之を屑屋に與へ四五百の青錢を得て僅かに一時の飢を凌きたりきとぞ。

またその頃のことなるが草雲は羽織も袴も悉く典じ盡し外に出ることもなりがたく古綿衣一枚にて寒氣にちのくきつゝ閉居したるに時たまゝ客の來り訪ふ者あり草雲早くも客の羽織に目をつけて曰く我が訪ふべき方あれど衣なき爲めに意ならずも久しく過ぎ去りたりき願はくは子の羽織を我に貸せよ暫らく

待ちてあるか中には歸り來るべしとて強ちに奮ふが如く之を借りて出で去りき客は草雲が直に歸るとの言をたのみに待ちて今かゝと日を暮らせと歸らず客も詮方なくて草雲が二三宿して歸り來りしまで留守居をなしたりきと云ふ。當時草雲が洗ふが如き貧居の様想見すべきなり。はじめ草雲の脱藩するや川上重右衛門ふかくその材を惜み百方之を探りて得ず數年を経て今漸く今戸に在るを聞き直に來り訪ひて歸參をすゝむること太だ切なり然れど草雲かたく謝して肯かす我今歸るも戸田氏の爲めに寸功をなすこと能はざるなり我すでに戸田氏を辭したるからは仙臺薩摩の大諸侯が千石二千石の厚祿をもて迎ふるも盟つて二君に仕へず兄姉ふ我が心を諒せよとあるに重右衛門もさまで思ひきはめたる上は更に言はずとて歸りぬ。



淺草今戸に松井彌左衛門尙之(一)に新左衛門に作れり後に改名せしならむか)といへる者あり累世陶器御用を以て徳川氏に仕ふその系譜を按ずるに松井氏もど新田義重に出づ義重の後或ひは徳川と云ひ或ひは世良田と云ひ或ひは松平と云ひ或ひは三河に居り或ひは上野に居り世々豪族たり義重十八世の孫貞行なる者あり徳川家康に従ふて天目山に戦ひ父子共に戦死す貞行弟あり貞好といふ天性柔弱にして武を好まず久しく退隱の志ありけるが父兄の戦死せしより益すその志を果さむことを思ひ潜かに三河國東條村に隠れ陶器を作るをもて生計とし姓を改めて松井氏といひぬ武田氏の亡ぶや家康諸將の功を論じて貞行の弟の東條村に在るを知り乃ち召見して之に諫を興へむとす貞好謝するに性怯にして武事に堪えざるをもてし且つ云ひけるは我すでに祖宗の業を辱

めて身を市井の間に棄てたり何の面目ありてか諸人に見えむや君もし先臣の遺勳を捨て玉はずむば臣をして陶工となることを許し玉は願足れり祿賜の如きは敢て望む所にあらずと家康云ふ然りと雖も忠臣の後には賞なかるべからずとて親しく書して曰く子々孫々に至るまで謀反の徒あるも一世に三たびその罪を赦すと或る時家康たましく貞好の家に来る貞好乃ち鑿するに自ら製する所の陶器をもてす家康大に之を賞し陶器御用を命ずこの後家康の江戸に入るや貞好もまた従ふて来る家康之に第宅を今戸に賜ひてその子孫長く陶器御用を勤ることを命ずこれより松井氏は今戸の名家たりき貞好より以後世々その職を傳ふること八世にして彌左衛門尙之に至りぬこの彌左衛門は人と爲り篤實の士にして風流韻事をも好みたりしかば常に加藤梅翁とも相往來して最も親しく

交りたるが梅翁の家にて草雲を一目し未だのもしき少年よと思ひしかばをりくそが家に召びて書などを作らしめまたその期をも賑はしたりき。彌左衛門その妻豊以子との間に一男二女あり長女を菊といひ次を金(今なほ生存せり)といふ菊子は行儀見習の爲りにとて幼なき時より幕府の大奥に上り居たりしが二十二歳の時下りて家に歸れり彌左衛門乃ち菊子に諭して曰く梅翁は今こそ見るかげもなき貧乏書師なれどもその氣性いとおもしろき所ありて後は必ず名ある者ともなるべし汝その貧苦を厭はず能く之に仕ふよとて梅翁とも語らひ菊子の爲めに盛に衣服調度の料を備へて草雲に合はせ弘化の初に至りて更にまた清らかなる家を淺草廣小路に求めて夫妻をうつしぬ。

菊子は髪容のかしりいと艶ひやかにして今戸の

評判娘なりその性いとけだかく而かも恭謙にして低らざ當時の女子としての修むべき女紅は更にいはずまたよろづみやびたることを好みて恰かも玉瀾の露袖におけるが如く琴瑟相和し最とたのしく暮して幾ほどもなく一子格太郎を擧げたり。さすかに米の價をも知らぬ家に生れまた八百萬石の大奥に成長したる身なれば世路の困難を知らず始めの中こそ何事も貧乏書師の家には似あはしからざるふしのみ多かりしかど誓しの中にて能く書家の境界を會得し憂きことにもなれて雪間の嫁菜をも摘みつ。草雲が廣小路に移りてよりもその名尙は著はれず書を需る者もなくその貧苦依然として舊の如くなりしかば菊子はちのれが楠 鯛あるは衣服などを典して家計の料に充て草雲をして心を家事に勞することを



なごしめざりき草雲こゝに於いて専ら力を繪事に盡すことを得て人をして刮目して看せしめたるほどの進歩をなしたるはこの間なりき。

その頃草雲は好んで沈南蘋を悦び頗る得る所ありしが忽ちにして物足らぬ心地して善き手本もがなと思ひたるをりしが偶々仇十洲の回錦圖巻を賣る者あり草雲之を一見して大に喜びその價を問へば五十兩なりといふ當時の五十兩は中々草雲の力に及ばず指をくはえて退きしかど懐に絶つこと能はず菊子乃ち百方苦策して金を調へ草雲の爲めに之を購ひき草雲の怡は言ふばかりなく日夜之を展覧して手を釋かず遂に仇氏の妙所を窺ふことを得たり。この後また鏡滄洲の人物畫巻、劉松年の畫錦堂圖巻を得て工夫する所あり。然れど山水に至りては心に自ら足らずとせしが偶々街上を歩して明人盛茂輝の山水を得て

より大に斂法を發明することを得たりきと云ふまた花卉草木を寫すには本草學を知らずはかなはずとてその友なる栗田萬次郎などに謀りて本草に關する諸種の書を覽めて幹葉の發生變化さては花の開落を研究したれば幹は秋にて夏の花をつけたるが如き誤なかりき。

草雲の文晁および梅翁におけるや僅かに東修を執りたりといふに止まるのみにして深く之を叩きたるにはあらず草雲が草雲としての伎倆を得たるは實にこの古蹟を規仍して自ら研究工夫して悟入したるに外ならず。扱て草雲をして斯くまでの伎倆に達せしめたるはこの菊子の恩賚なり然れば菊子は草雲が一生中第一の知音なるべし。

草雲が菊子が助をもて斯くまで修得したりしかどその畫は尙ほ世の賞する所とならず潤筆錢を得ること

なければ一家の生計みな一に菊子が衣服調度のものを買ひ或ひは賣りて支へたりしか坐して食へば山をもの喰にて一二年にして夫妻は着替の衣もなく一家また洗ふが如きの様とはなりぬ。

こゝに於いて草雲菊子と謀りていひけるは今や都下にては我が畫を需る者なしと雖も田舎に行かばまた或ひは之を怡ぶ者なしとも限らず殊に名山大川を涉りて活粉本を見れば大に我が畫の益ともなるべし聊は然か思はずやとあるに菊子もげにもと領きて君が言太だ理ありと思ひ侍へりき家の事は妾が何事をも心得てあれば心おきなく遊歴に出で玉へといふ草雲乃ち勿々に行李を修め先づ日光山に向つて行かむとて家を出で將に日光街道にかゝらむとす處に露店を開きて古道具を售れり草雲何心なく之を見るに最と古びたる書軸あり題して送梅溪北行云々といへ

りそは梅溪といへる人の北國に遊ぶを送りたる詩なり草雲心に思惟へらくこの軸の梅溪とはいつこの世の人なるか之を知りかたけれどその名の同じきのみならず恰かも遊歴の初めにおいて之を見るは何等かの因縁なりとて之を購ひぬ。蓋し草雲が遊歴に出るに當りても一人の詩を賦してその發途を祝する者もなく半肩の行李蕭然として去るに隨で之を得たるは我が行を送られたるがどとき感をなしたるならむか。

かくて草雲はゆく／＼畫を售りつる日光に抵り諸名勝を探り／＼中禪寺に出でつ山の容、湖の面の云ひ知らずをかしきに思はずも數日を過しき。或る日また湖畔にて瞠目の景を寫さむとて徘徊するにふと一の朽木の地に落ちたるを見るにその形恰かも龍の如し草雲之を拾ひ上げて把玩すること良久して後朽木に向つて稱言すらく汝は形こそ龍に似たれど枯